



医学部

所属・職位	医学部 医学科 たけた循環器病学講座・教授		
氏名	秋岡 秀文 (Hidefumi Akioka)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください	

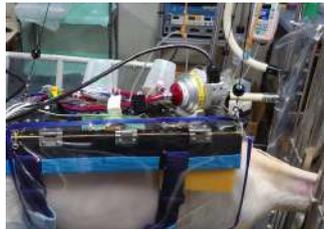
研究分野	循環器学
研究キーワード	急性心筋梗塞、冠攣縮性狭心症、気象、シースレスカテーテル
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ●竹田市における循環器疾患に関する調査およびオンラインシステムの開発 ●急性心筋梗塞発症と気象の関係に関する研究 (論文1, 2) ●シースレスカテーテルに関する調査・分析 (論文3) ●冠攣縮性狭心症に関する研究 (論文4)
研究業績・アピールポイント	<p>1. <u>Akioka H</u>, Yufu K, Teshima Y, Kawano K, Ishii Y, Abe I, Kondo H, Saito S, Fukui A, Okada N, Nagano Y, Shinohara T, Nakagawa M, Hara M, Takahashi N. Seasonal variations of weather conditions on acute myocardial infarction onset: Oita AMI Registry. Heart Vessels. 34(1):9-18, 2019.</p> <p>2. <u>Akioka H</u>, Yufu K, Hara M, Abe I, Kondo H, Saito S, Fukui A, Okada N, Shinohara T, Teshima Y, Nakagawa M, Takahashi N. Impact of Age on Gender Differences in the Acute Myocardial Infarction Onset-Weather Association - Oita AMI Registry. Circ Rep. 2(3):152-157, 2020.</p> <p>3. <u>Akioka H</u>, Yufu K, Harada T, Akamine K, Uemura T, Takahashi M, Nishimizu K, Hirota K, Ishii Y, Kira S, Yonezu K, Abe I, Tawara K, Kondo H, Saito S, Fukui A, Okada N, Shinohara T, Teshima Y, Nakagawa M, Takahashi N. Reduction of bleeding complications on puncture site after percutaneous coronary intervention using a 6.5-French sheathless guiding catheter. Heart Vessels. 37(6):954-960, 2022.</p> <p>4. Tawar K, <u>Akioka H</u>, Sato H, Sato T, Takahashi M, Ogawa N, Aoki T, Harada T, Mitarai K, Yamauchi S, Hirota K, Miyoshi M, Yonezu K, Abe I, Kondo H, Saito S, Fukui A, Fukuda T, Shinohara T, Akiyoshi K, Teshima Y, Yufu K, Nakagawa M, Takahashi N Role of polyunsaturated fatty acids in Japanese patients with coronary spastic angina. J Cardiol 2023;82(6):455-459.</p>

所属・職位	医学部 医学科 放射線医学講座・教授	
氏名	浅山 良樹 (Asayama Yoshiki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2002年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	放射線医学
研究キーワード	画像診断、低侵襲治療
研究内容	<p>①病理学的情報に基づいた画像解析</p> <ul style="list-style-type: none"> 肝細胞癌の脱分化過程におけるvascularityの変化を病理学的、画像的に解析した。腫瘍のvascularityは高分化から中分化までは増殖活性と正比例していたが、中分化から低分化にかけては反比例していた。低分化では嫌気性代謝が中心になっていると考えられた^(論文1)。 <p>②イメージングバイオマーカーとしての放射線画像の役割探求</p> <ul style="list-style-type: none"> 腫瘍形成型肝内胆管癌の予後と造影CT遅延相の増強の程度との関連を検証した。造影遅延相の所見で病変の3分の2以上が高吸収となる群は独立した予後不良因子であった^(論文2)。 肝細胞癌の経血管的治療 (TACE) の予後予測にLI-RADSシステムが有用であった^(論文3)。 <p>③新しい画像診断法の開発と臨床応用</p> <ul style="list-style-type: none"> MRIの新しい分子イメージングの一つであるAPTイメージングで子宮体癌のグレードを予測可能であることを報告した^(文献4)。 <p>④新しい低侵襲治療法の手技の導入と工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 肝細胞癌に対する球状塞栓物質 (ビーズ) を用いた経動脈的化学塞栓療法 (DEB-TACE) の治療効果予測因子を解析した。治療効果不良となる因子は小さな腫瘍サイズ (2cm未満) および病変の局在 (segment 4/1) であった。適切な症例選択の重要性が示唆された^(文献5)。 腎癌凍結療法術後腎機能予測モデルを開発し、慢性腎障害ステージの増悪の予測正診率は72%であり本システムは腎機能低下の予測に有用であることが示された^(文献6)。
研究業績・アピールポイント	<p>これまで放射線画像解析や画像バイオマーカーの創出に取り組みその成果を報告してきた。また凍結療法など新たな低侵襲治療法を積極的に導入し、その効果や合併症を報告した。</p> <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2008年、Arterial blood supply of hepatocellular carcinoma and histologic grading: radiologic-pathologic correlation. AJR Am J Roentgenol. 2006年、Delayed-phase dynamic CT enhancement as a prognostic factor for mass-forming intrahepatic cholangiocarcinoma. Radiology. 2022年、LI-RADS Classification and Outcomes of Hepatocellular Carcinoma Treated With Transcatheter Arterial Chemoembolization Plus Radiofrequency Ablation. Cancer Diagn Progn. 2018年、Proton Transfer MR Imaging of Endometrioid Endometrial Adenocarcinoma: Association with Histologic Grade. Radiology. 2017年、Predictors of therapeutic effect of transarterial chemoembolization using drug-eluting beads for hepatocellular carcinoma. Clin Radiol. 2019年、Usefulness of a Pretreatment CT-Based Modified RENAL Nephrometry Score in Predicting Renal Function After Cryotherapy for T1a Renal Mass. Cardiovasc Intervent Radiol.

所属・職位	医学部 先進医療科学科 臨床医工学コース・教授	
氏名	穴井 博文 (Anai Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	心臓血管外科学、人工臓器学	
研究キーワード	補助循環、人工心臓、産学官連携、医工連携	
研究内容	<p>●人工心臓開発の基礎研究</p> <p>ターボポンプを用いた人工心臓開発における基礎研究を行った。特に溶血の軽減に関して、比速度（設計回転数）の異なる軸流式血液ポンプを試作し、溶血試験で評価を行った。工学的手法に基づく比速度を逸脱しても低回転で設計の方が溶血が軽度であることを明らかにした。また10,000 rpm以下で設計すれば溶血は問題にならないことを示唆した（論文1.）。続けて人工心臓用の斜流式血液ポンプの試作を行った。引き続き斜流式血液ポンプの開発を行った。</p> <p>●体外循環用小型斜流式血液ポンプの開発</p> <p>JMS社（広島市）との共同研究で人工心肺に用いる体外循環用斜流式血液ポンプの開発を行った。自らが研究してきた斜流血液ポンプのアイデアをもとに1996年から共同研究を開始し、2002年にMixflow®を市販、臨床使用に至った。</p> <p>●斜流式血液ポンプの長期使用へ向けての研究</p> <p>JMS社と開発したMixflowをECMOやLVADなどの補助循環用血液ポンプとして使用するための改良と実証研究を行っている。インペラ、ケーシングの設計変更を行い、成山羊を用いた慢性動物実験における評価を行っている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>機械的補助循環、人工心臓開発の研究をもとに開発したJMS Mixflow®を上市するに至った。2012年からは、産学官連携による医療機器開発のための企業研究者支援事業に取り組み、東九州メディカルバレー構想事業、および「地域に密着した医療現場の開放と医療機器開発情報ネットワーク拠点形成」事業をAMEDの支援を得て進めている。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1992年 Relationship between pump speed design and hemolysis in an axial flow blood pump. Anai H, Wakisaka Y, Nakatani T, Taenaka Y, Takano H, Hadama T Artificial Organs, 20: 564-567 1998年 ターボ式血液ポンプ3種の溶血特性の比較検討. 穴井博文, 葉玉哲生, 荒木賢二, 他人工臓器 27 (1): 59-62 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1995年 第33回日本人工臓器学会大会「論文賞」受賞 1996年 第34回日本人工臓器学会大会「JSAO - grant」受賞 2003年 第31回人工心臓と補助循環懇話会「2003年最優秀人工心臓賞」受賞 	



所属・職位	医学部 医学科 救急医学講座・教授	
氏名	安部 隆三 (Abe Ryuzo)	
取得学位	博士 (医学)、千葉大学、2006年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	救急医学, 集中治療医学
研究キーワード	敗血症, 心肺蘇生, 臓器不全, 血液浄化法, 体外式膜型人工肺 (ECMO), 人工肝補助療法
研究内容	<p>1) 【敗血症の病態と治療】 敗血症の重症化における各種サイトカイン動態の関与, サイトカイン関連遺伝子多型の転帰への影響, 血中サイトカイン吸着除去の臨床効果に関する研究を行っている.</p> <p>2) 【心肺蘇生と蘇生後治療】 心拍再開後の蘇生後脳症の転帰を予測するバイオマーカーに関する研究, 低体温療法による心停止後症候群の制御に関する研究, 体外循環を用いた心肺蘇生 (Extracorporeal cardiopulmonary resuscitation: ECPR) に関する臨床研究, 院内急変対応 (Rapid Response System) 活動データを用いた臨床研究を行い, 研究代表者として科学研究費を取得してECPRの研究を進めている.</p> <p>3) 【ECMO (Extracorporeal membrane oxygenation, 体外式膜型人工肺)】 新型コロナウイルスパンデミック以前から基礎実験・臨床研究を行い, ECPRに関する臨床研究, ECMO回路構成に関する基礎実験, ECMOチーム活動の臨床効果について報告している. また日本ECMOnetの立ち上げに参加し, COVID-19に対するECMO治療や日本ECMOnetの活動に関して報告している.</p> <p>4) 【急性肝不全に対する人工肝補助療法】 血液浄化法を用いた人工肝補助療法によって肝性昏睡からの意識覚醒が得られることを報告し, 現在, 厚生労働科研「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究班 (劇症肝炎分科会)」にて更に研究を進めている.</p> <p>5) 【病院前救急医療】 日本医療研究開発機構 (AMED) 研究課題「救急の現場にて傷病者が早く正しい医療を受療できる技術開発プロジェクト」「救急医療予測アルゴリズム研究開発」に研究開発担当者として参加, 新たな救急システム開発を進めている.</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● Higashi A, et al. Shortening of low-flow duration over time was associated with improved outcomes of extracorporeal cardiopulmonary resuscitation in in-hospital cardiac arrest. <i>J Intensive Care</i>. 2020; 8:39 ● Japan ECMOnet for COVID-19. Nationwide system to centralize decisions around ECMO use for severe COVID-19 pneumonia in Japan (Special Correspondence). <i>J Intensive Care</i>. 2020; 8:29. ● Fujiwara K, et al. High recovery rate of consciousness by high-volume filtrate hemodiafiltration for fulminant hepatitis. <i>Hepatol Res</i>. 2019; 49: 224-231 ● Hayashi Y, et al. A prehospital diagnostic algorithm for strokes using machine learning: a prospective observational study. <i>Sci Rep</i>. 2021; 11:20519. ● 基盤研究(C)「ECPR症例における神経学的予後予測バイオマーカーの網羅的探索に関する研究」2020-2022年度 ● 厚生労働科学研究費補助金「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」班, 2020-2022年度 ● 日本医療研究開発機構(AMED) (先進的医療機器・システム等技術開発事業基盤技術開発プロジェクト)「救急医療予測アルゴリズム研究開発」, 2019-2022年

所属・職位	医学部医学科 腎泌尿器外科学（講座）・教授	
氏名	安藤 忠助 (Ando Tadasuke)	
取得学位	博士（医学）、大分医科大学、2006年3月	
SDGs目標		

研究分野	腎不全治療学	
研究キーワード	腎代替療法（透析、腎移植）、生活の質（QOL）	
研究内容	<p>・生命維持に腎臓の機能が不足する状態を腎不全といい、腎不全の患者さんに腎代替療法が行われます。透析患者さんや腎移植患者さんの経過の中で、ある事象を契機としてQOLが変化しうるかどうかを調べています。これらは高齢化社会において患者さんに直結する、貴重な臨床研究と考えています。</p> <p>現在、県内の基幹病院および多職種で連携・協力し、下記臨床研究を行っています。</p> <p>I 腎不全患者さんと男性更年期、QOLの関係 II 腎移植患者さんと男性更年期、QOLの関係 III 新型コロナウイルス感染症と透析患者さんの男性更年期との関係</p> <p>・腎移植の際は、拒絶反応を予防する目的に免疫抑制剤を用います。免疫能が低下する影響で、健常人では問題にならないBKウイルスが腎移植患者さんでは再活性化し、BKウイルス腎症をおこすことがあります。BKウイルス腎症は効果的な治療がなく、移植腎機能を廃絶させることがあります。そこで我々は、抗体ライブラリの中からBKウイルス中和抗体およびその遺伝情報を選択的に抜き出して、BKウイルス治療を目的とする中和抗体製剤を作成することを目標として現在研究中です（競争的獲得資金を取得）。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>・論文</p> <p>2005年 T Ando et al. Int J Urol 12:405-408 T Ando et al. Microbiol Immunol 49(4), 311-322</p> <p>2014年 T Ando et al. Urol Int 93:371-372 T Ando et al. J Vasc Access, 15:432-433</p> <p>2019年 T Ando et al. Renal Replacement Therapy 5:35</p> <p>2022年 T Ando et al. IJU Case Rep. doi: 10.1002/iju5.12460</p> <p>・受賞</p> <p>2013年：大分人工透析研究会 奨励賞 2014年：大分人工透析研究会 奨励賞、九州泌尿器科連合地方会学術集会 会長特別賞 2015年：大分人工透析研究会 奨励賞、西日本泌尿器科学会総会 学術奨励賞</p>	

所属・職位	医学部先進医療科学科臨床医工学コース・教授	
氏名	池内 秀隆 (Ikeuchi Hidetaka)	
取得学位	博士(工学)、九州工業大学、1996年3月	
SDGs目標	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>3 すべての人に健康と福祉を</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>4 質の高い教育をみんなに</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p>  </div> </div>	

研究分野	福祉工学, 制御工学
研究キーワード	歩行訓練, 過渡歩行, 福祉機器, リハビリテーション機器, 力学, 制御

研究内容	<p>●歩行訓練装置の開発 歩行訓練の必要な患者・訓練者を, 上部からの吊り下げ機能により支え, 訓練を行います。足荷重情報を用いて吊り下げ力を制御し, 水中での歩行訓練と同様の効果を得ようとするものです⁽¹⁾。</p>  <p>●床反力可視化フィードバック歩行訓練システムの開発  歩行リハビリテーションでの自主訓練の質を向上し, 患者の機能改善の効率を上げ, 回復期リハビリテーションの限られた期間を有効に活用するため, 視聴覚フィードバック機構を有する自主訓練システムを開発しています。</p> <p>●立ち上がり支援装置・移乗支援装置の開発 障害者・高齢者の立ち上がりや移乗時の支援を行う装置を開発している。足荷重の測定や, 装置の自律化により, 利用者の利便性やリハビリ効果など, 機械化による利点を生かせる機器開発を検討している。</p>  <p>●重度障害児用歩行器電動化装置の評価 重い障害を持つ児童の移動する経験・訓練を行う牽引型歩行器電動化装置に関して, 操作データから発達評価が行えないか, 検討している。</p> 
------	---

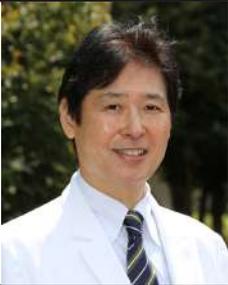
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 吊り上げ式歩行訓練装置の開発と評価, 荒金智, 池内秀隆, 今戸啓二, 大西謙吾, 斉藤之男, 宮川浩臣, ライフサポート, Vol.18, No.9, pp.3-10. Proposal for a Gait Training Device using a Walker with Visual Feedback Function, H. Ikeuchi, Y. Yasuo, K. Fukuyama, M. Ando, Proceedings of the 2018 12th France-Japan and 10th Europe-Asia Congress on Mechatronics, Tsu, Japan, pp.350-354. 足荷重を視聴覚フィードバックする歩行訓練システム, 池内秀隆, 福山慧, 阿部功, 設計工学, Vol.55, No.10, pp.8-14. Development of Sit-to-Stand Support System Using Ground Reaction Force, H. Ikeuchi, M. Nagatoshi, A. Miura, Computers Helping People with Special Needs (14th International Conference, ICCHP 2014 Proceedings), Paris, France, pp.256-259. 遠隔操作により操縦可能な移乗支援機器の開発, 大神優佳, 松尾重明, 阿部功, 三浦篤義, 池内秀隆, 第37回ロボット学会学術講演会, 2019. 重度障害児用牽引型歩行器電動化装置「B-G0」の開発, 相原茂, 武智あかね, 池内秀隆, 後藤保広, 松野奈帆, 池田喜一, 徳丸聖久, 酒井良磨, バイオメカニズム学会誌, Vol143.No.1, pp.55-60
---------------	---

所属・職位	医学部 医学科 薬理学講座・教授	
氏名	石崎 敏理 (Ishizaki Toshimasa)	
取得学位	博士 (医学)、京都大学、1998年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	薬理学・細胞生物学
研究キーワード	アクチン細胞骨格・創薬・組織線維化・腫瘍生物
研究内容	<p>○アクチン細胞骨格を調整するRhoシグナリングの生体での機能 アクチンは哺乳類細胞で最も多く発現しており、個体における生体恒常性にも重要な働きをしていることが報告されている。細胞外からの様々な刺激に応答して、アクチン単量体は重合し線維を形成する(アクチン細胞骨格再編成)。このアクチン線維形成にはRho family GTPaseが寄与していることが明らかになっている。その中でもRhoは、下流標的蛋白質(ROCK, mDia等)を介し、アクチン線維形成の形成・再編成に主要な働きをしている。現在は、皮膚・心臓・肺・腎臓等の各組織において、Rho標的蛋白質を欠損させ、生体におけるRho標的蛋白質の機能解析を通じ、アクチン細胞骨格再編成の果たす生理的・病態生理的な役割を解析している。</p> <p>○創薬 特発性肺線維症とは、肺泡に“傷”ができ、その修復のためにコラーゲン等が増加することで間質が肥厚し、その結果呼吸障害を引き起こす根本的治療法のない疾患である(特発性肺線維症は、「特発性間質性肺炎」の一種で、国の指定難病に指定)。本疾患の治療を目的に、治療標的分子の同定および治療薬候補化合物の探索を実施している。</p> <p>○新たな創薬プラットフォームの構築 これまでは低分子化合物が「治療薬」の大半を占めていたが、昨今は中分子薬や抗体医薬の開発が進み、現在では様々なモダリティのものが治療に用いられている。それぞれのモダリティは、長所・短所を持ち合わせており、それらを補いながら新規性が高く、効果的にかつ安価に治療薬の開発を目指し、そのプラットフォームの構築を実施している。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Abe A., et al. Disruption of Actin Dynamics Regulated by Rho Effector mDia1 Attenuates Pressure Overload-Induced Cardiac Hypertrophic Responses and Exacerbates Dysfunction. <i>Cardiovasc Res.</i> Jul 9; cvaa206 (2020) 2. Thumkeo D, et.al. mDia1/3-dependent actin polymerization spatiotemporally controls LAT phosphorylation by Zap70 at the immune synapse. <i>Sci Adv.</i> 6(1): eaay2432. (2020) 3. Yamaoka M, et al. PI3K regulates endocytosis after insulin secretion by mediating signaling crosstalk between Arf6 and Rab27a. <i>J Cell Sci.</i> 129: 637-649. (2016) 4. Mizuno H, et al. Rotational movement of the formin mDia1 along the double helical strand of an actin filament. <i>Science.</i> 331:80-83. (2011) 5. Rose R, et al. Structural and mechanistic insights into the interaction between Rho and mammalian Dia. <i>Nature.</i> 435:513-518. (2005) 6. Ishizaki T, et al. Coordination of microtubules and the actin cytoskeleton by the Rho effector mDia1. <i>Nat Cell Biol.</i> 3: 8-14. (2001) 7. Uehata M, Ishizaki T, et al. Calcium sensitization of smooth muscle mediated by a Rho-associated protein kinase in hypertension. <i>Nature</i> 389: 990-994. (1997).

所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座・教授	
氏名	井上 亮 (Inoue Ryo)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	一次性頭痛、高齢者せん妄
研究キーワード	慢性頭痛、片頭痛、薬物乱用頭痛、せん妄、脳血流、睡眠障害
研究内容	<p>・慢性連日性頭痛／薬物乱用頭痛の実態調査および発症要因の検討</p> <p>頭痛や緊張型頭痛があり、これらは有病率が高く、日常生活や仕事に支障をきたす疾患である。しかしながら、適切な自己管理がなされていない場合が多く、職場環境や日常生活環境等により容易に慢性化へつながりやすく、さらに、薬物乱用頭痛に至った場合には根本的な頭痛の対応がなされないままいたずらに時間が経過し、その間辛い状況を我慢しながら日々を送るといった状況に陥ってしまう。薬物乱用頭痛を主とする慢性連日性頭痛の実態を把握し、そのような状況にいたった因子を検討することは今後の快適な就業へつながるのではないかと考える。また、小児、思春期においても慢性連日性頭痛は不登校へつながる重大な問題である。昨今、スマホの使用方による睡眠障害から不登校となる事例もあり、睡眠障害の実態やそれに伴う自律神経障害の把握も必要であろう。</p> <p>・脳血流モニタリングによる高齢者夜間せん妄の看護に関する検討</p> <p>脳血管障害を有する高齢者を対象とし、これまでの急性期管理に加え、NIRS（近赤外線分光法）装置の装着下に脳血流モニタリングを行う。NIRSモニタリング中、看護ケアやバイタルサインの変化に伴う脳血流変動有無の確認、せん妄発症時脳血流変化の確認、せん妄に対するケア実施後の症状変化および脳血流変化の把握等を行い、せん妄予防および早期発見につながるNIRS所見を検討する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>・時間生物学に基づく急性期脳卒中患者の概日リズム再獲得に向けた看護の挑戦 (科学研究費補助金、R3～R7年度)</p> <p>・脳血流モニタリングを用いた高齢者脳血管障害患者に対するせん妄マネジメントの開発 (科学研究費補助金 H25年度～27年度)</p>

所属・職位	医学部 医学科 消化器・小児外科学講座・教授	
氏名	猪股 雅史 (Inomata Masafumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学、内視鏡外科学、腫瘍生物学、AIデータサイエンス
研究キーワード	低侵襲手術、人工知能、産学連携、ビッグデータ、癌治療
研究内容	<p>●内視鏡手術における人工知能を活用した腫瘍局をおよび解剖学的ランドマークの術中リアルタイム指示システム開発 (科学研究費 基盤B：研究代表者)</p> <p>内視鏡手術動画のビッグデータを用いた術中の解剖学的ランドマーク指示機能と特殊光を用いた腫瘍局在の指示機能を併せ持つ、人工知能活用の次世代内視鏡機器システムの開発</p> <p>●人工知能を用いた先進的内視鏡医療システムの開発 (AMED未来医療事業：研究代表者AMEDデジタルトランスフォーメーション事業：分担)</p> <p>安全で精緻な内視鏡手術実現のため、人工知能を用い術中リアルタイムに解剖学的ランドマーク指示しうる先進的内視鏡医療システムを開発し、社会実装を実施 (論文1、特許1、2)</p> <p>●内視鏡手術動画におけるビッグデータベースの基盤構築研究 (AMEDデータベース事業)</p> <p>内視鏡手術動画を集積したビッグデータを確立するため、AMED事業および日本内視鏡外科学会とタイアップし、産業利用可能なシステム構築を実施</p> <p>●消化器外科手術におけるCOVID-19の影響を評価するNCDビッグデータ解析研究 (厚生労働科学研究費補助金 門田班・分担)</p> <p>NCDビッグデータを用い、胃癌・大腸癌・胆嚢良性疾患におけるCOVID-19感染拡大の影響を実施件数および治療成績の観点から明らかにする</p> <p>●大腸癌における内視鏡手術の標準化に向けた大規模多機関共同研究 (AMED革新的がん医療実用化研究事業 金光班・清水班 各分担、内視鏡振興財団)</p> <p>大腸癌に対する腹腔鏡手術・ロボット支援手術の標準化に向けた多機関共同ランダム化比較試験およびNCDビッグデータを用いた観察研究による有用性の評価 (論文2)</p> <p>●抗癌剤脱毛のメカニズム解明と予防薬の開発研究 (株式会社アデランス共同研究)</p> <p>二光子顕微鏡を用いた抗癌剤誘発脱毛のメカニズム解明と、新規抗酸化剤を用いた予防薬の開発研究 (特許5)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>【代表的論文】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Development of Endoscopic Surgery Navigated by Artificial Intelligence Inomata M, Fujinaga A, Nakanuma H, et al. Surg Technol Int, Online, 2021 2) Survival outcomes following laparoscopic versus open D3 dissection for stage II or III colon cancer (JCOG0404): a phase 3, randomised controlled trial. Kitano S, Inomata M, Mizusawa J, et al. Lancet Gastroenterol Hepatol, 2(4) 261-268, 2017 <p>【産学連携による主な共同研究および受託研究】</p> <p>オリンパス株式会社、富士フイルム株式会社、株式会社アデランス、川澄化学工業株式会社、デンケン株式会社、カイゲンファーマ株式会社、株式会社日天領水など</p> <p>【主な特許取得】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 情報処理システム、内視鏡システム、学習済みモデル、2018.11.30 特願2018-044121 2) 小矩形自動フィッティングによる検出部表示技術：2020年9月25日受理 (OU-0437) 3) 光線照射治療装置 (ピロリ菌光線照射治療装置) 2017.9.21 特開2017-164223 4) 医療用組成物 (粘膜挙上剤)：2014.10.6 特開2014-188054 5) がん化学療法誘発脱毛に対する抗脱毛用組成物 2012.3.29 特開2012-62283

所属・職位	医学部 医学科 小児科学講座・教授	
氏名	井原 健二 (Ihara Kenji)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、1996年3月	
SDGs目標	 	

研究分野 小児科学、臨床遺伝学、先天代謝異常症、小児内分泌学

研究キーワード 分子遺伝学、遺伝カウンセリング、希少疾患、遺伝学的診断

研究内容

- 小児の遺伝性疾患の病因・病態解析
周産期から小児期の希少疾患について本学医学部の基礎系講座と協働し分子遺伝学的解析による病因解明と病態解析を進めている (論文1, 2)。
- Hutchinson-Gilford 早老症候群の疫学調査研究 (厚生労働省難治性疾患政策研究事業)
Hutchinson-Gilford 早老症候群の調査研究小班長として国内調査を報告した (論文3)。
また日本人向けホームページを作成し公開した (<http://square.umin.ac.jp/hgps/index.html>)。
- 大分市小児肥満と脂質異常の長期疫学調査
大分市では30年以上前から小学校5年対象に小児生活習慣病検診 (すこやか検診) を実施している。この長期検診データをもとに大分市の10歳児学童の小児肥満と血清脂質に関する27年の長期動向を報告した (論文4)。
- 大分県小児1型糖尿病の発症率に関する長期疫学調査
大分県内の1999年から2021年までの小児1型糖尿病の発症率を調査した結果、COVID-19大流行を含めた23年間で発症率は有意に増加し、世界的なトレンドと一致した (論文5)。
- 新生児マス・スクリーニング保存ろ紙血・小中学生の心臓病検診データを用いた臨床研究
大分市と大分市医師会立アルメイダ病院臨床検査部の協力の下、保存ろ紙を用いたタンデムマス検査の基礎研究 (論文6) や、検診心電図を用いた小児期の心室再分極指標に関わる臨床研究を (論文7) 行っている。

研究業績・アピールポイント

(論文1) Inoue M, Miyahara H, Shiraishi H, Shimizu N, Tsumori M, Kiyota K, Maeda M, Umeda R, Ishitani T, Hanada R, Ihara K, Hanada T: Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. *Sci Rep.* 16:11(1):8392, 2021.

(論文2) Sekiguchi K, Miyahara H, Inoue M, Maeda T, Kiyota K, Sakai K, Hanada T, Ihara K: Metabolome characteristics of liver autophagy deficiency under starvation conditions in infancy. *Nutrients* 13, 3026, 2021.

(論文3) Sato-Kawano N, Takemoto M, Okabe E, Yokote K, Matsuo M, Kosaki R, Ihara K: The clinical characteristics of Asian patients with classical-type Hutchinson-Gilford progeria syndrome. *J Hum Genet.* 62:1031, 2017.

(論文4) Maeda M, Maeda T, Ihara K: Secular Trends in obesity and serum lipid values among children in Oita City, Japan, during a 27-year period. *J Atheroscler Thromb.* 29:1709, 2022.

(論文5) Matsuda F, Itonaga T, Maeda M, Ihara K. Long-term trends of pediatric type 1 diabetes incidence in Japan before and after the COVID-19. *Sci Rep.* 13:5803, 2023.

(論文6) Shimada Y, Kawano N, Goto M, Watanabe H, Ihara K: Stability of amino acids, free and acyl-carnitine in stored dried blood spots. *Pediatr Int.* 64, e15072, 2022.

(論文7) Takeguchi M, Kusumoto S, Sekiguchi K, Suenobu S, Ihara K: Predicting long-term ventricular arrhythmia risk in children with ALL using normal values of ventricular repolarization markers established from Japanese cohort study. *J Clin Med.* 12:4723, 2023.

所属・職位	医学部 医学科 医療倫理学講座・教授	
氏名	今井 浩光 (Imai Hiromitsu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	臨床薬理学、医療倫理学、心身医学
研究キーワード	薬物と労働災害、薬物動態学、臨床研究のインフォームド・コンセント
研究内容	<p>●薬物と労働災害の影響に関する研究</p> <p>労働災害は労働災害防止計画により対策が講じられているが、死傷者数減少の目標達成が困難な状況である。医薬品による作業能力への影響が労働災害の一つの因子であるという仮説を元に、これを検証する研究を進めている。(論文1)</p> <p>●薬物動態や薬理作用に及ぼす因子の研究</p> <p>薬物動態や薬効を修飾する内的(遺伝子型、肝腎機能など)及び外的因子(併用薬、食品など)を評価し、患者個々に最適な薬物投与法を提案することを目的とする。皮膚での薬物動態の解明も関心を持って取り組んでいる。(論文1, 2, 4, 5)</p> <p>●臨床研究における倫理の研究</p> <p>被験者のインフォームド・コンセントは臨床研究でもっとも大切なプロセスであるが、質の保証が困難である。研究に関する対話を多面的に分析し、倫理的に望ましいコミュニケーションのあり方の模索を始め、「真の研究倫理とは」の問いに取り組む。(論文3)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>薬物が人と社会に及ぼすインパクトの精緻な評価と、様々なレベルのコミュニケーションによる課題の解決という軸から、実際に社会で問題となることの分析と解決のための方策を社会に実装することを目標として、領域横断的な研究の展開を目指している。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2023年、Association between psychomotor function and aldehyde dehydrogenase 2 (ALDH2) genotype after consuming barley shochu: A randomized crossover trial. K Matsuura, S Kushio, <u>H Imai</u>, et al. <i>Clin Transl Sci</i>. 16: 686-693. 2022年、Pharmacokinetics of Ianoconazole in human skin after repeated topical application. <u>H Imai</u>, S Hashimoto, R Ninomiya, et al. <i>J Dermatol</i>. 49: 1118-1123. 2022年、Scientific misconduct in sponsored clinical trials in Japan - Published cases are the "tip of the iceberg." K Hirayama, M Kuranari, <u>H Imai</u>, et al. <i>Translat Regulat Sci</i>. 4: 30-36. 2022年、A phase I study to evaluate safety, pharmacokinetics, and pharmacodynamics of respiratory syncytial virus neutralizing monoclonal antibody MK-1654 in healthy Japanese adults. Y Orito, N Otani, <u>H Imai</u>, et al. <i>Clin Transl Sci</i>. 15: 1753-63. 2020年、The μ-opioid receptor gene polymorphism 118A>G weakens the pharmacological action of buprenorphine. <u>H Imai</u>, M Morita, H Morita, et al. <i>Int J Clin Pharmacol Ther</i>. 58: 626-633.

所属・職位	医学部 医学科 臨床薬理学講座・教授	
氏名	上村 尚人 (Uemura Naoto)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年3月	
SDGs目標		

研究分野	臨床薬理学、薬物治療学、早期探索的臨床開発
研究キーワード	早期探索的臨床試験、ヒト初回投与試験、POC試験、臨床分子イメージング、合理的薬物治療、薬物動態、薬力学、
研究内容	<p>大分大学医学部臨床薬理学講座では、現代医学では有効な治療方法のない難病を中心に、新しい治療方法の研究開発に取り組んでいる。</p> <p>講座の関連施設である附属病院臨床薬理センターは我が国を代表する臨床薬理専門施設であり、附属病院に整備されたクリニカルトライアルユニット（臨床試験専用病床）を活用し人を対象とした早期探索的臨床試験を積極的に行なっている。特に、新規医薬品や新しいワクチンなどを人に初めて投与する“ヒト初回投与試験”や、治療概念を確立するための臨床試験としての“POC試験”を数多く実施しており、先端分子イメージングセンターにおいては、新規のPET (Positron Emission Tomography)トレーサーを用いた新薬開発を進めている。</p> <p>これまでに取り組んできたテーマとしては、血管奇形（低分子）、難治性皮膚炎症疾患（低分子）、COVID-19（治療薬）、COVID-19（ワクチン）、新規経口抗真菌薬の開発（低分子）、中性脂肪蓄積心筋血管症の治療薬（中分子）、抗がん剤（肺がん治療薬）の新規製剤開発、中枢作動薬としての抗搔痒薬（低分子）、新規肺線維症の新規（中分子）、乳がん骨転移抑制薬（低分子）、線維筋痛症の治療薬（低分子）、上気道炎ウイルス感染症治療薬（抗体）、NASH（核内受容体作動薬 低分子）、NASH（抗炎症 低分子化合物1）、NASH（抗炎症 低分子化合物2）、進行性骨化性線維異形成症、アルツハイマー病新規PET トレーサー（低分子1）、アルツハイマー病新規PET トレーサー（低分子2）骨代謝診断用新規PET トレーサー、狂犬病（低分子）、ヒト トリパノソーマ症（低分子）、アルコールや違法薬物の体内動態研究、などがある。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Cumulative seroprevalence among healthcare workers after the first wave of the COVID-19 pandemic in El Salvador, Central America. Nakagama Y, Rodriguez-Funes MV, Dominguez R, Candray-Medina KS, Uemura N, Tshibangu-Kabamba E, Nitahara Y, Kaku N, Kaneko A, Kido Y. Clin Microbiol Infect. 2022 Jun (in press)</p> <p>A phase I study to evaluate safety, pharmacokinetics, and pharmacodynamics of respiratory syncytial virus neutralizing monoclonal antibody MK-1654 in healthy Japanese adults. Orito Y, Otani N, Matsumoto Y, Fujimoto K, Oshima N, Maas BM, Caro L, Aliprantis AO, Cox KS, Tokumaru O, Kodama M, Kudo H, Imai H, Uemura N. Clin Transl Sci. 2022 May 3 (in press)</p> <p>A phase I study of high dose camostat mesylate in healthy adults provides a rationale to repurpose the TMPRSS2 inhibitor for the treatment of COVID-19. Kitagawa J, Arai H, Iida H, Mukai J, Furukawa K, Ohtsu S, Nakade S, Hikima T, Haranaka M, Uemura N. Clin Transl Sci. 2021 Sep;14(5):1967-1976</p>

所属・職位	医学部・教授	
氏名	大崎 美泉 (Osaki Yoshimi)	
取得学位	商学修士、早稲田大学、1979年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	医療経営学、病院マネジメント、管理会計
研究キーワード	医療制度改革、病院の経営戦略、病院の経営分析、病院原価計算
研究内容	<p>1. 医療マネジメントに関する研究 疾病構造の変化、超高齢化社会の進展、医療技術の進歩、デジタル社会の出現等医療を取り巻く環境が大きく変化する中で、医療費の高騰による財政逼迫への対応も視野に入れた医療提供体制、医療保険制度、診療報酬制度の現状並びにあり方について考察を行う。</p> <p>2. 医療環境の変化と病院経営に関する研究 医療を取り巻く環境の変化、医療制度改革の進展、あるいは突然生じた新型コロナウイルス感染症問題のように、病院の経営環境が急激に変化し、厳しさを増す中で、地域の医療を担う病院はその生き残りをかけ如何に経営改革を断行していくべきかについて様々な観点から検討を行う。</p> <p>3. 病院のマネジメント・システムの研究 経営環境の変化が厳しさを増す中、これからの病院経営に不可欠な経営戦略、原価計算、経営分析、バランストスコアカード、MRP、ICT、リスクマネジメントといった病院のマネジメントに関する様々な理論や技法について研究を行う。</p> <p>4. データドリブン時代の病院経営に関する研究 医療におけるデータドリブンが叫ばれる中、医療政策等マクロの面においては、レセプトデータやDPCデータなどの積極的な活用が進んでいるものの、個々の医療機関においては、医療専門職の治療内容や医療機関の経営方針を左右するまでの活用には至っていない。電子カルテの情報も視野に入れた多様かつ統合的なデータを活用するデータドリブン時代の病院経営について検討していく。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>(論文)</p> <p>1. 2006年、「DPCと原価計算・管理会計—病院マネジメントへの役立ちを中心として—」(DPC時代の病院原価計算システムに関し、診療科別原価計算の限界と疾患別原価計算の必要性について考察するとともに病院マネジメントにおけるBSCの有用性についても検討した。)</p> <p>2. 2002年、「医療改革へのマネジメント技法の適用について」(医療改革の実現にあたって、マネジメントにおける概念や技法が有用であることを指摘した。医療の質と標準化に関してはクリティカルパス、電子カルテの進展にはABC、その他に予算管理、損益分岐点分析も有用なツールとして適用可能なことを指摘した。)</p> <p>(研究ノート)</p> <p>1. 2012年、「病院経営における経営戦略の展開について」(BSCを採用したデューク小児科病院等の例を参考に、病院マネジメントにおける経営戦略の重要性を指摘するとともに、マクロの医療制度の動向如何によって、ミクロである個々の病院の経営戦略が左右される問題点を検討した。)</p>

所属・職位	医学部 医学科 腫瘍・血液内科学講座・教授
氏名	緒方 正男 (Ogata Masao)
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1998年3月
SDGs目標	  



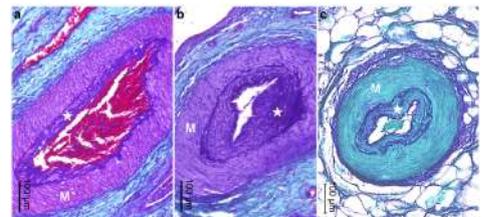
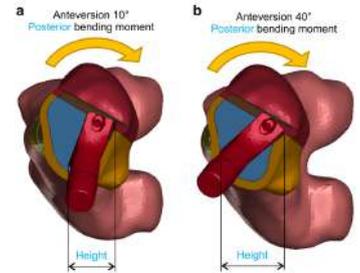
研究分野	血液学
研究キーワード	造血幹細胞移植、ヒトヘルペスウイルス6、HHV-6脳炎、移植後合併症、HTLV-1
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎の疾患概念の確立 同種造血幹細胞移植後に急激に悪化する特異な脳炎を連続して経験しこれがヒトヘルペスウイルス6 (HHV-6) が原因と考え、その疾患単位の確立に取り組んだ。HHV-6再活性化と脳炎発症との関係性について全国多施設前向き観察研究により証明した (論文1)。全国調査を実施し、HHV-6脳炎の臨床像、危険因子や治療と予後との関連について明らかとした (論文2)。これらの成果はHHV-6脳炎の疾患概念の確立に貢献している。 ● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎の治療法の確立 全国調査ではホスカルネット治療が良好な予後と関連することを示した(論文2)。この成果を世界初となる移植後HHV-6脳炎治療薬の保険承認につなげた。HHV-6脳炎発症予防のための多施設介入臨床試験を責任者として実施した (論文3)。移植後HHV-6感染症に関する日本造血幹細胞移植学会ガイドラインを部会長として執筆し(著書1)、欧州骨髓移植学会機関紙にもガイドラインを掲載した (論文4)。このようにHHV-6脳炎の治療で世界をリードしている。 ● 同種造血幹細胞移植後合併症の克服に関する研究 同種造血幹細胞移植後の感染症や臓器障害などの合併症克服のための多数の検討を日本造血細胞移植学会・合併症ワーキンググループにおいて実施した。2015年から2019年まではワーキンググループ責任者として全国の移植医による提案研究に助言と指導を行なった。 ● HTLV-1キャリアの疫学研究 AMED研究事業におけるHTLV-1の全国的疫学研究に研究開発参加者として参加し、感染総合対策の確立に取り組んでいる。
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● 論文 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2013年、Ogata M, et al. Human herpesvirus 6 (HHV-6) reactivation and HHV-6 encephalitis after allogeneic hematopoietic cell transplantation: a multicenter, prospective study. Clin Infect Dis. 2. 2017年、Ogata M, et al. Clinical characteristics and outcome of human herpesvirus-6 encephalitis after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. Bone Marrow Transplant. 3. 2018年、Ogata M, et al. Effects of Prophylactic Foscarnet on Human Herpesvirus-6 Reactivation and Encephalitis in Cord Blood Transplant Recipients: A Prospective Multicenter Trial with an Historical Control Group. Biol Blood Marrow Transplant. 4. 2020年、Ogata M, et al. Clinical practice recommendations for the diagnosis and management of human herpesvirus-6B encephalitis after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. Bone Marrow Transplant. ● 著書 <ol style="list-style-type: none"> 1. 緒方正男、高野久仁子、橋井佳子、植木俊光、森康雄(共著). 造血細胞移植ガイドライン HHV-6 (第2版)、日本造血・免疫細胞療法学会 ● 受賞 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2021年、一般社団法人日本造血細胞移植学会 第3回日本造血細胞移植学会 学会賞 2. 2021年、大分大学学長表彰

所属・職位	医学部 医学科 呼吸器・乳腺外科学講座・教授	
氏名	小副川 敦 (Osoegawa Atsushi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2005年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	腫瘍外科学
研究キーワード	肺癌、分子標的治療、低侵襲医療
研究内容	<p>●肺癌におけるドライバー遺伝子と細胞周期関連遺伝子を標的とした治療開発 ドライバー遺伝子変異を伴う肺癌では分子標的治療が奏効するが、ほとんどの症例は約1年で治療に耐性となる。原因の1つに、併存する遺伝子変化がシグナル伝達に与える影響がある。細胞周期関連遺伝子の発現は分子標的治療における耐性の一因とされており、その機序や、これを克服するための治療開発が急務である(論文1-3)。</p> <p>●肺癌における免疫チェックポイント分子の発現に関する研究 免疫治療は進行非小細胞肺癌に対する治療の重要な一手となったが、バイオマーカーの同定には難航している。肺癌切除標本及び臨床背景から得られるデータをもとに、免疫チェックポイント分子発現のバイオマーカーに関する研究を行っている(論文4-6)。</p> <p>●胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発 ロボット支援下手術は呼吸器外科領域においてもその巧緻性、低侵襲性で有用性が示されている。開胸や胸腔鏡手術と同じ手順で行えるようなアプローチの工夫を行っている。 ※関連リンク：https://researchmap.jp/osoegawa-ths</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文 肺癌におけるドライバー遺伝子と細胞周期関連遺伝子を標的とした治療開発</p> <ol style="list-style-type: none"> 2004年、Osoegawa A, Yoshino I, Tanaka S, Sugio K, Kameyama T, Yamaguchi M, Maehara Y. Regulation of p27 by S-phase kinase-associated protein 2 is associated with aggressiveness in non-small-cell lung cancer. <i>J Clin Oncol.</i> 22:4165-4173 2018年、Osoegawa A, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Yamada T, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, Sugio K. Acquired resistance to an epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) in an uncommon G719S EGFR mutation. <i>Invest New Drugs.</i> 36(6):999-1005 2021年、Osoegawa A, Yamaguchi M, Nakamura T, Morinaga R, Tanaka K, Kashiwabara K, Miura T, Suetsugu T, Harada T, Asoh T, Taguchi K, Nabeshima K, Kishimoto J, Sakai K, Nishio K, Sugio K. High incidence of C797S mutation in patients with long treatment history of EGFR tyrosine kinase inhibitors including osimertinib. <i>JTO Clin Res Rep.</i> 2:100191 <p>肺癌における免疫チェックポイント分子の発現に関する研究</p> <ol style="list-style-type: none"> 2017年、Osoegawa A, Gills JJ, Kawabata S, Dennis PA. Rapamycin sensitizes cancer cells to growth inhibition by the PARP inhibitor olaparib. <i>Oncotarget.</i> 8(50):87044-87053 2021年、Osoegawa A, Takada K, Okamoto T, Sato S, Nagahashi M, Tagawa T, Tsuchida M, Oki E, Okuda S, Wakai T, Mori M. Mutational signatures in squamous cell carcinoma of the lung. <i>J Thorac Dis.</i> 13:1075-1082 2018年、Osoegawa A, Hiraishi H, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Takeuchi H, Miyawaki M, Okamoto T, Sugio K. The positive relationship between γH2AX and PD-L1 expression in lung squamous cell carcinoma. <i>In Vivo.</i> 32(1):171-177

所属・職位	医学部 医学科 整形外科講座・教授	
氏名	加来 信広 (Kaku Nobuhiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2002年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	整形外科
研究キーワード	股関節、バイオメカニクス、微小解剖
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 股関節疾患の診断および治療に関する研究 股関節に関わる治療改善のため、疾患の特徴、診断方法及び外科治療効果について、臨床的成績を報告している。人工骨頭置換術については、QOLを含めた術後の成績を疾患ごとに綿密に明らかにしてきた。インプラント自体のデザインや材質も改良してきた。人工股関節全置換術においては、インプラントの設置精度改善に対するNavigation systemの有効性について、初回手術および再置換術に対しても検討している。適切な脚長補正を行うための新しい術中確認法を報告してきた。股関節疾患診断のため、FDG-PETの可能性について評価した。寛骨臼形成不全の骨盤の解剖学的特徴や加齢に伴う大腿骨の弯曲変形について、その特徴と影響について検討している。 ● 股関節のバイオメカニクスに関する研究 3次元有限要素法や治具を用いて、人工関節のデザインや設置条件が及ぼす特徴や影響について検討している。またコンピュータソフトを用いて、最大の可動域を得るための適切なインプラント設置や手術手技をシミュレーション研究から探求している。 ● 股関節の微小解剖学に関する研究 特別な処理を行うことによって、股関節を構成する靭帯、関節唇、軟骨や骨のコラーゲン線維を明確に描出し、電子顕微鏡を用いて観察している。免疫染色も加えて、血管や神経の形態と走行の特徴も明確にしている。これらの微小解剖に対する加齢の影響について検討している。
研究業績・アピールポイント	<p>股関節外科に関わる基礎的及び臨床的研究を多方面から行っているが、すぐに役立つ知見だけでなく、長期的な研究を支える知見も得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 論文 <ol style="list-style-type: none"> 2022年、Microvascular system of hip joint constituents with special reference to ultrastructural findings and early arteriosclerosis. 2019年、Efficacy of Vitamin E for Mechanical Damage and Oxidation of Polyethylene Rim by Stem Neck Impingement. ● 著書 <ol style="list-style-type: none"> 2019年、受診時年齢別発育性股関節形成不全の診かた・治しかた (分担) ● 受賞 <ol style="list-style-type: none"> 2018年、NPO運動器医療ネットワークおおいた 優秀賞



所属・職位	医学部看護学科 基盤看護学講座 健康科学領域・教授	
氏名	加隈 哲也 (KAKUMA TETSUYA)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1996年3月	
SDGs目標	 	

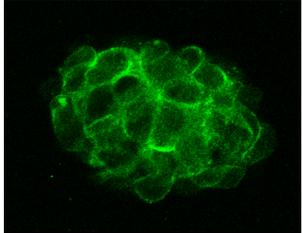
研究分野	内分泌代謝内科学、栄養学および健康科学	
研究キーワード	肥満症、メタボリックシンドローム、行動療法、生活習慣改善	
研究内容	<p>●大学生世代の体重管理と生活習慣改善指導 我々は、毎日の体重測定、運動習慣、夜食の頻回摂取、清涼飲料水の過量摂取の有無と比較して、朝食を欠食する大学生は、入学時から5年生までの体重増加が最も大きいことを報告した (Kakuma T et al. J Endocrinol Metab 2020-1[論文1])。朝食を欠食する学生は、食行動は控えめだが、朝が弱く、夜型の生活パターンを示す。夜型の生活リズムは、時間生物学の観点からも、体重が増加しやすいことが報告されており、生活リズム異常を起こさないためにも、朝食の摂取は重要である。 平均年齢25歳の大学生世代で男女を含む集団においては、BMIやウエスト周囲長より、ウエスト周囲長/身長が内臓脂肪蓄積を評価し糖代謝異常の予防を検討する上で有用なマーカーになること (加隈哲也他. CAMPUS HEALTH 2019-1)。内臓脂肪量の影響が少ない大学生世代では、インスリン分泌能は、運動習慣や食習慣、体格より、性差で規定される部分が多いことがわかった (加隈哲也他. CAMPUS HEALTH 2019-2)。また毎日体重測定する学生は26.8%であったが、体重測定習慣の認識には男女の違いがあり、食習慣や運動習慣との相乗効果が観察された (Kakuma T et al. J Endocrinol Metab 2020-2)。</p> <p>●血糖のセルフモニタリングを用いた定期健康診断後の保健指導 耐糖能障害の高リスク職員 (HbA1c 6%以上、あるいはHbA1c 5.6%以上で、かつ、BMI 25kg/m²以上またはウエスト周囲長 男性85cm、女性 90cm以上) に対して、希望者に間欠的持続血糖測定器 (isCGM) を用いた14日間の血糖セルフモニタリングを実施した。参加者には気づきの機会が与えられるように配慮し、自由に何度でも血糖測定ができることだけを説明し、具体的な生活指導はしなかった。isCGM実施群では、生活習慣を改善しようとする前向きな行動変化が観察され、生活習慣病治療薬を内服する職員の割合が有意に増加していた。また服薬の変更がない職員の検討では、isCGM実施群では、体重、ウエスト周囲長の減少とともに、血圧、肝機能の改善が認められ、それが3年後も維持されていた。一日の測定回数が多い人ほど、日常生活の改善に向けて意識が高まっており、肥満症・糖尿病に対する治療意欲が有意に上がっていた、一方で、1日の平均血糖値にはその関係は見られなかった (Kakuma T et al. J Endocrinol Metab 2023[論文2])。血糖値の変化を知ることはもちろん大事であるが、データを気にして測定する行為 (セルフモニタリング) が行動変容の起点になることを示している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>専門分野は内分泌代謝学であり、肥満症としての生活習慣病である。治療者からの指摘ではなく、対象者が自らの意思で行動変容するという方法論を追求している。これを『大学生や職員のメタボ発症予防や改善』に活かしていければと考えている。</p> <p>●論文 1、Effects of self-awareness of eating behaviors and differences in daily habits among Japanese university students on changes in weight and metabolism. Kakuma T, Yoshida Y, Okamoto M, Shibata H, Tsutsumi T, Kudo Y. J Endocrinol Metab.10: 131-139, 2020 2、Application of self-monitoring of blood glucose by intermittently scanned continuous glucose monitoring to lifestyle improvement after health checkup. Kakuma T, Tsutsumi T, Kudo Y. J Endocrinol Metab.13: 57-69, 2023.</p> <p>●受賞 1、2010年5月、第53回日本糖尿病学会年次学術集会 プレジデントポスター賞 2、2017年11月、第55回全国大学保健管理研究集会 優秀演題賞 3、2019年5月、Metabolism reviewer-award 2018 4、2021年10月、第59回全国大学保健管理研究集会 優秀演題賞</p>	

所属・職位	医学部先進医療科学科生命健康科学コース・教授	
氏名	加藤 優子 (Kato Yuko)	
取得学位	博士(医学)、横浜市立大学、2016年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	病態検査学 循環生理学、細胞生物学
研究キーワード	血管リモデリング、血管平滑筋細胞、細胞老化、細胞遊走、バイオマーカー
研究内容	<p>●粥状動脈硬化における血管老化の役割の解明 高齢者人口は増加しており、血管の老化は粥状動脈硬化の主要な危険因子である。動脈壁の主要な構成細胞である血管平滑筋細胞の老化に着目し、粥状動脈硬化における血管老化の役割を解明する。</p> <p>●高圧力環境と炎症に着目した肺動脈性肺高血圧症の病態解明とバイオマーカー探索 肺動脈性肺高血圧症は肺動脈圧の高度上昇をきたす難治性疾患で、早期診断が極めて困難である。独自に開発した周期的加圧培養装置と三次元血管モデルを用い、肺動脈性肺高血圧症の早期診断に有用なバイオマーカーを見出す。</p> <p>●細胞外マトリクスの連関に着目した血管内膜肥厚形成メカニズムの解明 血管の内膜が徐々に肥厚して内腔が狭窄する血管内膜肥厚は、動脈硬化や血管形成術後の血管再狭窄、肺動脈性高血圧といった、臨床上解決すべき血管病に共通する病態である。血管内膜肥厚部で血管平滑筋細胞から産生される細胞外基質の包括的な機能に着目して血管内膜肥厚を形成する分子機序を解明する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Kato Y, et al. Anti-enolase 1 antibodies from a patient with systemic lupus erythematosus accompanied by pulmonary arterial hypertension promote migration of pulmonary artery smooth muscle cells. <i>Immunol Lett.</i> 218, 22–29, 2020 2. Kato Y, et al. Epac1 deficiency inhibits basic fibroblast growth factor-mediated vascular smooth muscle cell migration. <i>J Physiol Sci.</i> 69(2), 175–184, 2019 3. Kato Y, et al. Epac1 deficiency attenuated vascular smooth muscle cell migration and neointimal formation. <i>Arterioscler Thromb Vasc Biol.</i> 35(12), 2617–2625, 2015 4. Takahashi L, Ishigami T, Tomiyama H, Kato Y, et al. Increased Plasma Levels of Myosin Heavy Chain 11 Is Associated with Atherosclerosis. <i>J Clin Med.</i> 10(14), 3155, 2021 5. Saito J, Kojima T, Tanifuji S, Kato Y, et al. Transcriptome Analysis Reveals Differential Gene Expression between the Closing Ductus Arteriosus and the Patent Ductus Arteriosus in Humans. <i>J Cardiovasc Dev Dis.</i> 8(4), 45, 2021 6. Ito S, Yokoyama U, Nakakoji T, Cooley MA, Sasaki T, Hatano S, Kato Y, et al. Fibulin-1 Integrates Subendothelial Extracellular Matrices and Contributes to Anatomical Closure of the Ductus Arteriosus. <i>Arterioscler Thromb Vasc Biol.</i> 40(9), 2212–2226, 2020 7. Nemidkanam V, Kato Y, et al. Ethyl acetate extract of Kaempferia parviflora inhibits Helicobacter pylori-associated mammalian cell inflammation by regulating proinflammatory cytokine expression and leukocyte chemotaxis. <i>BMC Complement Med Ther.</i> 20(1), 124, 2020 8. Foster CF, Satomi S, Kato Y, et al. The caveolar-mitochondrial interface: regulation of cellular metabolism in physiology and pathophysiology. <i>Biochem Soc Trans.</i> 48(1), 165–177, 2020 9. Yokoyama U, Ishiwata R, Jin M, Kato Y, et al. Inhibition of EP4 signaling attenuates aortic aneurysm formation. <i>PLoS One</i> 7(5), e36724, 2012 10. Suzuki S, Yokoyama U, Abe T, Kiyonari H, Yamashita N, Kato Y, et al. Differential roles of Epac in regulating cell death in neuronal and myocardial cells. <i>J Biol Chem.</i> 285, 24248–24259, 2010 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2019年度 第10回 日本生理学会入澤宏・彩記念JPS心臓・循環論文賞, 日本生理学会 2. 2015年度 入澤宏・彩記念若手研究奨励賞, 日本生理学会

所属・職位	医学部 医学科 歯科口腔外科学講座・教授	
氏名	河野 憲司 (Kawano Kenji)	
取得学位	歯学博士、九州大学、1990年1月	
SDGs目標		

研究分野	口腔外科学、口腔病理学、細胞生物学
研究キーワード	口腔癌、口腔潜在的悪性疾患、口腔粘膜疾患、口唇裂、口蓋裂、

研究内容	<p>1. 口腔癌の浸潤・転移に関する研究</p> <p>病理組織学的手法と細胞生物学的手法により口腔扁平上皮癌の浸潤・転移機序の研究を行っている。口腔癌における接着因子（カドヘリン、インテグリン）や細胞外マトリックスの発現と臨床動態の関連を調べ、さらに<i>in vitro</i>三次元癌微小環境モデルを用いて癌細胞の浸潤能と運動能の亢進機序を解析している。</p> <p>2. 癌化リスクの高い口腔潜在的悪性疾患のスクリーニングに関する研究</p> <p>口腔潜在的悪性疾患（口腔癌の前駆疾患）から採取した細胞の遺伝子損傷や癌化関連遺伝子の異常をもとに癌化リスクを評価し、高癌化リスク症例を選別し発癌前に治療を行う。</p> <p>3. 口腔癌および口腔潜在的悪性疾患の疫学的研究</p> <p>大分県内での口腔がん検診、ネパールカトマンズ大学との共同で行っているネパール人の口腔粘膜疾患検診をもとに、口腔潜在的悪性疾患の頻度に関する調査研究を行っている。</p> <p>4. 口唇口蓋裂の手術に関する研究</p> <p>口唇口蓋裂術後の長期的観察により、自然な口唇鼻形態と正常の口腔機能を獲得するための術式の確立を研究している。</p>	 <p>Nカドヘリンを発現する口腔扁平上皮癌細胞株の細胞集塊</p>  <p>micronucleiをもつ異常細胞（口腔白板症の上皮細胞）</p>
	研究業績・アピールポイント	<p>上記の研究成果は次の論文、大学HPで公開している。</p> <p>1. 口腔癌の浸潤・転移に関する研究： Exp Cell Res 262:180-196,2001 Oral Oncol 38:549-556,2002 Head Neck 28:525-533,2006 J Oral Maxillofac Surg Med Pathol 29:116-121, 2017 J Oral Maxillofac Surg Med Pathol 32:400-405, 2020</p> <p>2. 口腔癌および口腔潜在的悪性疾患の疫学的研究： http://www.med.oita-u.ac.jp/rpp/report/2020burst02.pdf https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2019-010.html https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2020-002.html</p>

所属・職位	医学部 医学科 産科婦人科学講座・教授	
氏名	河野 康志 (Kawano Yasushi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年6月	
SDGs目標		

研究分野 生殖医学、生殖内分泌学、生殖免疫学

研究キーワード 卵胞発育、排卵、受精、着床

研究内容

子宮内膜には種々の局所因子が発現している。胚の着床、妊娠の維持には白血球系の免疫担当細胞が関与し、これらの遊走にはサイトカインやケモカインの産生が必要となる。このような物質を促進的に産生調節するのがIL-1、EGFや血小板活性化因子であり、これらの受容体の下流に存在するのが細胞内情報伝達系である。我々は、子宮内膜間質細胞や脱落膜化した細胞における細胞内情報伝達系について検討し、いくつかの経路の活性化で様々な生理活性物質の産生が調節されることを明らかにした。また、培養した子宮内膜間質細胞からサイトカイン(Kawano et al., 2004)や、プロスタグランジン(Kawano et al., 2001)が産生され一方で、これらの産生を抑制的に調節する機序についても検討し、AMPKの活性化が重要な役割を担うことも明らかにした(Kawano et al., 2021)。これらのケモカイン・サイトカイン産生およびプロスタグランジン産生が胚の着床・妊娠維持においてネットワークを形成し、生殖現象に関与していると考えられる。

また、子宮内膜間質細胞は落膜化することで血管新生因子であるVEGFの産生が亢進することも明らかにしてきた(Matsui, Kawano et al., 2004)。脱落膜化現象はプロテアーゼ活性化受容体や上皮成長因子のmRNAおよび蛋白質の発現を増加させ、それらの受容体蛋白を介してIL-8やMMP-1のmRNA発現をさらに増加させた。加えて、脱落膜化により受容体蛋白からの刺激を介して細胞走化性が亢進することが確認でき、脱落膜化により発現が増加するこれらの受容体蛋白を介した細胞内情報伝達系は、着床および妊娠維持に必須であることが確認できた(Goto, Kawano et al., 2018)。さらには、体外受精・胚移植時に子宮内膜の受容能を確認する方法を見出し、着床に関わる遺伝子発現を検討中である(Goto, Kawano et al., 2021)。

研究業績・アピールポイント

Kawano Y, Nakamura S, Fukuda J, Miyakawa I. Synergistic effect of interleukin-1 α and ceramide analogue on production of prostaglandin E2 and F2 α by endometrial stromal cells. Am J Reprod Immunol 46: 393-398, 2001.

Kawano Y, Fukuda J, Nasu K, Matsumoto H, Narahara H, Miyakawa I. Synergistic effects of interleukin (IL)-1 α and ceramide analogue on the production of IL-6, IL-8 and macrophage colony-stimulating factor by endometrial stromal cells. Fertil Steril 82: 1043-1047, 2004.

Matsui N, Kawano Y, Nakamura S, Miyakawa I. Changes of vascular endothelial growth factor production associated with decidualization by human endometrial stromal cells in vitro. Acta Obstet Gynecol Scand 83: 138-143, 2004.

Goto K, Kawano Y, Utsunomiya T, Narahara H. Decidualization modulates a signal transduction system via protease-activated receptor-1 in endometrial stromal cells. Am J Reprod Immunol 80: e13036, 2018.

Goto K, Kawano Y, Utsunomuya T, Narahara H. The possibility of analyzing endometrial receptivity using cells from embryo transfer catheters. Reprod Sci 28: 2623-2629, 2021.

Kawano Y, Sato H, Goto K, Nishida M, Nasu K. The inhibitory effect of AMP-activated protein kinase (AMPK) on chemokine and prostaglandin production in human endometrial stromal cells. Reprod Biol & Endocrinol 19: 188, 2021.

所属・職位	医学部 医学科 神経内科学講座・教授	
氏名	木村 成志 (Kimura Noriyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2007年9月	
SDGs目標	  	

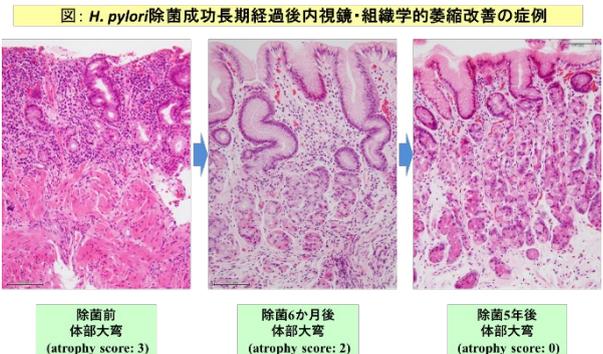
研究分野	新たな認知症予防法の開発
研究キーワード	認知症 生活習慣 神経機能画像
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 新たな認知症リスク因子の発掘に向けた疫学研究 2015年から大分県臼杵市の地域在住高齢者を対象としてウェアラブル生体センサによる生活習慣データの収集、認知機能検査、PET検査を実施し、これらのビッグデータを解析することで科学的根拠のある認知症リスク因子の発掘を目指してきた。65歳以上の高齢者855例（平均年齢73.8±5.8歳）を対象に3カ月ごとの生体センサ装着および年1回の認知機能評価を行い、さらに軽度認知障害(MCI: mild cognitive impairment)にはPiB-PET、FDG-PETを追加した。これまでの横断的解析から①歩数、心拍数、睡眠時間、会話時間がMMSEと関連する、②認知症予防には7791歩以上の歩行、353～434分の睡眠、80～321分の会話が重要である、③睡眠時間は脳内アミロイド蓄積および脳糖代謝量と有意な負の相関を示すことを明らかにした（論文1, 2）。さらに、一日の歩数は、睡眠効率と正の相関、中途覚醒時間、中途覚醒回数、昼寝時間と負の相関を示すことから身体活動が睡眠の質を改善するために効果的であることを明らかにした（論文3）。 ● 認知症および神経変性疾患の早期診断に有用な画像マーカーの開発 アルツハイマー病の早期診断に有用な画像マーカーの探索を目的としてMRI、PiB PET、FDG PETを活用した臨床研究を行ってきた。軽度認知障害および健常者103例を対象とした検討によりMRI、PiB PET、FDG PETを組み合わせることで軽度認知障害の診断精度が向上することを明らかにした（文献4）。さらに、脳血流SPECTを用いて様々な神経変性疾患に特異的な脳血流異常を検討した。①パーキンソン症候群における脳血流異常は各疾患で異なり、早期診断に有用であること、脊髄小脳変性症やアルツハイマー病における治療前後の脳血流量変化が治療効果判定に有用であることを明らかにした（論文4, 5, 6）。
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Ishibashi M, Hori D, Sasaki Y, Nakamichi A, Uesugi S, Fujioka H, Iwao S, Jikumaru M, Katayama T, Sumi K, Eguchi A, Nonaka S, Kakumu M, Matsubara E. Modifiable Lifestyle Factors and Cognitive Function in Older People: A Cross-Sectional Observational Study. Front Neurol. 24;10:401, 2019. 2. Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Ishibashi M, Hori D, Sasaki Y, Nakamichi A, Uesugi S, Jikumaru M, Sumi K, Eguchi A, Obara H, Kakuma T, Matsubara E. Association of Modifiable Lifestyle Factors With Cortical Amyloid Burden and Cerebral Glucose Metabolism in Older Adults With Mild Cognitive Impairment. JAMA Netw Open. 3:e205719, 2020. 3. Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Matsubara E. Association between objectively measured walking steps and sleep in community-dwelling older adults: A prospective cohort study. PLoS One. 15:e0243910, 2020. 4. Kimura N, Hanaki S, Masuda T, Hanaoka T, Hazama Y, Okazaki T, Arakawa R, Kumamoto T. Brain perfusion differences in Parkinsonian disorders. Mov Disord. 26:2530-2537, 2011. 5. Kaneko H, Kimura N, Nojima S, Abe K, Aso Y, Matsubara E. Diagnosis of mild cognitive impairment using multiple neuroimaging modalities in addition to the Mini-Mental State Examination. Geriatr Gerontol Int. 19:1193-1197, 2019. 6. Kimura N, Kumamoto T, Masuda T, Nomura Y, Hanaoka T, Hazama Y, Okazaki T, Arakawa R. Evaluation of the effect of thyrotropin releasing hormone (TRH) on regional cerebral blood flow in spinocerebellar degeneration using 3DSRT. J Neurol Sci. 281:93-98, 2009.

所属・職位	医学部先進医療科学科臨床医工学コース・教授	
氏名	兒玉 雅明 (Kodama Masaaki)	
取得学位	博士(医学)、大分医科大学、1994年3月	
SDGs目標	3 すべての人に健康と福祉を	

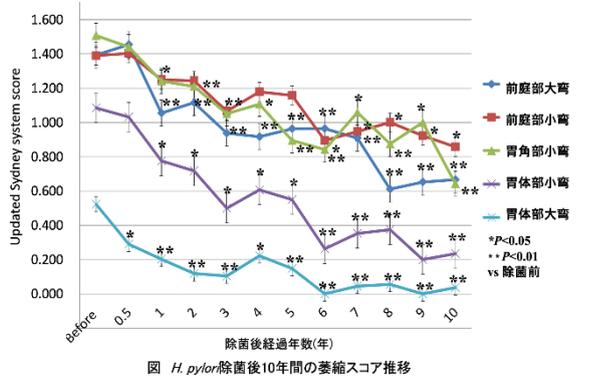
研究分野	生物系、医歯薬学、内科系臨床医学
------	------------------

研究キーワード	上部消化管学(食道、胃、十二指腸)、消化器内視鏡学、 <i>Helicobacter pylori</i> 、胃癌、消化器内科学
---------	--

研究内容	<p><i>Helicobacter pylori</i>と胃炎、胃癌に関する研究</p> <p><i>Helicobacter pylori</i> (<i>H. pylori</i>)は胃炎および胃癌の発原因となることが指摘されている。<i>H. pylori</i>感染により引き起こされる慢性萎縮性胃炎、腸上皮化生は胃癌の前癌病変とされ、本病変に与える除菌治療の効果を検討してきた。すなわち、感染自体による胃粘膜の形態変化、また<i>H. pylori</i>除菌による胃粘膜の変化、すなわち萎縮、腸上皮化生の経時的変化、免疫組織学的な細胞動態、粘液形質、消化管ホルモン発現の変化、そして細胞周期関連遺伝子、癌遺伝子産生蛋白の変化を病理学的、遺伝子学的に追跡し、<i>H. pylori</i>感染と除菌治療による胃粘膜の形態変化、除菌後にできた胃癌特性の解明による除菌後胃癌早期発見・早期治療に向けた取り組みを行っている。</p> <p>特に除菌後長期にわたる胃粘膜の組織学的解析は20年以上にわたって行っており、本学で<i>H. pylori</i>検査、除菌を行ったおよそ10,000例近い症例の組織を用いた研究を行っている。</p>
------	---



研究業績 アピールポイント	<p><i>H. pylori</i>除菌治療は胃粘膜の炎症、萎縮、腸上皮化生に変化を与えることが示唆されている。除菌後10年間から17年間の長期にわたる研究にて胃粘膜の炎症、活動性は除菌後に速やかに改善し、萎縮も徐々に有意な改善を示した。腸上皮化生は胃体小弯のみ6年後より有意な改善を認めた。国際的胃炎分類のシドニーシステムに従って胃の5点から毎年継続的に10年の長期間経過を追った報告は他にはない。ピロリ菌感染症の保険適用拡大に大きく影響を与えた。</p> <p>【論文】・Kodama M, et al. Ten-year prospective follow-up of histological changes at five points on the gastric mucosa as recommended by the updated Sydney system after <i>Helicobacter pylori</i> eradication. J Gastroenterol. 47: 394-403, 2012.</p> <p>・Kodama M, et al. Gastric mucosal changes, and sex differences therein, after <i>Helicobacter pylori</i> eradication: A long-term prospective follow-up study. J Gastroenterol Hepatol. 36:2210-2216, 2021.</p> <p>・Kodama M, et al. Differences in clinical features and morphology between differentiated and undifferentiated gastric cancer after <i>Helicobacter pylori</i> eradication. PLoS One. 2023;18(3):e0282341.</p> <p>【著書】</p> <p>・専門医のための消化器病学(下瀬川 徹、渡辺 守 監修), 第3版、医学書院, 2021. (共著)</p> <p>・矢崎 義雄・小室 一成(総編集) 内科学 第12版, 朝倉書店, 2022. (共著)</p> <p>【受賞】</p> <p>・Distinguished Poster Award, The 6th China-Korea-Japan Joint Conference on <i>Helicobacter</i> infection. 2007.</p> <p>・平成26年度日本消化管学会最優秀サイテーション賞. 2014.</p> <p>・第25回日本ヘリコバクター学会 学術集会優秀賞. 2019.</p>
------------------	---

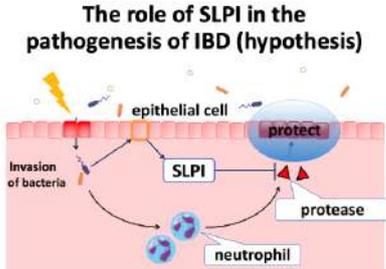


所属・職位	医学部医学科産科学婦人科学講座・教授	
氏名	小林 栄仁 (Kobayashi Eiji)	
取得学位	博士 (医学)、大阪大学、2017年10月	
SDGs目標	 	

研究分野	婦人科腫瘍学
研究キーワード	腹腔鏡下手術、内視鏡外科、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん、医療機器開発
研究内容	<p>●早期子宮頸がんに対する腹腔鏡下手術の有用性に関する臨床試験 先進医療として行われた早期子宮頸がんに対する腹腔鏡下手術の手術成績に関して多施設の手術ビデオを用いて再発群と非再発群での手術手技、習熟を検証した多施設共同試験にて腹腔鏡下手術は一貫して習熟と予後に相関があることを示し、さらに腫瘍露出を回避、保護する手術手技が重要であることを明らかにした。(論文1)。</p> <p>●我が国の早期子宮頸がんに対する腹腔鏡下手術を先進医療から保険収載へ 2014年から開始された早期子宮頸がんに対する先進医療の治療成績を主任研究者として全国データを取りまとめ保険収載に至るまで主導的役割を果たした。(論文2)。</p> <p>●我が国への新たな治療法の導入(卵巣がんに対する低侵襲医療の導入) 本邦で初めて、卵巣悪性腫瘍に対する低侵襲医療の単施設の成績を取りまとめ報告を行い。現在先進医療に当該技術を先進医療に導入するための取り組みを行なっている。(論文3)</p> <p>●医療機器開発 腹腔鏡手術における医療機器の開発；腹腔鏡手術においてカメラポートの汚れは手術の進行および安全性に影響を及ぼす、従来腹腔鏡手術に特化したカメラポートの清掃機器の開発を行なった同製品は上市され183の医療機関にて使用されている。(論文4)</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Kobayashi E, et al. Surgical skill and oncological outcome of laparoscopic radical hysterectomy: JGOG1081s-A1, an ancillary analysis of the Japanese Gynecologic Oncology Group Study JGOG1081. <i>Gynecol Oncol</i> 165: 293-301, 2022. 2. Kobayashi E, et al. A retrospective assessment of the safety and efficacy of laparoscopic radical hysterectomy in Japan during the early years following its introduction: a Japanese Gynecologic Oncology Group study (JGOG1081S). <i>Int J Clin Oncol</i> 26: 417-428, 2021. 3. Kamei Y, Kobayashi E, et al. A single institution's experience with minimally invasive surgery for ovarian cancer, and a systematic meta-analysis of the literature. <i>Int J Clin Oncol</i>. 28(6):794-803. 2023 4. Kobayashi E, et al. A novel device for cleaning the camera port during laparoscopic surgery. <i>Surg Endosc</i> 30: 330-334, 2016. <p>子宮頸がんに対する低侵襲手術の先進医療から保険収載など、婦人科悪性疾患に対する低侵襲医療の導入に精力的に取り組んでまいりました。今後も新規医療および医療機器の開発などを通じ大分大学および大分県の診療、研究、教育に貢献していきたいと思っております。</p>

所属・職位	医学部 医学科 感染予防医学講座・教授	
氏名	小林 隆志 (Kobayashi Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2000年7月	
SDGs目標		

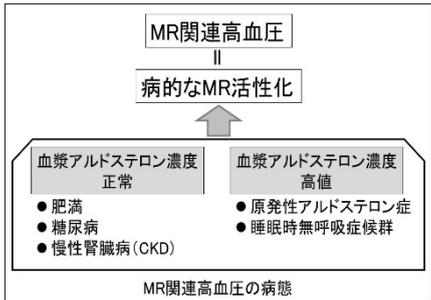
研究分野	免疫学、感染症学、寄生虫学、ウイルス学、分子生物学
研究キーワード	炎症性腸疾患、自己免疫性神経疾患、アルボウイルス感染免疫、アニサキス、がん免疫
研究内容	<p>感染防御に働く免疫システムの分子基盤とその破綻による炎症性疾患の病態を分子レベルで解明し、その成果を病気の予防や治療に結びつけることを目標にしています。</p> <p>1) 炎症性腸疾患の分子免疫学的研究</p> <p>炎症性腸疾患は、自己の免疫細胞が腸組織を攻撃することで消化管粘膜に慢性的な炎症が引き起こされる疾患で、潰瘍性大腸炎とクローン病が知られています。原因は不明ですが、最近の研究で、遺伝子の関与や腸内細菌叢の変化などが指摘されています。私たちはこれまでに新たな抗生物質起因性腸炎モデル動物の作製に成功し (文献1)、このモデルを使った漢方薬の評価を行っています。また、炎症性腸疾患に関連する遺伝子や腸内細菌の研究 (文献2) も進めています。最近、プロテアーゼ阻害因子であるSLPIが炎症性刺激により誘導されて腸管上皮バリアを保護することで腸炎を抑制することが明らかになりました (文献3)。この研究成果は炎症性腸疾患の新規治療薬の開発につながる事が期待されます。</p> <p>2) 多発性硬化症の分子免疫学的研究</p> <p>多発性硬化症は、自己の免疫細胞が神経細胞の軸索を覆っているミエリンを攻撃することで脱髄がおき、運動障害、感覚障害、視覚障害などが引き起こされます。私たちはT細胞におけるシグナル伝達分子TRAF6やT細胞の遊走を制御する種々のケモカイン・ケモカイン受容体が病態形成におよぼす役割について遺伝子改変マウスを用いて解析しています。これらの研究により、この病気の発症に重要な分子が明らかになってきました。</p> <p>3) 蚊媒介性ウイルスの研究</p> <p>チクングニアウイルスは蚊によって媒介され、非常に重篤な関節痛を伴うチクングニア熱を引き起こします。私たちは、RT-LAMP法を応用した迅速で簡便な診断法を開発しました (文献4)。また、蚊の吸血でジカ熱を引き起こすジカウイルスは、C型肝炎ウイルス治療薬のリバビリンによって抑制されることを明らかにしました (文献5)。</p> <p>4) アニサキスの研究</p> <p>大分特産の関サバは、他のサバに比べアニサキスの寄生率が低いことを明らかにしました (文献6)。現在、アニサキス感染の激症化の解明に取り組んでいます。</p>

研究業績・アピールポイント	<p>私たちはゲノム編集技術を用いて遺伝子改変マウスを作製し病態解析を行っています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2018年、Sonoda et al., <i>Genes Cells</i> 23(12) 1043-1055. 2018年、Gendo et al., <i>Inflamm Intest Dis</i> 3(3) 145-154. 2021年、Ozaka et al., <i>Genes Cells</i> 26(10) 807-822. 2020年、Saechue et al., <i>Genes Cells</i> 25(9) 615-625. 2017年、Kamiyama et al., <i>Antiviral Res</i> 146 1-11. 2021年、Hidano et al., <i>Jpn J Infect Dis</i> 74(5):387-391. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2022年、中村丁次 監修、国民の栄養白書 2021年度版 - 日本の食と栄養が創る新時代の健康 小坂聡太郎、小林隆志 日本人の身体に合った食事 ～腸内環境から考える日本人の理想の食～ 日本医療企画 	
---------------	--	---

所属・職位	医学部 医学科 呼吸器・感染症内科学講座・教授	
氏名	小宮 幸作 (Komiya Kosaku)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年3月 修士 (公衆衛生)、聖路加国際大学、2019年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	呼吸器内科学、感染症学	
研究キーワード	肺炎、結核、非結核性抗酸菌症、慢性気道炎症、臨床研修	
研究内容	<p>●市中肺炎における予後予測因子と治療戦略に関する研究</p> <p>肺炎患者における予後因子を、肺炎発症の機序の視点から解析している。日本呼吸器学会の成人肺炎診療ガイドラインに携わり、各種システマティック・レビューも行っている。また、誤嚥性肺炎として世界で初めての英文教科書を編者として出版した。</p> <p>Shinji Teramoto and Kosaku Komiya, editors. Aspiration Pneumonia; The Current Clinical Giant for Respiratory Physicians, Shinji Teramoto and Kosaku Komiya Eds., Springer Nature Singapore Pte Ltd., 17th June 2020</p> <p>Komiya K, Rubin BK, Kadota JI, Mukae H, Akaba T, Moro H, Aoki N, Tsukada H, Noguchi S, Shime N, Takahashi O, Kohno S. Prognostic implications of aspiration pneumonia in patients with community acquired pneumonia: A systematic review with meta-analysis. Sci Rep. 2016 Dec 7;6:38097.</p> <p>●結核・非結核性抗酸菌症に関する臨床研究</p> <p>2017年より大分県委託事業である結核医療体制強化事業を担当し、公衆衛生修士としての視点から日本における結核診療の課題に関連する研究を多く行っている。日本結核・非結核性抗酸菌症学会が出版している結核診療ガイドの作成委員を努めた。</p> <p>Shuto H, Komiya K, Goto A, Kan T, Honjo K, Uchida S, Takikawa S, Yoshimatsu T, Yamasue M, Hiramatsu K, Kadota JI. Efficacy and safety of fluoroquinolone-containing regimens in treating pulmonary Mycobacterium avium complex disease: A propensity score analysis. PLoS One. 2020 Jul 9;15(7):e0235797.</p> <p>●気道炎症に関する基礎的研究</p> <p>慢性気道炎症における病態の解明、マクロライド系抗菌薬、抗コリン薬などの薬剤の影響について研究を行っている。</p> <p>Davis MD, Suzaki I, Kawano S, Komiya K, Cai Q, Oh Y, Rubin BK. Tissue Factor Facilitates Wound Healing in Human Airway Epithelial Cells. Chest. 2019 Mar;155(3):534-539.</p> <p>Komiya K, Ohta S, Arima K, Ogawa M, Suzuki S, Mitamura Y, Nunomura S, Nanri Y, Yoshihara T, Kawaguchi A, Kadota JI, Rubin BK, Izuhara K. Clarithromycin attenuates IL-13-induced periostin production in human lung fibroblasts. Respir Res. 2017 Feb 20;18(1):37.</p>	
研究業績・アピールポイント	肺炎に関連する臨床研究および気道炎症における基礎研究において、米国胸部疾患学会から2回の受賞歴がある。国内各学会からもそれぞれの分野で受賞している。日本呼吸器学会においては、成人肺炎診療ガイドライン作成委員およびCOVID-19診療expert opinionワーキング委員を担当し、日本感染症学会では、臨床研究促進委員会委員、JAID/JSC感染症治療ガイド・ガイドライン作成委員 (呼吸器感染症領域)、臨床研究促進委員会委員、気道感染症抗菌薬適正使用委員会委員、全国レジオネラ症ワーキンググループ委員、DPCを用いた臨床研究に関するアドホック委員会委員等を担当している。研究業績を元に学会活動では中心的役割を果たしており、論文のみならず多くの書籍等も執筆している。	

所属・職位	医学部 医学科 公衆衛生・疫学講座・教授	
氏名	斉藤 功 (Saito Isao)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年9月	
SDGs目標	 	
研究分野	公衆衛生・疫学分野	
研究キーワード	循環器疾患の疫学, 危険因子, 健康の社会的決定要因, コホート研究	
研究内容	<p>●新たな循環器疾患危険因子の探索とその予防方法の確立</p> <p>地域における数千から数十万人の参加者からなるコホート研究を通じて循環器疾患や生命予後に及ぼす新たな危険因子の探索を行っている。脂質異常, 高血圧, 糖尿病, 肥満といった古典的な危険因子からメタボリックシンドローム, 炎症, そして社会心理的要因に至る新たなエビデンスの構築を行ってきた。とりわけ自律神経系機能の指標である心拍変動に関する約5千人規模のコホート研究を構築し, 糖尿病や循環器疾患発症といったアウトカムとの関連について機械学習の分析手法も取り入れながら分析を進めているところは独自性がある。自律神経系機能が示す交感神経や副交感神経の機能指標は, 健康の社会的決定要因とされる社会環境や社会的な格差と生活習慣病発症とをリンクしており, アウトカムの新たな予測因子としての可能性を有する。また, 社会的格差がもたらす健康影響について科学的に明らかにすることは公衆衛生領域におけるこれからの主な研究テーマである。(文献1~5)</p> <p>●自治体との協同による公衆衛生活動の実践と評価に関する研究</p> <p>自治体の公衆衛生部門と連携し, 地域の健康増進に資するデータ分析, レセプト分析を行いながら地域医療構想, あるいは健康づくり計画に係る委員会委員としての実践活動を行っている。保健師, 管理栄養士等の多職種と共同で公衆衛生活動を展開しながらその評価にかかる研究を行っている。 ※関連リンク：http://www.med.oita-u.ac.jp/phealth1/</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>米国ARIC研究や国内JPHC研究等, 国内外の代表的なコホート研究に関わった。TOON HEALTH STUDY等の新たなコホート研究を創設し地域の公衆衛生活動を実践してきた。 (主な論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Saito I, et al. Nontraditional risk factors for coronary heart disease incidence among persons with diabetes: The Atherosclerosis Risk in Communities (ARIC) Study. <i>Ann Intern Med</i> 2000;133:81-91. 2. Saito I, et al. Comparison of fatal coronary heart disease occurrence based on population surveys in Japan and the USA. <i>Int J Epidemiol</i> 2000;29:837-844. 3. Saito I, et al. Body mass index, weight change and risk of stroke and stroke subtypes: the Japan Public Health Center-based prospective (JPHC) study. <i>Int J Obesity</i> 2011;35:283-291. 4. Saito I, et al. Association between mortality and incidence rates of coronary heart disease and stroke: The Japan Public Health Center-based prospective (JPHC) study. <i>Int J Cardiol</i> 2016;222:281-286. 5. Saito I, et al. Association between heart rate variability and home blood pressure: The Toon Health Study. <i>Am J Hypertens</i>. 2018;31:1120-1126. 	

所属・職位	医学部 医学科 内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座・教授	
氏名	柴田 洋孝 (Shibata Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、慶應義塾大学、1993年1月	
SDGs目標	  	

研究分野	内分泌代謝学	
研究キーワード	高血圧、副腎、アルドステロン、糖尿病、慢性腎臓病	
研究内容	<p>1. 原発性アルドステロン症患者のQOLを重視した最適治療法の検討</p> <p>国内外の原発性アルドステロン症や高血圧の診療ガイドラインを策定した（副委員長）。さらに、大分大学BURST認定の研究チーム「OPAT（大分大学原発性アルドステロン症研究チーム）」の責任者として、本疾患の最適治療と臨床評価をテーマに活動している。</p>	
	<p>2. 肥満、糖尿病、慢性腎臓病に合併する高血圧および臓器障害の分子機構の解明：新規病態「MR関連高血圧」の提唱</p> <p>肥満、糖尿病、慢性腎臓病患者ではミネラルコルチコイド受容体（MR）の過剰な活性化が高血圧や臓器障害に関わるという新規病態「MR関連高血圧」を世界で初めて提唱し、基礎・臨床研究を展開している。</p>	
	<p>3. 糖尿病性腎症重症化予防につながる早期発見マーカーの確立と治療戦略の確立</p> <p>健康寿命の延伸を目指し、大分大学—大分県医師会—大分県の3者連携締結による糖尿病性腎症重症化予防推進事業や「肥満・糖尿病先進治療センター」を開設して、肥満、糖尿病患者に対して食事、運動、行動療法と先進的な薬物、肥満外科治療を多職種協働で展開している。腎症重症化の早期発見バイオマーカーの探索研究やエビデンスに基づく薬物療法により大分県民の健康寿命延伸を目指している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>1. ヒト副腎におけるアルドステロン合成酵素（CYP11B2）の単離精製 (Ogishima, Shibata et al. J Biol Chem, 1991) を世界に先駆けて成功し、CYP11B2特異抗体により、アルドステロン産生細胞を可視化した (Nishimoto, Shibata, et al. J Clin Endocrinol Metab, 2010)。</p> <p>2. 新規病態「MR関連高血圧」の確立：数種類のMR転写共役因子の基礎研究の結果から (Hayashi, Shibata, et al. Int Heart J, 2017; Nakamura, Shibata, et al. J Am Heart Assoc, 2018, Jo, Shibata, et al. Hypertens Res 2023) MRの翻訳後蛋白修飾による活性化機構の解明から新規病態「MR関連高血圧」を提唱した (Shibata and Itoh. Am J Hypertens 2012)。さらに糖尿病性網膜症がMR関連高血圧・臓器障害の結果であることも明らかにした (Sada, Yoshida, Shibata, et al. J Clin Endocrinol Metab 2023)。 https://researchmap.jp/read0162153</p> <p>3. CLEIA法による新規アルドステロン測定法の確立に成功し (Ozeki, Shibata, et al. Diagnostics, 2021; Frontiers in Endocrinology, 2022)、従来法より精密なLC-MS/MS相当値が実測可能となり、原発性アルドステロン症の新ガイドラインの改訂に貢献した。</p>	

所属・職位	医学部 消化器・小児外科学講座・教授	
氏名	白下 英史 (Shiroshita Hidefumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2004年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学
研究キーワード	内視鏡外科、低侵襲手術、外科腫瘍学、腸内細菌叢
研究内容	<p><u>胃癌腹膜播種に対するパルスレーザーを用いた新規光線療法の開発</u> 肉眼的にすべての病巣を診断することが難しく、腸閉塞や腹水により患者QOLを低下させる難治性の胃癌腹膜播種病変に対するより効果的で正常組織に影響の少ないパルスレーザー光線照射を用いた新規治療法を開発することを目的とする。そのために①抗腫瘍効果をしめす至適な照射量の確認、②レーザー光線照射が癌細胞と癌微小環境に与える影響の評価、③内視鏡などに使用される細いファイバーからより広範囲の病変を治療するため、レーザー光を拡散させるデバイスの開発、を行っている。</p> <p><u>COVID-19感染拡大が及ぼす内視鏡下手術への影響の評価</u> NCDデータベースを用いて、COVID-19感染拡大が内視鏡下手術に与えた影響を明らかにすることである。主要な内視鏡下手術の手術件数の変化や手術成績をしらべることにより、COVID-19感染拡大時における内視鏡下手術の問題点や課題を明らかにする。</p> <p><u>大腸癌再発における腸内細菌叢の変化に関する研究</u> 腸内細菌が発癌や予後に影響すると考えられている大腸癌に関して、周術期の腸内細菌叢の構成や変化と大腸癌の再発の有無を調べることにより、大腸癌再発に関与する腸内細菌叢を明らかにする。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1. 2021年、Current Status of Endoscopic Surgery in Japan: The 15th National Survey of Endoscopic Surgery by the Japan Society for Endoscopic Surgery Asian J Endosc Surg. 2021</p> <p>2. 2018 年 Clinical Impact of Laparoscopic Intersphincteric Resection following Neoadjuvant Chemoradiotherapy for Locally Advanced Rectal Cancer: Case controlled study. Annals of Laparoscopic and Endoscopic Surgery, 3:37, 2018</p> <p>3. 2016 年 Prognostic factors in advanced gastric cancer patients with suprapancreatic lymph node metastasis. Journal of Gastrointestinal cancer and stromal tumor. 1: 102, 2016</p> <p>4. 2004年 Re-evaluation of mucin phenotypes of gastric minute well-differentiated-type adenocarcinomas using a series of HGM, MUC5AC, MUC6, M-GGMC, MUC2 and CD10 stains Pathol Int. 54(5):311-21, 2004.</p>

所属・職位	医学部 医学科 腎泌尿器外科学講座・教授	
氏名	秦 聡孝 (Shin Toshitaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	泌尿器科学
研究キーワード	泌尿器腫瘍学、低侵襲手術、画像融合技術、再生医療
研究内容	<p><基礎研究></p> <ul style="list-style-type: none"> ●前立腺癌細胞における前立腺特異抗原(PSA)の転写調節機構の解明 PSAの近位プロモーター領域にはSp1/SP3の結合部位が4カ所あり、そのいずれもが転写活性の上昇に関与しており、もっとも近位側の結合部位が最重要であることを解明した (論文1)。 ●再生医療を見据えた外尿道括約筋の幹細胞である衛星細胞の機能解析 当教室では、これまでに外尿道括約筋の幹細胞である衛星細胞の分離培養・長寿化法などを確立した。今後も尿失禁の病態解明、さらには再生医療への応用へ向けた研究を推進する。 <p><臨床研究></p> <ul style="list-style-type: none"> ●前立腺癌のMRIとMRI/US画像融合下生検に関する研究 MRI/US画像融合技術を用いた前立腺狙撃生検の精度やその臨床的意義、発展的活用法についての研究を行っている。正確な局在診断に基づいた世界初の3Dプリントモデルの開発やロボット手術への応用にも取り組んでいる (論文2, 3, 4、受賞2)。 ●単孔式・減孔式泌尿器腹腔鏡手術の開発 当科が本邦で先駆的に開始した単孔式・減孔式手術は整容性に優れた術式である。本術式では、いかに挿入する鉗子の数を減らすかに工夫が必要であり、われわれは新たなinternal retractorを用いた手技を泌尿器科領域ではじめて報告した (受賞1)。 ●ロボット支援腹腔鏡下手術における新たな術式の開発 ロボット支援膀胱全摘除術後の尿路変向法である回腸導管造設術において、「Early pull out technique」と名付けた新たな完全体腔内での手技を開発した (論文5)。
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●論文 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2005年、Shin T et al. Arch Biochem Biophys. 435: 291-302. 2. 2016年、Shin T et al. Eur Urol. 69: 377-379. 3. 2017年、Shin T et al. BJU Int. 120: 233-238. 4. 2018年、Shin T et al. BJU Int. 121: 77-83. 5. 2021年、Shin T et al. Int J Urol. 28: 778-779. ●受賞 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2012年、30th World Congress of Endourology and SWL (WCE): Olympus Best Paper Award (Best New Innovation Paper) 2. 2016年、The American Urological Association (AUA) 2016 Annual Meeting: AUA 2016 Best Poster

所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座・教授	
氏名	末弘 理恵 (Suehiro Rie)	
取得学位	博士 (保健学)、金沢大学、2011年3月	
SDGs目標	 	

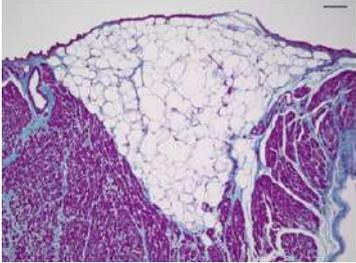
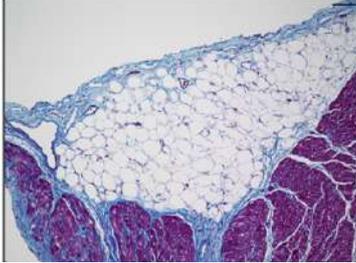
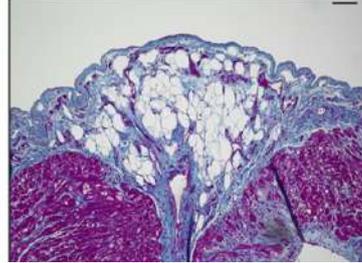
研究分野	クリティカルケア看護、老年看護
研究キーワード	クリティカルケア看護、周手術期、高齢者ケア、せん妄ケア
研究内容	<p>●手術を受ける後期高齢者のケアプログラムの開発</p> <p>手術をうける後期高齢者は、前期高齢者と比べ緊急手術及び術後ICUに入室している者が多かった。ICUでは、早期の苦痛の除去や付添い、リラクゼーションや関心ある話題により睡眠が充足され早期回復につながっていた。一方、手術に対する意思決定を高齢者自身が行い、術後の人生をイメージしていた者は術後のリハビリテーションにも積極的に参加していた。後期高齢者が手術を受ける際には術前より今後生き方を共に考え支援する必要性がある。</p> <p>●ICUにおける高齢患者のケアプログラムの開発</p> <p>ICUに入室する高齢者は成人期患者の7割を占め、入室期間は成人期患者より延長していた(4.2日<5.1日)。看護師は高齢患者のケアにて、多動不穏な状態や睡眠障害等を経験し、患者の現状認知、睡眠覚醒、早期離床を実施していた。一方、せん妄や認知症による意思疎通の障害に困難感を持ち、チーム上の課題として、看護師間のケア方針や内容の不統一、医師との治療方針の共有が示された。ICUでの高齢患者へのケアプログラムにおいては、個別ケアに加え、医療チームで進める必要性が示唆された。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な研究論文・発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Suehiro Rie ; Effect of cerumen removal among institutionalized elderly individuals: Hearing and the relationship between earwax type and accumulation, Journal of the Tsuruma health science society, Kanazawa University, Vol.34 No.2, 1-11,2011. ・ 森淳恵、末弘 理恵、荒川 満枝他：看護系大学卒業生のキャリアとキャリアアップに対する考え、大分大学高等教育センター紀要 第5号 21-27,2013. ・ 尾野亜由美, 末弘理恵：救命救急センターに入院した後期高齢患者の睡眠の実態—非装着型睡眠計を用いた睡眠評価—, 日本老年看護学会 第23回学術集会抄録集, 163, 2018. ・ 末弘理恵、宮脇美菜子：ICUにおける高齢患者のケアの実際、第45回日本看護学会・急性期看護学術集会、269, 2014. <p>●主な科学研究費補助金</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 要支援・要介護高齢者の耳のケア効果に関する介入研究, 2008-2010, 代表 ・ ICUにおける高齢者のケアプログラムの開発, 2011-2014, 代表 ・ 手術を受ける後期高齢者におけるケアプログラムの開発, 2015-2018, 代表 ・ 術後疼痛の症状マネジメントに用いる除痛アルゴリズムと評価指標の構築, 2019-2023, 分担 ・ 認知症を有する後期高齢者のがん患者の人生の最終段階を支える看護のモデル化, 2016-2019, 分担 <p>●受賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 重度認知症高齢者の耳垢蓄積と耳のケアの実態, 日本認知症ケア学会・石崎賞, 2007.

所属・職位	医学部 医学科 診断病理学講座・教授	
氏名	駄阿 勉 (Daa Tsutomu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、1994年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	診断病理学
研究キーワード	唾液腺腫瘍病理
研究内容	<p>●唾液腺腫瘍の病理診断に関する研究</p> <p>唾液腺は食物摂取に関するQOLに関与する重要な臓器であり、大唾液腺、小唾液腺の形で頭頸部領域に広く分布する。他の臓器に例にもれず、唾液腺にも腫瘍性病変が発生するが、他の臓器とことなり、腫瘍発生に関与する細胞が多彩であり、特に筋上皮細胞が関わることにより、その組織形態が多彩であり、組織型の種類も多く、加えて、唾液腺腫瘍は比較的稀であることから、一般病理医にとっては診断の難しい領域となっている。また、近年、キメラ遺伝子や、特定の遺伝子の突然変異等、病理診断に直結する分子病理学異常に関する知見の蓄積が著しく、分子生物学的手法の診断への応用が、正確な病理診断に必須となってきている。当講座においては、免疫染色、PCR、DNAシーケンス解析、RT-PCR、FISHを用い、唾液腺腫瘍の診断に資する新規マーカの検出を試みている。</p> <p>●腫瘍の転移に関する研究</p> <p>健診体制整備による早期発見、有効な分子標的薬の開発等により、癌の治癒率は近年著しく向上しているが、悪性腫瘍は、いまなお、死亡原因一位の地位を保っている。その悪性腫瘍の完治が困難であることの主要因は腫瘍の転移である。転移に関する細胞生物学的な要素として、上皮間葉変換、細胞間接着等があげられ、それに関する分子異常が次第に明らかとなってきているが、いまだ解明すべき部分が多い現象である。当講座では、乳癌、大腸癌等の臨床材料を用い、免疫染色や分子病理学的手法を応用し、転移のメカニズムの解明を試みている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2021年. Immunohistochemical Reactivity of Prostate-Specific Membrane Antigen in Salivary Gland Tumors. Head Neck Pathol. 2021年. Clinical significance of sarcoid-like reaction in lymph nodes of gastric cancer patients. J Surg Oncol. 2019年. A Biotin Tagging Immunoelectron Microscopy for Paraffin-embedded Sections. Appl Immunohistochem Mol Morphol 2018年. Difference in transducin-like enhancer of split 1 protein expression between basal cell adenomas and basal cell adenocarcinomas - an immunohistochemical study. Diagn Pathol 2013年. PLAG1 and CYLD do not play a role in the tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma. Mol Med Rep. 2009年. Alteration of SMAD4 does not participate in tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma of the salivary gland. Mol Med Rep

所属・職位	医学部 医学科 循環器内科・臨床検査診断学講座・教授	
氏名	高橋 尚彦 (Takahashi Naohiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1993年3月	



研究分野	循環器内科学
研究キーワード	不整脈, 心房細動, 心外膜脂肪
研究内容	<p>●心房細動, 心房線維化, 炎症, 心外膜脂肪に関する研究</p> <p>2004年から, “心房細動は生活習慣病と密接に関係し炎症性心房線維化がその主たる病態である”と考え研究を続けてきた。2013年からヒト開胸手術時に得られる心房細動患者の左心耳切片心外膜脂肪の解析に着手した。連続59例の左心耳標本を解析し, “心外膜脂肪そのものの顕著な線維化が心房細動重症化をもたらす”という新事実を明らかにした (論文1, 下図)。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>Mildly fibrotic EAT</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>Moderately fibrotic EAT</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>Severely fibrotic EAT</p>  </div> </div> <p>また“心外膜脂肪中の悪玉サイトカイン (IL-6, MCP-1, TNF-α) の含量が多いほど隣接する心筋の線維化が顕著で心房細動が重症である”ことも突き止めた。引き続き, 独自の器官培養法を確立し, ヒト心外膜脂肪が真に心房線維化を惹起することを証明し, そのシグナル伝達系を解明した (論文2)。平成31年度には基盤(B)に採択され研究を大きく推進できた。</p> <p>●Brugada症候群, 早期再分極症候群に関する研究</p> <p>2006年にJ波の顕著な変動を示す症例を報告し (論文3), NEJM誌に引用された。心室細動抑制にシロスタゾールとベプリコールの併用が有用であることを証明し (論文4), 2020年改訂版不整脈薬物治療ガイドラインに採用された。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>心外膜脂肪と心房細動の関連についてヒト組織を用い世界のトップに位置する研究を継続している。Brugada症候群, 早期再分極症候群も独創性の高い論文を多く公表してきた。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Abe I, Takahashi N, et al. Association of fibrotic remodeling and cytokines/chemokines content in epicardial adipose tissue with atrial myocardial fibrosis in patients with atrial fibrillation. Heart Rhythm. 2018 Nov;15(11):1717-1727. 2. Kira S, Takahashi N, et al. Role of angiotensin-like protein 2 in atrial fibrosis induced by human epicardial adipose tissue: Analysis using an organo-culture system. Heart Rhythm. 2020 Sep;17(9):1591-1601. 3. Shinohara T, Takahashi N, et al. Characterization of J wave in a patient with idiopathic ventricular fibrillation. Heart Rhythm. 2006 Sep;3(9):1082-4. 4. Shinohara T, Takahashi N, et al. Combination therapy of cilostazol and bepridil suppresses recurrent ventricular fibrillation related to J-wave syndromes. Heart Rhythm. 2014 Aug;11(8):1441-5.

所属・職位	医学部医学科眼科学講座・教授		
氏名	武田 篤信 (Atsunobu Takeda)		
取得学位	博士(医学)、九州大学、2003年6月		
SDGs目標	リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください		

研究分野	眼科学
研究キーワード	網膜硝子体、ぶどう膜炎、眼免疫学
研究内容	<p>網膜硝子体疾患、ぶどう膜炎、硝子体網膜リンパ腫の基礎的・臨床研究を主な研究テーマとしている。現在、ヒト眼内液を用いたプロテオーム、トランスクリプトームなどによる統合OMICS解析によりえられたデータから研究を進めている。研究対象は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ぶどう膜炎に関する調査・分析 急性網膜壊死の初診時所見における視力予後不良因子の解析（論文1）。 ベーチェット病眼症の生物製剤インフリキシマブの長期成績（論文2）。 ぶどう膜炎黄斑浮腫におけるBAFFと可溶性IL6受容体の関連について（論文3）。 ぶどう膜炎患者に対する白内障手術後視力及びコントラスト視力の解析（論文4）。 ●サイトカイン、ケモカインを標的とした難治性眼疾患モデルの解析 実験的脈絡膜新生血管モデルを用いた治療標的の探索（論文6, 8）。 ●硝子体網膜リンパ腫に関する研究 硝子体網膜リンパ腫（vitreoretinal lymphoma: VRL）の予後不良因子の解析（論文5）。 転移性硝子体網膜リンパ腫の臨床像について（論文7）。 制御性T細胞による腫瘍微小環境の形成とVRLの予後不良の関連についての解析。 VRL細胞の増殖、生存、中枢神経浸潤の制御機構の解析。
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●論文 <ol style="list-style-type: none"> 2024年、Fukui C, Takeda A, et al. Factors at the initial visit associated with poor visual outcomes in patients with acute retinal necrosis. <i>Eye (Lond)</i>, in press. 2023年、Yamana S, Takeda A, et al. Long-term outcomes of infliximab in patients with Behçet's disease-associated uveitis. <i>Int Ophthalmol</i>. 43(3): 937-944. 2022年、Takeda A, et al. Increased vitreous levels of B cell activation factor (BAFF) and soluble interleukin-6 receptor in patients with macular edema due to uveitis related to Behçet's disease and sarcoidosis. <i>Graefe's Arch Clin Exp Ophthalmol</i>. 268(8): 2675-2686. 2021年、Takeda A, et al. Surgical outcomes of cataract surgery for contrast sensitivity and visual acuity in uveitis-associated cataract. <i>Clin Ophthalmol</i>. 15: 2665-2673. 2020年、Takeda A, et al. Vitreous levels of interleukin-35 as a prognostic factor in B-cell vitreoretinal lymphoma. <i>Sci Rep</i>. 10(1): 15715. 2018年、Sato K, Takeda A, et al. Interleukin-6 plays a crucial role in the development of subretinal fibrosis in a mouse model. <i>Immunol Med</i>. 41(1): 23-29. 2017年、Taki R, Takeda A, et al. Clinical features of systemic metastatic retinal lymphoma in Japanese patients. <i>Ocul Immunol Inflamm</i>. 25(5): 654-662. ●受賞 <ol style="list-style-type: none"> 2023年、第127回 日本眼科学会総会評議委員会賞 2012年、第45回 日本眼炎症学会学術奨励賞

所属・職位	医学部先進医療科学科 生命健康科学コース, コース長・教授	
氏名	田仲 和宏 (Tanaka Kazuhiro)	
取得学位	博士(医学)、九州大学、1995年3月	
SDGs目標	 	

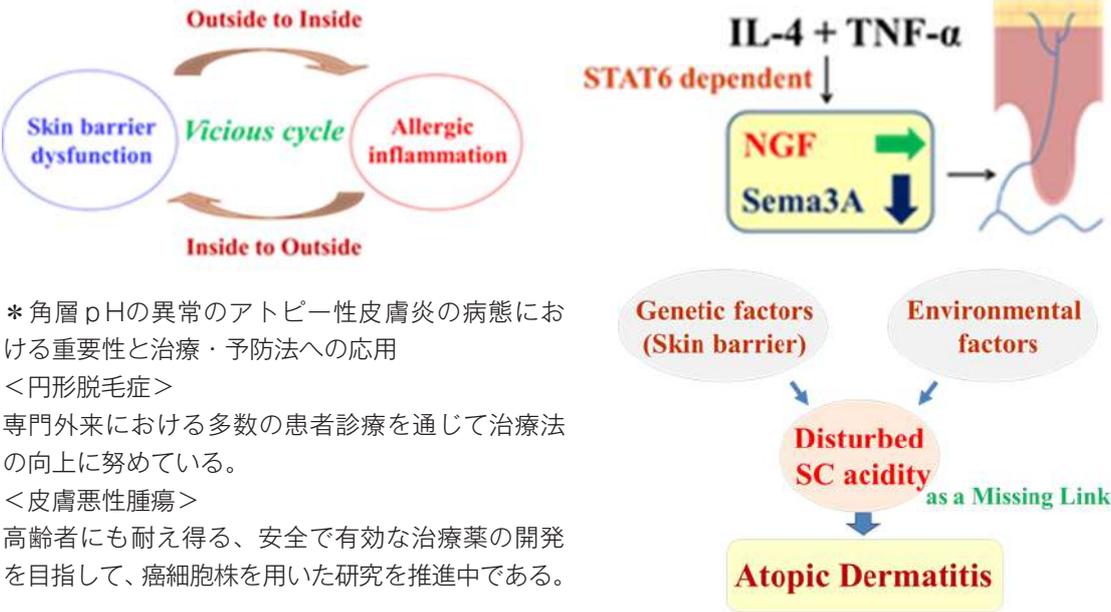
研究分野	骨軟部腫瘍学, 整形外科学
研究キーワード	骨軟部腫瘍・肉腫, 臨床試験, 融合遺伝子, 染色体転座, 分子標的治療
研究内容	<p>臨床的研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本医療研究開発機構 (AMED) 革新的がん医療実用化研究事業 「進行軟部肉腫に対する二次治療における標準治療の開発のための研究」研究代表者 Japan Clinical Oncology Group (JCOG) : 骨軟部腫瘍グループ事務局 Japan Ewing Sarcoma Study Group (JESS) : グループ代表者 「高悪性度非円形細胞肉腫に対する補助化学療法のランダム化第III相試験 (JCOG2102)」研究代表者 「進行軟部肉腫に対する二次治療のランダム化第II相試験 (JCOG1802)」研究代表者 「高悪性度非円形細胞肉腫に対する補助化学療法のランダム化第II/III相試験 (JCOG1306)」研究事務局 「高悪性度非円形細胞軟部肉腫に対する術前術後補助化学療法の第II相試験 (JCOG0304)」研究事務局 <p>基礎的研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究 (C) 「ゲノム編集によるsyngeneic系を用いた(肉腫型)転座発がんのメカニズム解明」研究代表者 日本学術振興会 (JSPS) 基盤研究 (B) 「多層的遺伝子解析を用いた高悪性度軟部肉腫に対する個別化医療の開発」分担研究者
研究業績・アピールポイント	<p>研究業績</p> <p>Total Impact Factor (IF) 676.387点 (IF2022年版), h-index 42, Total Citation 5603回 (2023年9月)</p> <ol style="list-style-type: none"> Tanaka K, Machida R, Kawai A, et al. Perioperative Adriamycin plus ifosfamide versus gemcitabine plus docetaxel for high-risk soft tissue sarcomas: Randomised, phase II/III study-JCOG1306. <i>Br J Cancer</i>, 127(8):1487-1496. doi: 10.1038/s41416-022-01912-5. 2022. Tanaka K, Suzuki K, Miyashita K, et al. Activation of recombinational repair in Ewing sarcoma cells carrying EWS-FLI1 fusion gene by chromosome translocation. <i>Sci Rep</i>. 12(1):14764. doi: 10.1038/s41598-022-19164-x. 2022. Tanaka K, Anan M, Tsubouchi Y, et al. Gait analysis of a patient who underwent complete resection of the patella and quadriceps femoris for soft tissue sarcoma. <i>Eur J Phys Rehabil Med</i>. 57(2):298-302. doi: 10.23736/S1973-9087.21.06395-4. 2021. Tanaka K, Kawano M, Iwasaki T, et al. Surrogate endpoints for overall survival in randomized controlled trials of localized osteosarcoma: A meta-analytic evaluation. <i>Sci Rep</i> 10:8573, doi:10.1038/s41598-020-65591-z. 2020. Tanaka K, Kawano M, Iwasaki T, et al. A meta-analytic evaluation of the correlation between event-free survival and overall survival in randomized controlled trials of newly diagnosed Ewing sarcoma. <i>BMC Cancer</i> 20:379, doi:10.1186/s12885-020-06871-9. 2020. Tanaka K, Mizusawa J, Naka N, et al. Ten-year follow-up results of perioperative chemotherapy with doxorubicin and ifosfamide for high-risk soft tissue sarcomas in the extremities: Japan Clinical Oncology Group study JCOG0304. <i>BMC Cancer</i> 19:890, doi:10.1186/s12885-019-6114-2. 2019. Tanaka K, Kawano M, Iwasaki T, et al. A meta-analysis of randomized controlled trials that compare standard doxorubicin with other first-line chemotherapies for advanced/metastatic soft tissue sarcomas. <i>PLoS One</i> 14:e0210671, doi:10.1371/journal.pone.0210671. 2019. Tanaka K, Kawano M, Iwasaki T, et al. Surrogacy of intermediate endpoints for overall survival in randomized controlled trials of first-line treatment for advanced soft tissue sarcomas in the pre- and postpazopanib era: A meta-analytic evaluation. <i>BMC Cancer</i> 19:56, doi:10.1186/s12885-019-5268-2. 2019. <p>受賞歴</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成8年7月 文部省在外研究員 (米国National Institutes of Health留学) 平成10年4月 日本整形外科学会 : 学会奨励賞 平成11年2月 米国整形外科基礎学会 : New Investigator Recognition Award 平成12年4月 整形災害外科学研究助成財団 : ジンマー・ジャパン奨励賞 平成13年6月 日米加欧整形外科基礎学会 : New Investigator Recognition Award 平成13年6月 日本がん分子標的治療学会 : 学会奨励賞 平成28年10月 Japanese Journal of Clinical Oncology誌 : Paper of the Year 令和2年1月 第6回運動器疾患論文学術賞 : 最優秀賞

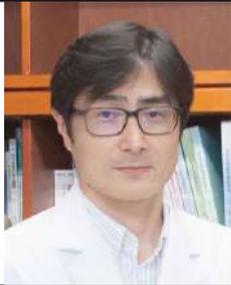
所属・職位	医学部 医学科 生物物理学講座・教授	
氏名	谷川 雅人 (Tanigawa Masato)	
取得学位	博士 (理学)、広島大学、1995年3月	
SDGs目標	 	

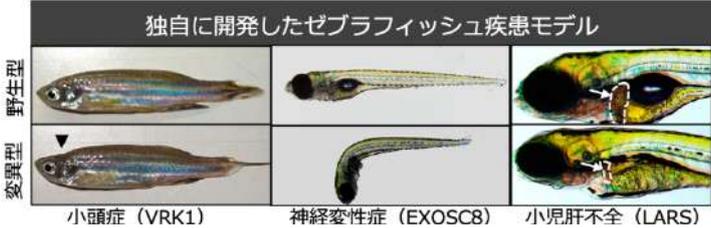
研究分野	医療情報学、生物物理学
研究キーワード	ベイズ推定、情報統計力学、原子間力顕微鏡
研究内容	<p>●少数検査データ時のベイズ統計解析による重症度の確率の決定法</p> <p>腎生検をはじめとする様々の検査データからIgA腎症等の進行段階を正確に推定し、それぞれの患者の置かれた状況を考慮した治療指針を、医療現場に提供する。十分な数の試料が、確保できない場合もある。少数の試料しか得られない場合において、重症度をベイズ統計を用いて確率分布として導き出し、それぞれの患者の実情と併せて考えることのできる方法を確立する。また、IgA腎症の場合、病変と考えられる糸球体には、巣状糸球体硬化症、各種増殖性腎炎、硝子化、半月体形成など様々なものがあり、この病気にかかる年齢も様々である。この中で、どのような場合に予後が悪く、透析療法に至りやすいのかを、マルコフ連鎖モンテカルロ法を拡張した分析方法を検討している。また十分な数の用意はできない場合の解析方法として、回帰係数のいくつかを0にすることによって、スパース性を維持した解析方法を検討し、この結果を通常のGibbs sampler等のMCMC法によって推定された事後分布と比較し、推定精度や予測精度がどのように変化するかを詳細に調べ、有用性を明らかにした。さらに、この結果を用いて、どのような病変（分布）で、病気がどのように進行するかの確率分布を明らかにする。</p> <p>●対イオンによるDNAの局所構造変化がタンパク質との相互作用や凝集に及ぼす影響</p> <p>G-quadruplex等のDNA四重鎖を取り得る配列がゲノム中に多数あり、これらがガンをはじめとする様々な病気にかかわっていることが分かってきた。我々はこれまで、このG-quadruplex形成過程や薬剤となる小分子との相互作用をCDストップフローなどによって明らかにしてきた。また、DNAの溶液中での挙動を1分子観察によって明らかにしてきた。これらの成果をもとに、本研究では、G-quadruplexが形成されることに伴い、その近くのDNA鎖の構造がどのように変化するかを明らかにした。具体的には、G-quadruplexの形成過程を実験とシミュレーションによって明らかにし、形成段階に応じた周囲のDNAの変化を一分子観察によって調べた。また、さまざまな小分子（薬剤候補）を加えた場合について、この変化にどのような影響を及ぼすのかを調べた。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. MicroRNA-375 is downregulated in gastric carcinomas and regulates cell survival by targeting PDK1 and 14-3-3ζ. Cancer Research, 70, 2339-2349, 2010. 2. Detection and mapping of mismatched base pairs in DNA molecules by atomic force microscopy., Nucleic Acids Res., 電子版 28, E38, 2000. <p>●国際学会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Analysis of Japanese histological IgA classification using probabilistic analysis associated with the Bayesian theorem., American Society of Nephrology Annual Meeting ,2019. 2. How the Circular and Linear Conformational Fluctuations of Giant DNA Molecules Change with the Viscosity of the Solvent., 65th Biophysical Society Annual Meeting, 2021.

所属・職位	医学部先進医療科学科生命健康科学コース・教授	
氏名	手嶋 泰之 (Teshima Yasushi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年3月	
SDGs目標		
研究分野	循環器病学、臨床検査医学	
研究キーワード	心筋虚血再灌流障害、血糖変動	
研究内容	<p>・糖尿病が心機能に及ぼす影響と心疾患との関連についての研究</p> <p>糖尿病モデル動物では心筋内のカルシウム動態の異常が出現しており左室拡張機能の低下につながる可能性を見出し報告した (論文1)。また糖尿病心筋における活性酸素種の増加とその機序としてカルシウムカルモジュリン依存性蛋白質キナーゼが関与することを見出した (論文2, 3)。</p> <p>・心筋虚血再灌流障害の軽減に関する研究</p> <p>心筋代謝、ミトコンドリア機能を制御することにより心筋虚血再灌流に対して心保護効果をもたらすことを報告した (論文4, 5)。</p> <p>・血糖変動が心筋、心機能に及ぼす影響に関する研究</p> <p>上記の研究を行なう中で、高血糖状態が持続する病態よりも血糖変動が大きい方が心筋細胞に与えるダメージが大きいのではないかとの印象を得た。まず長期間の血糖変動への曝露が心房組織の変性をもたらし心房細動を惹起することを発見し (論文6)、さらに血糖変動が虚血再灌流による心筋ダメージを拡大することを発表した (論文7)。以上の基礎実験で得られた知見を基に、心不全患者の血糖モニタリングを行なった結果、多くの心不全患者において夜間から早朝に低血糖を認め論文として報告した (論文8)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>【論文】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Teshima Y, et al. Diminished expression of sarcoplasmic reticulum Ca²⁺-ATPase ryanodine sensitive Ca²⁺ channel mRNA in streptozotocin-induced diabetic rat heart. J. Mol. Cell. Cardiol, 32 655-664, 2000 2. Nishio S, Teshima Y, et al. Activation of CaMKII as a key regulator of reactive oxygen species production in diabetic rat heart. J Mol Cell Cardiol 52: 1103-1111, 2012 3. Teshima Y, et al. Production of reactive oxygen species in the diabetic heart. Roles of mitochondria and NADPH oxidase. Circ J 78: 300-306, 2014 4. Teshima Y, Akao M, Jones SP, Marbán E. Uncoupling protein-2 overexpression inhibits mitochondrial death pathway in cardiomyocytes. Circ Res, 93 192-200, 2003 5. Teshima Y, Akao M, Jones SP, Marbán E. Cariporide (HOE642), a selective Na⁺-H⁺ exchange inhibitor, inhibits the mitochondrial death pathway. Circulation, 108 2275-81, 2003 6. Saito S, Teshima Y, et al. Glucose fluctuations increase the incidence of atrial fibrillation in diabetic rats. Cardiovasc Res 104: 5-14, 2014 7. Saito S, Thuc LC, Teshima Y, et al. Glucose fluctuations aggravate cardiac susceptibility to ischemia/ reperfusion injury by modulating microRNAs expression. Circ J 80: 186-195, 2016 8. Teshima Y, et al. Potential risk of hypoglycemia in patients with heart failure. Int Heart J 61: 776-780, 2020 <p>【著書】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 手嶋泰之 シンプル循環器学 (犀川哲典、小野克重 編) 8章第三部 循環器疾患に有用な血液検査、バイオマーカー 139-143, 15章 心不全 243-268 南江堂, 2015 2. 手嶋泰之、高橋尚彦 知っておきたい臨床検査値 (第2版) (日本薬学会編) 第三部17章 循環器疾患、65-67, 2019 3. 手嶋泰之 臨床検査のガイドライン JSLM2021, 第2章 症候 循環器「動悸」, 2021 	

所属・職位	医学部 医学科 皮膚科学講座・教授	
氏名	波多野 豊 (Hatano Yutaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	アトピー性皮膚炎、円形脱毛症、皮膚悪性腫瘍
研究内容	<p><アトピー性皮膚炎></p> <p>*アトピー性皮膚炎の病態の3つの主要な側面である「アレルギー炎症」「皮膚バリア機能」「痒み」の相互関係について研究を行ってきた。特に、タイプ2サイトカインが角層透過性バリア機能に負の影響を及ぼすことは世界に先駆けて示してきた。</p>  <p><角層 pH の異常のアトピー性皮膚炎の病態における重要性と治療・予防法への応用></p> <p><円形脱毛症></p> <p>専門外来における多数の患者診療を通じて治療法の向上に努めている。</p> <p><皮膚悪性腫瘍></p> <p>高齢者にも耐え得る、安全で有効な治療薬の開発を目指して、癌細胞株を用いた研究を推進中である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>アトピー性皮膚炎の病態研究では、特に、タイプ2サイトカインが角層透過性バリア機能において重要な角層セラミド産生に負の影響を及ぼすことを世界に先駆けて示してきた。この成果は、皮膚科学分野のトップジャーナルであるJournal of Investigative Dermatologyにおいて注目すべき知見として紹介され、また、免疫アレルギー学のトップジャーナルである、Journal of Allergy and Clinical Immunologyの総説の共著者として報告した。現在も、アトピー性皮膚炎の病態研究についての報告を継続している。</p> <p>(参考文献)</p> <p>Elias PM, Hatano Y, Williams ML Basis for the barrier abnormality in atopic dermatitis: 'outside-inside-outside' pathogenic mechanisms J Allergy Clin Immunol 2008 Jun;121(6):1337-43</p>

所属・職位	医学部 医学科 生化学・分子遺伝学講座・教授	
氏名	花田 俊勝 (Hanada Toshikatsu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2000年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	疾患生物学、分子生物学	
研究キーワード	ゲノム工学、疾患モデル動物、遺伝性希少疾患	
研究内容	<p>1. 希少遺伝性疾患の病態解明</p> <p>ゼブラフィッシュはヒト遺伝子と約70%の相同性を持ち、コスト面や動物愛護の観点から医学実験動物として有用である。また、低分子化合物のin vivoスクリーニングや、体の透明性から蛍光タンパク質を用いた形態やシグナルの可視化が可能であるなど多くの利点を持つ。我々は、希少遺伝性疾患で発見された遺伝子変異の疾患発症との関連性を検証するため、ゲノム編集を用いてゼブラフィッシュモデルを作製・解析している。特に、希少遺伝性疾患に多くみられるような一塩基置換等の点変異を模倣するゼブラフィッシュモデルの作製に力を入れており、独自の手法により作製効率の向上を図っている。</p>  <p>2. 機能性RNAの生体内における役割</p> <p>希少疾患である橋小脳低形成10型のモデル動物の解析から、神経変性を誘導する新たな小RNAを発見した (Nature,2013, Cell,2014)。この小RNAと他の病的RNA候補分子が実際に生体内で神経変性を惹起するか、ゼブラフィッシュを用いた実験系で検証した (BBRC,2020)。本方法は、核酸医薬を含む機能性RNAのin vivoスクリーニングとして応用可能であると思われる。</p> <p>3. ゼブラフィッシュの生体内シグナル可視化モデル</p> <p>腎臓ポドサイト障害は慢性腎不全に至る重要な病的機転であることから、ポドサイトを標的とした新規治療法の探索が進められている。我々は、ゼブラフィッシュの透明性を利用して、腎臓ポドサイト障害の可視化モデルの作製を行なっている。本モデルにより、腎臓ポドサイトを標的とした創薬を目指している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>・希少遺伝性疾患を模したゼブラフィッシュ点変異ノックインモデルの作製並びにゼブラフィッシュの生体内シグナル可視化モデルの作製をすすめている。</p> <p>論文</p> <p>1: Morisaki I, Shiraishi H, Fujinami H, Shimizu N, Hikida T, Arai Y, Kobayashi T, Hanada R, Penninger JM, Fujiki M, Hanada T. Modeling a human CLP1 mutation in mouse identifies an accumulation of tyrosine pre-tRNA fragments causing pontocerebellar hypoplasia type 10. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2021, 570:60-66.</p> <p>2: Inoue M, Miyahara H, Shiraishi H, Shimizu N, Tsumori M, Kiyota K, Maeda M, Umeda R, Ishitani T, Hanada R, Ihara K, Hanada T. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <i>Sci Rep.</i> 2021, 11(1):8392.</p> <p>受賞</p> <p>2016年 武田報彰医学研究助成</p>	

所属・職位	医学部 医学科 生理学講座・教授	
氏名	花田 礼子 (Hanada Reiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学, 神経科学, 内分泌・代謝学, 病態生理学	
研究キーワード	生理機能解析, in vivoモデル, ゼブラフィッシュ, マウス, 病態モデル, 肥満・肥満関連疾患, 精神・神経疾患, 臨床応用	
研究内容	<p>1. 肥満関連疾患NAFLD/NASHの新たな病態形成機構の解明と創薬基盤の開発</p> <p>近年、肥満や肥満関連疾患に罹患する患者数が増加している。肥満の進行に伴い肝臓では非アルコール性脂肪肝疾患 (NAFLD) および非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) を発症する。異所性脂肪蓄積によりダメージを受けた肝細胞からは細胞外にdamage associated molecular patterns (DAMPs)が放出され、肝細胞のさらなる炎症や線維化を進展させることが判明しているものの、未だ病態進展に伴う肝臓でのDAMPsの経時的な動態変化は明らかになっていない。我々は、DAMPsを時空間的に可視化するゼブラフィッシュモデルを独自に作製し解析することで、NAFLD/NASHの新たな病態機構解明と治療基盤の開発を目指している。</p> <div data-bbox="868 629 1453 943" data-label="Diagram"> </div> <p>2. 精神・神経疾患の新たな病態機構の解明と創薬基盤の開発</p> <p>現代社会では過度のストレスにより、うつ病やパニック障害、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) などの精神・神経疾患に罹患する患者数が増加している。多くの精神・神経疾患においては脳内の神経伝達物質のバランス障害をきたしているが、発症時や病態の進行に応じた神経伝達物質動態は未だ不明な点が多い。我々は、神経伝達物質動態可視化ゼブラフィッシュを作製し解析することで、精神・神経疾患の新たな病態機構の解明と新規治療法の創出に寄与したいと考えている。</p> <p>3. 神経ペプチドを標的とした病態機構解明と創薬基盤の開発</p> <p>我々は神経ペプチドを標的とした遺伝子改変マウスを作製・解析することで、肥満や精神・神経疾患における新たな病態機構を明らかにしつつあり、その知見をもとに新規薬理作用を有する抗肥満薬や精神・神経疾患に対する治療薬の開発を目指したい。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遺伝子改変ゼブラフィッシュ、遺伝子改変マウスの作製、生理学的解析 ・ 生体内でのDAMPsや神経伝達物質動態可視化ゼブラフィッシュモデルの作製、解析 ・ 肥満・肥満関連疾患モデル、精神・神経疾患モデルの作製ならびに病態生理学的解析 <p>【代表論文】 *責任著者</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Hanada R,*Kojima M et al. <i>Nature Med.</i> 10(10) :1067-1073. 2004 2. Hanada R,*Penninger JM et al. <i>Nature.</i> 462(7272): 505-509. 2009 3. Teranishi H, *Hanada R. <i>Int J Mol Sci.</i> 22(8) :4238. 2021 4. Umeda R, *Hanada R et al. <i>Genes Cells.</i> 2022 in press <p>【ホームページ】 http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri/</p>	

所属・職位	医学部 医学科 解剖学講座・教授	
氏名	濱田 文彦 (Hamada Fumihiko)	
取得学位	医学博士、愛媛大学、1991年3月	
SDGs目標		

研究分野	解剖学、細胞生物学
研究キーワード	ピロリ菌、胃がん、前立腺がん
研究内容	<p>1) <u>ピロリ菌感染による胃がんおよび全身性疾患の発症メカニズムの解明</u> ピロリ菌は WHO によってヒトに対して発癌性を示す細菌に分類されています。特に CagA と呼ばれる毒素をもつピロリ菌は、これをもたない菌と比較し、激しい炎症とこれを基盤とする数倍以上とも言われる強い発癌活性を示します。本プロジェクトでは、CagA の標的分子の同定を目的として、ショウジョウバエを用いたゲノム規模の遺伝学的スクリーニングを実施し、複数の新規 CagA 標的分子の同定に成功しました。我々はこれらの標的分子に焦点を絞りながら、ピロリ菌感染による胃がんおよび全身性疾患の発症メカニズムを解明していきます。</p> <p>2) <u>前立腺の分泌機構の解明</u> 前立腺がんのスクリーニングに広く用いられるPSA検査には低い前立腺がん発見率やPSAが高値を示す症例に対する過剰診療などの問題が指摘されていますが、PSAが血液中に漏出するメカニズムはもとより、前立腺の分泌制御機構はほとんど明らかになっていないのが現状です。本プロジェクトでは、ヒトの前立腺組織およびこれをもとに作製する前立腺オルガノイドを用いて、前立腺上皮細胞の分泌を制御する分子を同定し、これに焦点を当てながら、正常前立腺の分泌制御機構を解明します。さらに前立腺肥大症および前立腺がん細胞が示す分泌機構の異常やこれらの疾患におけるPSAの血中への漏出メカニズムを明らかにすることにより、前立腺の分泌機構の包括的理解と、より有効な前立腺がんスクリーニング法の開発を目指します。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> Ninomiya R et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. Biochem. Biophys. Res. Commun. 556, 192-198. Iwasaki K et al (2018) Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of prostate cancer cells by activating expression of ephrin-B1. Cancer Sci. 109, 3159-3170. Taniue K et al (2010) Sunspot, a link between Wingless signaling and endo-replication in <i>Drosophila</i>. Development 137, 1755-1764. Tran H et al. (2008) Trabad, a new positive regulator of Wnt-induced transcription with preference for binding to and cleaving K63-linked ubiquitin chains. Genes Dev. 22, 528-542. Hamada F & Bienz M (2004) The APC tumor suppressor binds to C-terminal binding protein to divert nuclear β-catenin from TCF. Dev. Cell 7, 677-685. Hamada F & Bienz M (2002) A <i>Drosophila</i> APC tumour suppressor homolog functions in cellular adhesion. Nature Cell Biol. 4, 208-213. Hamada F et al (1999) Negative regulation of Wingless signaling by D-Axin, a <i>Drosophila</i> homolog of Axin. Science 283, 1739 - 1742.

所属・職位	医学部 医学科耳鼻咽喉科学講座・教授			
氏名	平野 隆 (Hirano Takashi)			
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1998年6月			
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください		

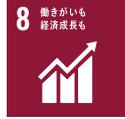
研究分野	粘膜免疫
研究キーワード	中耳炎、インフルエンザ菌、粘膜免疫
研究内容	<p>①急性中耳炎の病態と発症機序の解析</p> <p>インフルエンザウイルス感染により鼻咽腔粘膜糖鎖構造が変化し、インフルエンザ菌や肺炎球菌の鼻咽腔粘膜への定着性が亢進し、ウイルス感染後の急性中耳炎発症のメカニズムについて解析した。また、中耳での自然免疫応答について、Toll like receptor (TLR)4欠損マウスを用いた急性中耳炎マウスモデルを確立し、TLR4とTLR2の発現が好中球の細菌貪食能に関与し、TLR4欠損により好中球の自然免疫防御能が低下する事を解明した。また、インフルエンザ菌において Phosphorylcholineの発現によるphase variationが、鼻咽腔と中耳腔における細菌病原性に影響を与え、Phosphorylcholine発現陰性インフルエンザ菌では、中耳における細菌クリアランスが遅延することを解明している。</p> <p>②滲出性中耳炎の成因と病態の解析</p> <p>インフルエンザ菌の菌体外膜の主要な成分の1つであるLipooligosaccharide (LOS) を含むエンドキシンを用いた滲出性中耳炎マウスモデルを作成し、サイトカイン発現と滲出性中耳炎発症へ関与について解明している。また、顕微鏡下にてマウスの耳管閉塞とエンドキシンを中耳に注入することにより、慢性滲出性中耳炎マウスモデルの作成に成功し、慢性中耳炎症病態の組織学的解析、慢性時におけるTNF-αなどの炎症性サイトカインの関与について解析した。また小児滲出性中耳炎患児の上咽頭より採取したインフルエンザ菌にphase variationを認めることを示し、臨床経過の解析やin vitroでの培養組織を用いた細菌定着実験を行い、Phosphorylcholineの表出が、滲出性中耳炎の遷延化に関与している事を解析している。</p> <p>③慢性中耳炎の病態と局所免疫応答の解析</p> <p>耳管閉塞およびインフルエンザ菌投与による慢性中耳感染マウスモデルの作成に成功し、その病態につき組織学的変化ならびに細胞および分子生物学的解析を行い、慢性炎症には制御性T細胞、$\gamma\delta$T細胞、Th1、Th2、及びTh17細胞など様々なリンパ球が関与することを研究し、中耳のインフルエンザ菌慢性感染には、中耳粘膜に存在する制御性T細胞が局所免疫寛容に関与していることを示し、抗CD25抗体分子標的治療の可能性についても研究している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①今までも粘膜ワクチン開発のため、科学研究費を獲得しており、最近においても以下のように研究代表者として研究資金を獲得している。</p> <p>1) 科学研究費 基盤研究 (C) 平成31年～令和4年 研究課題名：上下気道粘膜免疫における経年的免疫動態の解析 研究代表者：平野 隆 研究経費 3,200,000円</p> <p>②学会発表においても、海外を始め研究結果を報告している。 21st International Symposium on Recent Advances in Otitis Media, Jun 11-12 2021, UK. Hirano T, Kawano T, Yoshinaga K, Matsunaga T, Suzuki M: Effect of aging mucosal immune responses against nontypeable Haemophilus influenzae in upper airway.</p> <p>③論文においても論文作成や論文作成指導を行っている。 Hirano T. et al. , Interaction between regulatory T cells and antibody-producing B cells for immune responses at the upper respiratory mucosa against nontypeable Haemophilus influenzae: In vitro assay model. Ann Otol Rhinol Laryngol. 2019;128(6 suppl):45S-51S. 他</p>

所属・職位	医学部 医学科 医療安全管理医学講座・教授	
氏名	平松 和史 (Hiramatsu Kazufumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年6月	
SDGs目標	 	

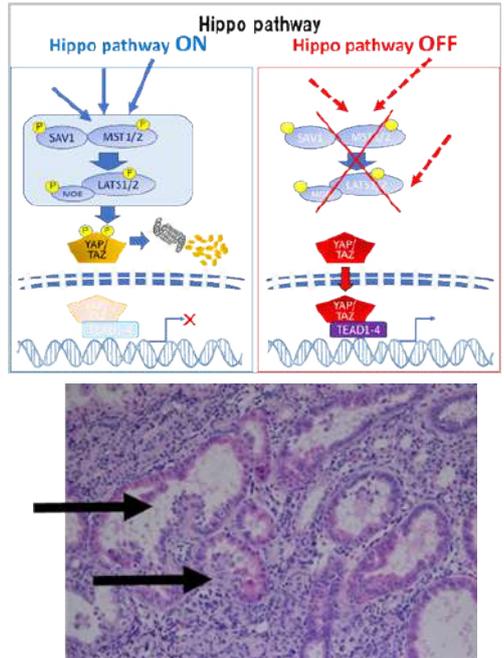
研究分野	医療安全管理学、感染制御学
研究キーワード	緑膿菌感染症、院内感染対策、医療事故防止
研究内容	<p>緑膿菌感染症の制御に関する研究</p> <p>緑膿菌は環境に広く存在し、易感染宿主に対して重篤な感染症を呈する。緑膿菌は様々な抗菌薬に対して自然耐性を示し、抗緑膿菌作用を有する抗菌薬に対しても獲得耐性を示す場合も多い。こうしたことから抗菌薬に依存しない緑膿菌感染症の制御は重要であり、その一つにワクチンが考えられている。私たちは緑膿菌線毛に着目し、線毛蛋白を用いたワクチンの可能性について研究を行っている。緑膿菌線毛蛋白をマウスに経気道的に免疫することで、緑膿菌肺炎によるマウスの死亡を抑制することを示した。また肺洗浄液中の抗緑膿菌線毛蛋白IgAやIgG抗体の上昇が致死抑制に重要であることも明らかにした。線毛蛋白のペプチドワクチンやDNAワクチンの可能性について、検討を行っている。</p> <p>院内感染対策に関する調査・研究</p> <p>新型コロナウイルスや薬剤耐性菌など院内で伝播、拡散する病原体は多く存在する。こうした病原体が易感染宿主の多い院内で拡がると、入院患者の生命予後に大きく影響する。院内や地域レベル、全国レベルでのサーベイランスを行い、様々な耐性菌などの病原体の検出状況のモニタリングを行っている。さらに、検出された病原体の遺伝子レベルでの解析を行い、病原体の拡がりを調査し、その感染防止策について検討を行っている。</p> <p>医療事故防止に関する調査・研究</p> <p>ヒューマンエラーは様々な場面で生じ、医療におけるエラーは重大な医療事故となる場合がある。こうしたエラーを集積し、その防止策を検討している。さらに医療事故調査制度に基づく調査に参加し、医療事故の発生要因や再発防止策の検討を実施している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>緑膿菌感染症をはじめとする各種感染症に関する基礎的、臨床的研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.Hashimoto T, Yahiro T, Yamada K, Kimitsuki K, Okuyama MW, Honda A, Kato M, Narimatsu H, Hiramatsu K, Nishizono A. Distribution of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus and Antiviral Antibodies in Wild and Domestic Animals in Oita Prefecture, Japan. <i>Am J Trop Med Hyg.</i> 2022 Feb 28;tpmd211130. 2.Yoshikawa H, Komiya K, Yamamoto T, Fujita N, Oka H, Okabe E, Yamasue M, Umeki K, Rubin BK, Hiramatsu K, Kadota J. Quantitative assessment of erector spinae muscles and prognosis in elderly patients with pneumonia. <i>Sci Rep.</i> 2021 Feb 22;11(1):4319. 3.Yoshioka D, Kajiwara C, Ishii Y, Umeki K, Hiramatsu K, Kadota J, Tateda K. Efficacy of β-Lactam-plus-Macrolide Combination Therapy in a Mouse Model of Lethal Pneumococcal Pneumonia. <i>Antimicrob Agents Chemother.</i> 2016 Sep 23;60(10):6146-54. 4.Miyajima Y, Hiramatsu K, Mizukami E, Morinaga R, Ishii H, Shirai R, Kishi K, Tokimatsu I, Saikawa T, Kadota J. In vitro and in vivo potency of polymyxin B against IMP-type metallo-beta-lactamase-producing <i>Pseudomonas aeruginosa</i>. <i>Int J Antimicrob Agents.</i> 2008 Nov;32(5):437-40. 5.Ohama M, Hiramatsu K, Miyajima Y, Kishi K, Nasu M, Kadota J. Intratracheal immunization with pili protein protects against mortality associated with <i>Pseudomonas aeruginosa</i> pneumonia in mice. <i>FEMS Immunol Med Microbiol.</i> 2006 Jun;47(1):107-15.

所属・職位	医学部 医学科 内分泌代謝・膠原病・腎臓内科講座・教授	
氏名	正木 孝幸 (Masaki Takayuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学
研究キーワード	肥満症、糖尿病、代謝性症候群
研究内容	<p>●脂肪由来因子アディポネクチンのエネルギー代謝への影響に関する研究 肥満糖尿病モデルマウスにおいてアディポネクチンを投与した時に褐色脂肪組織や骨格筋での脱共役タンパク質の発現増加作用を示した。アディポネクチンはエネルギー代謝調節作用を持つことが示唆された(論文 1)。</p> <p>●脂肪由来因子アディポネクチンの肝臓の炎症への影響に関する研究 本研究ではアディポネクチンの肝臓における抗炎症効果について調べた。肥満症肝炎モデルにアディポネクチンは肝炎に保護的に作用することが分かった(論文 2)。</p> <p>●神経ヒスタミンの摂食リズムやエネルギー代謝への影響に関する研究 肥満糖尿病モデルマウスにおいて神経ヒスタミンは脱共役タンパク質の発現増加作用を持つことや摂食のリズムに関連することが示唆された(論文 3)。</p> <p>●ヒト内臓脂肪蓄積と血圧変動との関連についての解析 本研究では耐糖能異常のある患者さんの24時間血圧変動と内臓脂肪蓄積の関連について解析した。耐糖能異常の患者さんにおいて内臓脂肪蓄積は特に夜間の高血圧と関連することが示唆された(論文 4)。</p> <p>●GLP-1アナログ製剤の糖代謝と食行動への影響に関する研究 肥満糖尿病の患者さんでGLP-1アナログ製剤セマグルチド投与は糖尿病改善と併せて食行動の改善所見も認めた。特に食行動の中でも空腹満腹感が糖代謝の改善と関連することが示唆された(論文 5)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な論文 (論文1). Masaki T, et al. Diabetes. 52:2266, 2003. (論文2). Masaki T, et al. Hepatology. 40:177, 2004. (論文3). Masaki T, et al. Trends Pharmacol Sci. 27:279, 2006. (論文4). Masaki T, et al. Diabetes Care. 34: e32, 2011. (論文5). Masaki T, et al. Metabolites 12:147, 2022.</p> <p>●受賞 2003年、日本肥満学会 Young Investigate Award 2008年、日本肥満学会 学術奨励賞</p>

所属・職位	医学部 医学科 医学生物学講座・教授	
氏名	松浦 恵子 (Matsuura Keiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年12月	
SDGs目標	   	

研究分野	医学 ダイバーシティ
研究キーワード	腎癌, 悪性, ノックアウトマウス, 適正飲酒, ダイバーシティ
研究内容	<p>1. 悪性度腎癌のゲノム解析とHippoパスウェイノックアウトマウス作成</p> <p>腎臓にできる癌の約80%を占める淡明細胞性腎細胞癌は、組織学的に低悪性度と高悪性度に分類され、その予後は全く異なる。ゲノム解析により高悪性度腎細胞癌は14番染色体に欠失が認められ、SAV1遺伝子の発現低下が悪性化をもたらしていることが示唆された。SAV1遺伝子がコアコンポーネント(主要因子)の一つであるHippoパスウェイというシグナル伝達経路の異常(右図OFF)をもたらしていることがわかった。そこでHippoパスウェイを腎臓特異的に働かないようにしたSAV1ノックアウトマウスを作成したところ、腎尿細管の異型増殖がみられた(右図矢印)ことから、Hippoパスウェイの異常は腎癌悪性化に関わる可能性が見いだされている。</p> <p>2. 適正飲酒のための臨床研究</p> <p>飲酒後の自覚症状や他覚検査による臨床研究を行い、適正飲酒の推進を目指している。</p> <p>3. ダイバーシティの推進</p> <p>大分大学ダイバーシティ推進本部長として、企業等と連携し地域でダイバーシティを推進している。共同研究等を通じた女性研究者・技術者のキャリアアップ、ダイバーシティ・男女共同参画に関する意識改革、セミナー、教育、意識調査、女性医療人支援等を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1.Hippo pathwayの腎臓特異的のノックアウトマウスを作成・解析中である</p> <p>【代表的論文】 1) Nakada C et al. J. Pathol., 251(1), 12-25 2020. 2) Takahashi M et al. Cancer Sci., 107(4): 417-23, 2016. 3) Kai T et al. J. Pathol., 239(1): 97-108, 2016. 4) Matsuura K et al. Histopathology,64(2), pp306-309, 2014 5) Narimatsu T et al. Cancer Medicine, Oct 15., pp1-13, 2014 6) Matsuura K et al. BMC Cancer, 20;11(1):523, pp1-10, 2011 7) Inoue T et al. Cancer Sci, 103(3), pp569-576, 2011 8) Yoshimoto T et al. J Pathol, 213, pp392-401, 2007</p> <p>2. UMIN-CTR臨床試験「麦焼酎の代謝に関する研究 ―アルコール摂取後の呼気中濃度と精神運動機能の経時的変化―」</p> <p>3. 令和3年度 第5回日本ダイバーシティ学会 大会長 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「平成29年度ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」プロジェクトリーダー</p>



所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座・教授	
氏名	三重野 英子 (Mieno Eiko)	
取得学位	博士 (保健学)、広島大学、2004年3月	
SDGs目標	 	

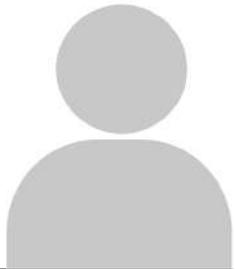
研究分野	老年看護学、リハビリテーション看護
研究キーワード	認知症ケア、緩和ケア
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ●一般病院における非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 老衰や心不全、認知症等の非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発にむけて、事例研究に取り組む。 ●認知症専門外来における看護実践モデルの開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症専門外来での看護実践をモデル化するために、初診・再診での診療過程に沿った看護ケアの内容を記述した。今後、認知症専門外来の看護師等を対象にした看護ケアの実際に関する調査や外来での検証を行い、看護実践モデルを提示する。 ●認知症高齢者の薬物療法の援助に関する実態調査 <ul style="list-style-type: none"> ・ 看護師が認知症高齢者に適切・安全に薬物療法を援助できるための教育プログラムを検討することを目的に、看護師、介護家族、医師、薬剤師（病院・薬局）を対象に、看護師の薬物療法の援助に関する質問紙調査を行った。 ●特定機能病院・一般病院における認知症高齢者の看護のモデル化 <ul style="list-style-type: none"> ・ 病院における認知症看護のモデル化を目指し、特定機能病院や一般病院の看護師を対象とした看護の実際と課題に関する質問紙調査、入院経験がある認知症高齢者の家族やグループホーム職員を対象とした病院看護の評価に関する質問紙調査を行った。 ・ これらの調査結果に基づき「入院時に認知症の行動・心理症状やせん妄を予測し、予防的に介入するための認知症看護プログラム」を作成し、その実行可能性について事例研究を行った。 ●短期入所を利用する認知症高齢者とその家族に対するケアに関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ・ 短期入所のケアのモデル化を目指し、まず、短期入所施設のケア責任者を対象にケアの質評価に関する質問紙調査を行った。次いで、短期入所利用者4名を対象に入所から退所までに行われたケアとその結果を参与観察と面接により記述し、施設適応を促進するケア要素を抽出した。
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●著書 <ul style="list-style-type: none"> ・ 2022年、最新老年看護学、第4版、日本看護協会出版会。 ・ 2018年、系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学、第9版、医学書院。 ●論文・研究発表 <ul style="list-style-type: none"> ・ 2017年、医師からみた看護師が行う認知症高齢者の薬物療法の援助の実際と課題、第37回日本看護科学学会学術集会。 ・ 2013年、一般病院・診療所における認知症看護プログラムの開発～認知症看護プログラムの実行可能性の検討～、日本老年看護学会第18回学術集会。 ・ 2011年、A survey on practical nursing care for dementia patients admitted to general hospitals, 26th International Conference of Alzheimer's Disease International (トロント)。 ・ 2009年、家族による一般病院・診療所での認知症の人と家族への看護に対する評価、日本認知症ケア学会第10回大会。 ・ 2003年、施設種別による短期入所のケアの質に関する研究、日本老年看護学会誌。 ・ 2005年、介護老人福祉施設の看護師が行うEnd-of-Life Careの実際、日本老年看護学会誌。

所属・職位	医学部 医学科 心臓血管外科学講座・教授	
氏名	宮本 伸二 (Miyamoto Shinji)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	心臓血管外科学
研究キーワード	再生医療、生体内組織形成術、脊髄保護、低侵襲、止血剤
研究内容	<p>■生体内組織形成術による自己組織化する弁、血管の代用組織開発</p> <p>○生体内組織形成術(iBTA)により得たシート (biosheat) を用いて大動脈弁再建を行い、長期耐久性・自己弁化を動物実験にて証明。異種 (牛) バイオシートの可能性も検証中。</p>  <p>○重症下肢虚血に対するバイパス手術に用いる人工血管をiBTAにて作成 (Biotube) し、静脈グラフトと同等以上の開存性、自己血管化を証明。</p>  <p>○大動脈用のBiotubeを作成し、その耐圧性、成長性を検証。 ○分岐型Biotubeの作成、耐久性を検証。</p> <p>■フリーラジカルスキャベンジャーによる脊髄 (虚血補助)</p> <p>■Matsudaito (止血物質) の有効な使用方法の開発</p> <p>■低侵襲心臓手術用特殊機器開発</p>
研究業績・アピールポイント	<p>デバイス開発につながる大動物を用いたtranslational researchを主とする。</p> <p>Three - month outcomes of aortic valve reconstruction using collagenous membranes (biosheets) produced by in - body tissue architecture in a goat model: a preliminary study K Okamoto BMC Cardiovasc Disord. 2021; 21: 184. Published online 2021 Apr 15.doi:10.1186/s12872 -021-01988-6</p> <p>Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model T Kawashima, Tadashi Interact Cardiovasc Thorac Surg. 2021 Jun; 32(6): 969-977.</p> <p>科研費 基盤B H28光造形と生体内組織形成術による生体適合性に優れる弁再建用バイオリーフレットの開発</p> <p>科研費基盤B H29 生体内組織合成法を用いた異種移植可能な心臓弁膜用バイオシートの開発</p> <p>科研費基盤B H31 光造形と生体内組織形成術による自己成長可能な大血管再建用バイオチューブの開発</p> <p>科研費基盤B R3 生体内組織形成術による大血管用分岐弯曲バイオチューブの開発</p> <p>科研費基盤B R4 生体内組織形成術による長期耐久性を有する冠動脈バイパス用人工血管開発</p> <p>AMED シーズB R2-3 下肢動脈バイパス用人工血管 (バイオチューブ) 作製用鋳型の開発</p> <p>AMED シーズC R4-6 研究開発課題名: 体内管状組織形成具 (バイオチューブメーカー) の薬事承認に向けた医師主導治験に関する研究</p>

所属・職位	医学部 医学科 医学英語教育学講座・教授	
氏名	森 茂 (Mori Shigeru)	
取得学位	教育学修士、広島大学、1988年3月	
SDGs目標	 	

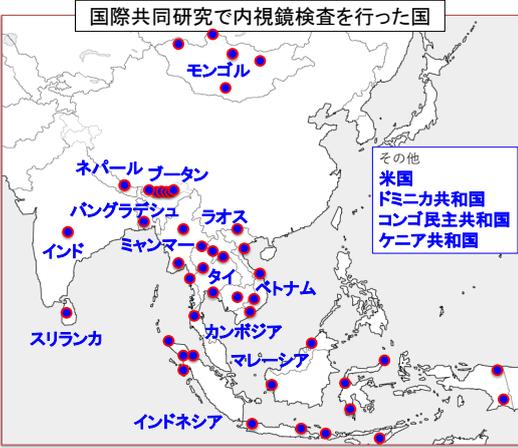
研究分野	医学英語教育
研究キーワード	医学英語、医学英語教育、医療英語、Medical English Education、EMP
研究内容	<p>●医学英語教材の作成</p> <p>日本語を母語とする英語学習者が、医学専門教育に進む前段階で医学（医療）に関する基本的な用語や定型表現を日本語・英語の両方で正しく、また効率よく習得させるにはどうしたら良いか、内容 (Minimum requirement & Advanced requirement) と方法を日々研究・実践している。(論文 1, 著書 1, 2, 3)</p> <p>●医学英語力の評価</p> <p>日本語を母語とする英語学習者の医学英語力をどのように評価するか、妥当性、信頼性、実用性を担保した評価方法・テストの開発・実施・分析を行っている。(著書 4)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2015年、「医学教育のグローバルスタンダードに対応するための医学英語教育ガイドライン」福沢嘉孝、一杉正仁、石井誠一、亀岡淳一、建部一夫、高田 淳、服部しのぶ、廣川慎一郎、森 茂、守屋利佳、Rauol Breugelmans、吉岡俊正。 <i>Journal of Medical English Education</i>. 14 (3), pp. 130-135. https://jasmee.jp/guidelines/#jguidelines https://jasmee.jp/guidelines/#eguidelines</p> <p>●(編) 著書</p> <p>1. 2009年、『クイズで学ぼう！ 医学英単語』森 茂、メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0423-8</p> <p>2. 2016年、『医学・医療系学生のための総合医学英語テキスト Step 1』日本医学英語教育学会編：一杉 正仁、福沢 嘉孝、森 茂 (編集・分担執筆)、安藤 千春、Clive Langham、Timothy Minton。メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0448-1</p> <p>3. 2017年、『医学・医療系学生のための総合医学英語テキスト Step 2』日本医学英語教育学会編：一杉 正仁、福沢 嘉孝、森 茂 (編集・分担執筆)、安藤 千春、Clive Langham、Timothy Minton。メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0449-8</p> <p>4. 2015年、『日本医学英語検定試験 3・4級教本 第3版』日本医学英語教育学会編：安藤 千春、五十嵐 裕章、押味 貴之、小島 多香子、玉巻 欣子、西村 月満、一杉 正仁、平野 美津子、森 茂 (編集・分担執筆)、Chrisine Kuramoto、Timothy Minton。メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0442-9</p>

所属・職位	医学部 医学科 法医学講座・教授	
氏名	森 晋二郎 (Mori Shinjiro)	
取得学位	博士 (医学)、群馬大学、2002年3月	
SDGs目標		
研究分野	法医学	
研究キーワード	遺体 死因 診断 内因性急死	
研究内容	<p>・遺体診断学に関する研究</p> <p>法医学領域において常に必要とされる技術は、正確な死因を確定することである。元来これらの技術は、遺体の解剖を主体として進歩・開発されてきた。一方、臨床医学の現場では、CTやエコー、種々の血液マーカーの開発など、革新的な技術の進歩・発展が認められている。よって、法医学領域においてもこれら臨床医学での技術を死因究明に応用することが求められている。しかし、遺体では循環動態がないだけでなく、細胞死によって細胞内容物が流出するなど、単純に技術を応用することは難しく、種々の条件を研究・工夫してクリアーしていくことが必要である。</p> <p>また、遺体には種々の死後変化が存在するが、生前の感染症や壊死の存在は死後変化をより早く進行させるなど、これら死後変化は疾患や死因によって影響を受けることがある。一方、環境や死後時間経過などによっても、死後変化の種類や程度が異なるため、これら疾患・死因と環境、死後時間経過の関係を研究することによって、臨床医学とは異なる遺体特有の所見を見いだせる可能性がある。</p> <p>・内因性急死に関する研究</p> <p>法医学領域で扱われる疾患による死亡は、その多くが急死を呈する疾患群である。これらは内因性急死と呼ばれ、発症から死亡までの時間が極端に短いことが特徴的である。よって、病院搬送前に死亡する事が多く、その病態生理も臨床で知られているものとは異なる特異的な形態を示していることがある。よって、これら内因性急死の特異的な病態生理を解明することは、新たな臨床医学への発展に貢献できるものと考えられる。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>Mori S, Takahashi S, Hayakawa A, Saito K, Takada A, Fukunaga T Fatal intracranial aneurysms and dissections causing subarachnoid hemorrhage: An epidemiological and pathological analysis of 607 legal autopsy cases. Journal of Stroke & Cerebrovascular Diseases , 27(2):486-493, 2017</p> <p>森晋二郎、呂彩子、景山則正、水上創、船越泉、渡貴博、福永龍繁：内因性心膜血腫剖検例における死後画像の評価と心肺蘇生術の影響. 法医学の実際と研究 58:119-124 , 2015</p> <p>森晋二郎、渡貴博、呂彩子、景山則正、福永龍繁：死後CT撮影および撮影画像の3次元解析を行った高血圧性脳出血の1剖検例. 法医病理 21(1):17-20, 2015</p>	

所属・職位	副学長（国際戦略担当） 医学部医学科環境・予防医学講座・教授	
氏名	山岡 吉生（Yamaoka Yoshio）	
取得学位	博士（医学）、京都府立医科大学、1997年3月	
SDGs目標	     	

研究分野	消化管感染症、分子疫学
------	-------------

研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ（ピロリ菌）、胃癌、消化器内視鏡、国際共同研究
---------	------------------------------------

研究内容	<p>研究内容は(A)ピロリ菌が疾患や薬剤耐性を惹起するメカニズムに関する研究、(B)ピロリ菌を用いた人類学的研究の2つに大きく分類、国際共同研究を通してこれらの課題に取り組んでいる。外国人を含む若手研究者の育成にも貢献している(研究代表者として、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムなど)。</p> <p>(A)に関して、2つのピロリ菌新規病原因子を発見・命名した実績を持つ(OipA、DupA)。ゲノム解析を駆使し、新規病原因子・抗菌薬耐性遺伝子変異の発見に取り組み、迅速に変異を検出するシステムの構築にも取り組んでいる。</p> <p>(B)に関して、ピロリ菌ゲノム解析にて、世界の諸民族の移動の歴史を解明、最近では日本人の起源についての研究にも取り組んでおり、沖縄には、旧石器時代や縄文時代の名残を残すピロリ菌が存在、前者は中央アジアから4万年ほど前に移動してきたことを証明した。国際共同研究では、低開発国を中心に、世界17か国に自ら出かけて内視鏡技術指導を行い、ピロリ菌疫学研究を進めている。最近では、地球規模保健課題解決推進のための研究事業(GACD: AMED)、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS: AMED +JICA)などの代表として、ブータン政府と共同で胃癌撲滅プロジェクトに取り組み、ブータンにおけるゲノム解析基盤、迅速検査キット製造の社会実装を目指している。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="347 1169 865 1617">  <p>国際共同研究で内視鏡検査を行った国</p> <p>モンゴル</p> <p>ネパール 不丹</p> <p>バングラデシュ</p> <p>インド</p> <p>スリランカ</p> <p>ラオス</p> <p>ミャンマー</p> <p>タイ</p> <p>ベトナム</p> <p>カンボジア</p> <p>マレーシア</p> <p>インドネシア</p> <p>その他 米国 ドミニカ共和国 コンゴ民主共和国 ケニア共和国</p> </div> <div data-bbox="976 1182 1337 1451">  <p>ブータンで内視鏡検査を行う山岡</p> </div> </div>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>1997年にペイラー医科大学（米国）に留学、研究代表者として大型NIH研究費を獲得し、2010年からは同消化器内科講座教授を兼任。Impact Factor (IF) 3000点以上、Scopus: <i>h-index</i> 72、国際英文誌430論文 (R5年9月末現在)。<i>Nature</i>, <i>Science</i>, <i>Lancet</i>, <i>Lancet Infect Dis</i>, <i>Nature Rev Clin Oncol</i>, <i>Nature Rev Gastro Hepatol</i>, <i>Ann Intern Med</i>, <i>Clin Microbiol Rev</i>. などIF50以上の雑誌に10論文発表 (IF2021年度版)。世界のエキスパートを選定するExpertscape (https://expertscape.com/ex/helicobacter+infections)で、ヘリコバクター感染症研究エキスパートの世界第3位に山岡が入る (R5年9月末現在)。現在進行中の外部資金研究は上述のGACD, SATREPS以外に、研究代表者としてe-ASIA (AMED)、二国間交流事業、新学術領域研究 (研究領域提案型)、基盤研究 (B) があり、基盤研究 (B) (途中基盤研究 (A) あり) は7回連続で採択中。【講座ホームページ】https://oitadepm.com/ 【業績リンク】https://researchmap.jp/yoyamaoka (research map), https://research-er.jp/researchers/view/244636 (research-er.jp: 日本の研究.com) https://www.scopus.com/authid/detail.uri?authorId=55183784100 (Scopus)</p>
---------------	--

所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座 (成人看護学)・教授	
氏名	脇 幸子 (Waki Sachiko)	
取得学位	博士 (看護学)、大阪大学、2016年9月	
SDGs目標	     	

研究分野	看護学
研究キーワード	慢性疾患看護、セルフケア支援、チーム医療、地域医療、看護教育学、看護生涯学習
研究内容	<p>●【研究1】慢性疾患(糖尿病)を持つ人のセルフケア支援に関する研究(研究活動①~⑤) 糖尿病重症化予防のためのセルフケア支援では、単に食事や運動などのセルフケア方法や知識だけでなく、自分自身で自分のセルフケア状況を自己評価できる力を育成することが重要であるが、病院での支援だけでは効率的ではない。そこで、糖尿病・予備軍のある人と糖尿病療養指導士との相互作用の場である、患者会活動や地域活動(就労支援)において、先行研究で示唆された『糖尿病をもつ人のセルフケア自己評価を促す支援のガイドライン』やACP概念を活用したセルフケア支援を行い、患者会や地域との協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性を探究している。(加えて、慢性疾患患者の防災プロジェクト参加)</p> <p>●【研究2】研究1と連動：チーム医療、地域医療、多職種連携に関する研究(研究活動⑥) 大分県での糖尿病医療と地域連携システムの検討として、情報提供・共有、相談導入など両者が共に活用できる資源としてタッチパネル式コンピュータ：アンドロイドを作製した。</p> <p>●【研究3】研究1・2と連動：介護老人保健施設における糖尿病チーム医療・介護モデルの開発(研究活動⑦) 介護老人保健施設における糖尿病チーム医療のモデル開発とアプリ作製・糖尿病療養指導士の介入による糖尿病チーム医療・介護の実践</p> <p>●キャリア開発</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①科学研究費助成事業 基盤C(平成19・20年度)「外来看護での糖尿病患者のセルフケア自己評価の試みと自己決定能力向上との関連」</p> <p>②科学研究費助成事業 基盤C(平成22~24年度)「タッチパネル式情報提供コンピュータを活用した糖尿病患者のセルフケア自己評価の試み」</p> <p>③科学研究費助成事業 基盤C(平成25~28年度)「糖尿病患者のセルフケア自己評価支援ツールとCDE看護師育成プログラムの開発」</p> <p>*Structural model of self-care agency in patients with diabetes: A path analysis of the Instrument of Diabetes Self-Care Agency and body self-awareness, Sachiko WAKI, etc, <i>Japan Journal of Nursing Science</i> (2016.5.25) doi:10.1111/jjns.12127</p> <p>*Insights into self-care behavior of patients with diabetes: support using a computerized self-evaluation system, Sachiko Waki, etc, <i>Journal of Nursing Education and Practice</i> 2016, Vol. 6, No. 10, 51-64. DOI: 10.5430/jnep.v6n10p51 URL: http://dx.doi.org/10.5430/jnep.v6n10p51</p> <p>④科学研究費助成事業 基盤C(平成30~令和4年度)「糖尿病療養指導士と患者会の協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性」</p> <p>⑤科学研究費助成事業 基盤C(令和5年度~令和9年度)「糖尿病と心不全をもつ人への看護の連携のためのプロトコール作成と評価」</p> <p>⑥科学研究費助成事業 萌芽(平成13~14年度)分担「地域における糖尿病患者のためのチーム医療の現状と連携システムの構築」地域貢献特別支援事業費(平成15~16年度)「生活習慣病等へき地医療対策支援事業 糖尿病管理のための情報の共有化：糖尿病管理のための情報の共有化」文科省概算要求事業(平成19・20年度)分担「ICTを活用した双方向性型地域再生モデル事業」</p> <p>⑦科学研究費助成事業 基盤C分担(平成30~令和4年度)「介護老人保健施設における糖尿病チーム医療・介護モデルの開発」(平成26~30年度)「介護老人保健施設における糖尿病療養指導士の介入による糖尿病チーム医療・介護の実践」</p>

所属・職位	医学部医学科大分こども急性救急疾患学部門医療・研究事業・教授		
氏名	脇口 宏之 (Hiroyuki Wakiguchi)		
取得学位	博士(医学)、山口大学、2015年9月		
SDGs目標	  	 	<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください。</p> 

研究分野	小児科学、リウマチ学、アレルギー学、免疫学、抗加齢医学
------	-----------------------------

研究キーワード	小児リウマチ、川崎病、ループス腎炎、食物蛋白誘発胃腸炎症候群、Blau症候群
---------	--

研究内容	<p>●小児リウマチ性疾患に関する調査およびバイオマーカーの同定</p> <p>日本で初めて小児リウマチ性疾患におけるCOVID-19の臨床的特徴を調査した。大多数が無症状および軽症であり、重症者および死亡者は認めなかった。日本の小児リウマチ性疾患患者においてCOVID-19は脅威ではない(論文1)。川崎病における免疫グロブリン静注療法(IVIG)不応と末梢血T細胞活性化との関係を検討した。IVIG不応群は反応群よりT細胞のHLA-DR陽性率が有意に高かった。T細胞におけるHLA-DR発現が川崎病患者におけるIVIG不応の予測マーカーとなりうる(論文2)。小児ループス腎炎における補体と腎病理との関係を検討した。尿所見正常群において血清C3値と腎病理分類とは関連していた。血清C3が小児サイレントループス腎炎患者における腎病理分類の予測マーカーとなりうる(論文3)。</p> <p>●ダウン症における食物蛋白誘発胃腸炎症候群に関する調査</p> <p>世界で初めてダウン症(DS)児に合併した食物蛋白誘発胃腸炎症候群(FPIES)の報告を行い、DS児のFPIESは重症化する可能性が認められた(論文4)。さらに、DS児におけるFPIESの臨床的特徴を調査した。FPIESと診断された全例が重篤であった。FPIES群は非FPIES群よりも人工肛門増設術の既往歴をもつ割合が有意に高かった。術後の粉ミルク栄養がDS児におけるFPIES発症に関与する可能性があり、アミノ酸乳栄養を考慮する必要がある(論文5)。</p> <p>●Blau症候群におけるアクネ菌病因論の構築(KAKEN: 23K14952)</p> <p>Blau症候群(BS)は、皮膚・関節・ぶどう膜炎を3主徴とする小児期発症サルコイドーシスであり、難治性疾患である。原因遺伝子としてNOD2が同定されたが、病因病態に不明点がある。最近、肉芽腫内にアクネ菌を同定したBSの1例を世界で初めて報告した。複数例でアクネ菌を同定すれば、アクネ菌病因論が構築され、病態解明につながる。本研究は、BS症例の真皮・滑膜・網膜生検組織における肉芽腫内のアクネ菌同定を独自性としたBSの病因解明を主目的とし、NOD2変異型とアクネ菌との関係を解析することにより病態解明にもつなげる。</p> <p>※関連リンク：https://www.webofscience.com/wos/author/record/U-2865-2017</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Wakiguchi H, Kaneko U, Miyamae T, et al. Viruses. 15:1205, 2023 2. Wakiguchi H, Hasegawa S, Ichiyama T, et al. Pediatr Res. 77:536-540, 2015 3. Wakiguchi H, Takei S, Kawano Y, et al. Clin Rheumatol. 36:433-437, 2017 4. Wakiguchi H, Hasegawa S, Ohga S, et al. Pediatr Allergy Immunol. 26:821-823, 2015 5. Okazaki F, Wakiguchi H, Hasegawa S, et al. Nutrients. 14:388, 2022 <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 免疫不全状態にある患者に対する予防接種ガイドライン2024(分担)協和企画 2024年 2. 小児リウマチ疾患トシリズマブ治療の理論と実際(分担)メディカルレビュー社 2023年 3. 若年性特発性関節炎における生物学的製剤使用の手引き(分担)羊土社 2020年 4. 成人診療科医のための小児リウマチ性疾患移行支援ガイド(分担)羊土社 2020年 5. 小児リウマチ学(分担)朝倉書店 2020年 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本アレルギー学会 働き方改革推進奨励賞 2023年 2. 日本小児アレルギー学会 トラベルグラント 2021年 3. 日本小児リウマチ学会 若手優秀演題奨励賞研究部門 2018年 4. 日本リウマチ学会 中国・四国支部若手奨励賞 2016年 5. 日本小児科学会 小児リウマチ専門医育成スカラーシップ賞 2014年
---------------	--

所属・職位	医学部附属医学教育センター・教授	
氏名	山本 恭子 (Yamamoto Kyoko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学教育
研究キーワード	医学教育 総合診療
研究内容	<p>① 認知症予防に関する研究 介護予防拠点での介護予防の取り組みの有用性 認知症早期発見に関する研究</p> <p>② 医学教育に関する研究 総合診療に関する学生の学び 鑑別診断に基づく身体診察 (HDPE) を用いた診察技能向上</p> <p>③ 総合診療に関する研究 身体症状の訴えの数とうつ病の関連</p>
研究業績・アピールポイント	<p>山本恭子, 中川幹子, 北野敬明, 宮崎英士. コロナ禍のオンライン講義—アクティブラーニングで健康の社会的決定要因 (SDH) を学ぶ—. 大分大学高等教育開発センター紀要 第13号,111-121,2021.</p> <p>Kyoko Y., Seiji S., Shigeki O., Akiko K., Aoi Y., Koh A., Kazunari M., Toshio F. A Diagnosis of Depression Should Be Considered in Patients with Multiple Physical Symptoms in Primary Care Clinics. <i>Tohoku J. Exp. Med.</i>,229,279-285 (2013).</p> <p>山本恭子,塩田星児,中川幹子,北野敬明,宮崎英士.特集: コロナ禍より生まれた医学教育イノベーション—鑑別診断を考えながら行う身体診察 (HDPEモデル) に基づく教育実践—認知的徒弟制の枠組みを用いた学生によるシナリオ作成とその成果—. 医学教育52(3): 241-245,2021.</p> <p>Kyoko Yamamoto, Aoi Yoshiiwa et al. Intervention study for elderly people attending Salons - Initiative to prevent dementia in local Government. WONCA2021 World Conference.</p>

所属・職位	医学部先進医療科学科臨床医工学コース・准教授	
氏名	安徳 恭彰 (Antoku Yasuaki)	
取得学位	博士(芸術工学)、九州大学、2013年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	医療情報、遠隔医療、学習支援
------	----------------

研究キーワード	遠隔診断治療システム、医療情報、学習管理システム
---------	--------------------------

研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 遠隔医療：テレビ会議システムを利用した遠隔医療教育への応用への研究 遠隔診療の普及に向けた、カメラによる画像認識や映像評価に関する研究。医療機器をネットワーク接続するのは患者の負担になるため、カメラに映った医療機器のデータを画像解析で自動的に読み込むことで患者負担を軽減するための研究（論文1） ● 医療情報：臨床データ収集におけるシステム開発 臨床データにおけるデータ収集システムの構築をおこない、データ収集の効率化、および収集データの精度向上を行っている（論文2） ● 遠隔医療教育における人材育成 国内外における国際遠隔医療教育における技術者育成事業。技術者のスキルレベル向上のための教科書作成、および研修プログラムの構築、その評価基準の作成など。国を超えた遠隔医療エンジニアの育成に係る技術的研究。（発表1）（著書1、2） ● 学生のキャンパス内でのPC環境改善に係る研究 学内で運用している貸し出しノートパソコンのシステム改修による効果検証。システム構築による24時間無人運用。無人による無断利用、期限無視などの問題をシステム改修により改善。（発表2） <p>院内における各種データに関する調査・解析 IRセンターにおいて、学生の成績データをもとに学生の学習効率の調査・解析を行なっている。入学時の成績が卒業時の成績にどの程度影響しているかなど教育効果の検証にもつながっている。</p>
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 令和3年、遠隔医療における医療機器の画像認識に関する研究, 第41回医療情報学連合大会論文集, p 878-879, 2021 2. 令和3年、Predictive factors of non-treatment and non-persistence to osteoporosis medication after fragility hip fractures at 3 years after discharge:a multicentre,prospective cohort study in the northern kyushu district of Japan, Archives of Osteoporosis(2021) 16:132 <p>発表</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 令和3年、Developing Evaluation Criteria for Engineering Training Programs in Remote Medical Education in Asia, IEEE TALE 2021, 2021.12. 2. 令和2年、ノートパソコンの無人貸出返却システムの改修, AXIES2020年次大会 <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 令和2年、新版医療情報第6版 医療情報システム編、2章3節「遠隔医療システム」 p. 52-58 2. 平成28年、遠隔医療カンファレンス 技術担当者になったら読む本～入門編～、編集
---------------	---

所属・職位	医学部 医学科微生物学講座・准教授	
氏名	伊波 英克 (Iha Hidekatsu)	
取得学位	博士(理学)、総合研究大学院大学、1992年9月	
SDGs目標	   	

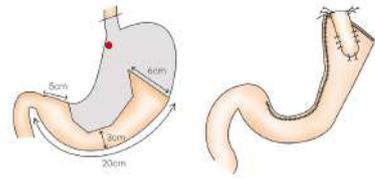
研究分野	分子腫瘍学・分子免疫学・分子疫学
研究キーワード	成人T細胞白血病、TAX1BP1、ウイルス感染症
研究内容	<p>●成人T細胞白血病(ATL)の病態形成機序・診療技術の向上に関する研究 ATLはヒトT細胞白血病ウイルス(HTLV-1)に感染した方の約5%が発症する、難治性の血液腫瘍です。ATLの発症危険度を予測する技術の確立と、より効果的で副作用の小さい治療技術の開発を目指しています。</p> <p>●免疫制御因子TAX1BP1とHTLV-1関連疾患との機能相関性の解析 TAX1BP1はHTLV-1が産生する癌遺伝子産物Taxと結合する宿主因子で、様々な免疫応答の活性を制御しています。HTLV-1はATLだけではなく様々な免疫不全症状を誘発します。TAX1BP1の機能をTaxがどのように攪乱し病態を進行させるかについて研究しています。</p> <p>●ウイルス関連疾患の分子疫学的調査 国内外の研究者とウイルス関連疾患の疫学調査を進めています。特にマレーシア大学サバ校のシニアリサーチフェローとして、同大学のアハメド教授との共同研究を重点的に展開しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>TAS-116 (pimipib), a heat shock protein 90 inhibitor, shows efficacy in preclinical models of adult T-cell leukemia. Cancer science 2021年11月、責任著者</p> <p>Depletion of TAX1BP1 amplifies innate immune responses during respiratory syncytial virus infection. Journal of virology 2021年8月</p> <p>An outbreak of gastroenteritis by emerging norovirus GII.2[P16] in a kindergarten in Kota Kinabalu, Malaysian Borneo. Scientific reports 2020年4月28日</p> <p>Soluble SLAMF7 promotes the growth of myeloma cells via homophilic interaction with surface SLAMF7. Leukemia 2020年1月</p> <p>The regulation of NDRG2 expression during ATLL development after HTLV-1 infection. Biochimica et biophysica acta. Molecular basis of disease. 2019年10月</p> <p>Human-porcine reassortant rotavirus generated by multiple reassortment events in a Sri Lankan child with diarrhea. Infection, genetics and evolution: journal of molecular epidemiology and evolutionary genetics in infectious diseases. 2018年11月</p> <p>Complete Sequences of the Human T-Cell Leukemia Virus Type 1 Proviral Genomes from Newly Established Adult T-Cell Leukemia Cell Lines in Oita Prefecture, Japan. Genome announcements. 2018年6月、責任著者</p>

所属・職位	医学部 看護学科 基盤看護学講座 精神看護学領域・准教授	
氏名	岩本 祐一 (Iwamoto Yuichi)	
取得学位	修士(看護学)、熊本大学、2013年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	精神看護学
研究キーワード	精神障害者 看護実践 退院支援 向精神薬
研究内容	<p>●精神科入院中の患者の自殺に関する看護実践の研究(論文1.) 精神科看護師が経験した慢性期統合失調症患者の予測困難な自殺から、入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点を明らかにすることを目的として研究を行った。本研究により、精神科看護師が【患者-看護師関係の長期化に伴う弊害】を中核とした慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点をもつ事で、慢性期統合失調症患者の自殺の予防や効果的な支援に繋がるとことが考えられた。</p> <p>●精神科長期入院患者に対する看護師による退院支援に関する研究(論文2.) 精神看護専門看護師(以下CNS)が行なう精神科長期入院患者の退院に向けた支援を明らかにすることを目的として研究を行った。本研究では、1年以上入院しているケア困難な精神障害者への支援および治療チームへのコンサルテーションを行っている精神看護専門看護師を対象として支援に関するデータを得た。データの分析にはGTAを用いて質的に分析を行った。その結果CNSは病棟看護師とケアを振り返り、提供できているケアとできていないケアを明確にしていた。また、患者への介入の糸口が見えない病棟看護師とその患者との治療的な関係を構築していた。さらには、長期入院患者が新しい試みを行う際に動機づけを明確にする事や、患者家族に対しての支援を行っていた。</p> <p>●一般科看護師のためのBZD系薬剤漸減時の離脱症状アセスメントツールの開発 本研究の目的は、向精神薬であるベンゾジアゼピン系薬剤(以下、BZD)の漸減時に見られる反跳性不安の視点を踏まえ、精神・身体・知覚症状に焦点を当てた一般科看護師のための離脱症状アセスメントツールを開発することである。本研究により、BZD漸減を促進し、さらには向精神薬の適正使用とBZDを使用する患者のQOL向上にむけての新たな提言につながるかと考えている。まずはBZD漸減時の看護アセスメントの実態調査を行い、アセスメント項目を抽出した。その後、予備的調査を経て看護実践自己評価尺度を開発した。現在、大規模調査にて尺度の信頼性・妥当性を検証中である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>これまで、精神科領域における看護師の実践に関する研究を行い、公表してきた。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 岩本祐一, 藤野成美. 入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な精神科看護師の視点. 日本精神保健看護学会誌. 29(1), 60-69, 2020. 2. 岩本祐一. 長期入院患者への退院支援における精神科看護師の支援 ~精神看護専門看護師の立場から~. 日本精神保健看護学会誌 26(2), 21-30, 2017. <p>●受賞</p> <p>第9回 中塚医学賞(大分大学医学研究表彰), 2019.</p>

所属・職位	医学部 医学科 総合外科・地域連携学講座・准教授	
氏名	上田 貴威 (Ueda Yoshitake)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	   	

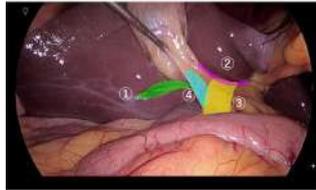
研究分野	外科腫瘍学、内視鏡外科治療学、総合外科学、地域医療学	
研究キーワード	内視鏡外科、高齢者医療、外科教育、地域外科医療	
研究内容	<p>消化器悪性腫瘍に対する外科治療、特に低侵襲治療やQOL向上に関する研究を行っている。</p> <p>●胃癌におけるHLA class I 抗原発現の意義に関する基礎研究 胃癌におけるHLA class I 抗原発現の意義を明らかにするため、HLA class I 抗原の発現と臨床病理学的因子および予後との関連を検討した。その結果、胃癌ではHLA class I 抗原が発現しているものほど腫瘍は発育・進展し予後も不良であった。特に、HLA-B/C抗原の発現は胃癌腹膜再発の独立危険因子であった (論文1)。</p> <p>●術後QOL向上を目指した腹腔鏡下噴門側胃切除術 (LAPG) の開発 (下図) 胃上部早期胃癌に対する「コブラ頭型細径胃管を用いた腹腔鏡下噴門側胃切除術」を開発し、その安全性・有用性を検討した。本術式は、安全かつ簡便に施行可能であり、LAPGの有用な再建法となりうることを示した (論文2)。</p> <p>●高齢者消化管悪性腫瘍に対する低侵襲外科治療の安全性・有効性に関する研究 高齢者における小型進行胃癌の臨床的意義を検討し、4cm以下であれば安全に手術が施行可能であり、予後も良好であることを示した (論文3)。また、80歳以上の高齢者大腸癌症例に対する腹腔鏡下手術の短期・長期成績を後方視的に検討し、高齢者大腸癌症例に対する腹腔鏡下手術の安全性・低侵襲性・根治性を示した (論文4)。</p> <p>●地域外科医療における問題点の現状調査・分析 大分県の勤務外科医に対するアンケート調査から、外科医のやりがいやキャリア形成、医学生と外科医のイメージの相違、外科医の働き方改革に対する意識、さらに地域における外科教育に対する外科医の役割、などに関する学会発表ならびに論文発表を行っている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2008年、Ueda Y, et al. Clinical Significance of HLA Class I Heavy Chain Expression in Patients With Gastric Cancer. J Surg Oncol. 97. 2016年、Ueda Y, et al. Laparoscopic Proximal Gastrectomy With Gastric Tube Reconstruction. JSLS. 20. 2017年、Ueda Y, et al. Clinical impact of small advanced gastric cancer (≤ 40 mm) in elderly patients: A retrospective cohort study. Int J Surg. 45. 2020年、Ueda Y, et al. Short- and long-term outcomes of laparoscopic surgery for colorectal cancer in the elderly aged over 80 years old versus non-elderly: a retrospective cohort study. BMC Geriatrics. 20. <p>その他、10年以上にわたり、大分県地域の勤務外科医に対する調査・分析活動を行い、10編以上の報告ならびに論文発表を行っている。</p> <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2018年、平成30年度日本外科系連合学会賞 (最優秀論文) 「上田貴威, 他. 外科医アンケート調査からみた外科医のキャリア形成に関する現状と課題」日本外科系連合学会誌42巻. 2018年、第32回地域保健医療に関する研究奨励賞「上田貴威, 他. 医療改革と医学教育改革に対する地域外科勤務医の認識：外科勤務医に対するアンケート調査」地域医学, 32巻. 	



所属・職位	医学部 消化器・小児外科学講座・准教授	
氏名	遠藤 裕一 (Endo Yuichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	消化器外科学、肥満外科学、AI開発
研究キーワード	肥満外科の基礎と臨床、AIによる手術支援システム開発

研究内容	<p>【肥満外科における基礎および臨床研究】</p> <p>①基礎研究：肥満外科手術では体重減少と同時に、糖尿病・高血圧、脂質代謝異常また脂肪肝などが高率に改善することが報告されている。当科はいままでに、ラット胃バンディングモデル、スリーブ状胃切除モデルおよびスリーブバイパスモデルを作成し、減量にともなうホルモン変化を測定し、報告してきた。最近では、脳内視床下部における満腹中枢に与える影響やコレシストキニンや短鎖脂肪酸への影響について研究している。</p> <p>②臨床研究：当科では腹腔鏡下調節性胃バンディング術 31例、腹腔鏡下スリーブ状胃切除 (LSG) を184例に行い (2022年2月末まで)、良好で安全な成績を報告している。わが国では一般的に行われている術前内視鏡検査の有用性や、LSG後の脂肪肝の改善率、またLSGの際に使用するステープラーの至適高および胃壁の厚さについて検討を行い、それぞれ論文化し報告している。最近では、術前減量が内臓脂肪に与える影響や、癌への影響について研究を行っている。</p> <p>【AIによる手術支援システム開発】</p> <p>腹腔鏡下胆嚢摘出術はわが国においては標準治療とされているが、重篤な合併症である胆道損傷が約1%の頻度で発生している。これらは解剖学的誤認が原因とされているため、誤認防止に有効とされるランドマーク (右図) をAIが術中にリアルタイムで教示することで、合併症が軽減されることが期待される。当科ではAIを使用した手術支援システム開発を胆嚢以外の胃・肝臓手術に応用するため、現在研究を続けている。</p>
------	---



- ① Rouviere sulcus (RS)
- ② Lower edge of liver S4
- ③ Common bile duct (CBD)
- ④ Cystic duct (CD)

研究業績・アピールポイント	<p>【肥満外科】</p> <p>Endo Y, Ohta M, Kawamura M, Fujinaga A, Nakanuma H, Watanabe K, Kawasaki T, Masuda T, Hirashita T, Inomata M. Gastric Wall Thickness and Linear Staple Height in Sleeve Gastrectomy in Japanese Patients with Obesity. <i>Obes Surg</i> 2022 Feb; 32 (2): 349-354</p> <p>遠藤裕一、太田正之、猪股雅史. 日本における肥満外科手術の現状と展望. <i>医学のあゆみ</i> 274: 934-938, 2020.</p> <p>【AI関連】</p> <p>Tokuyasu T, Iwashita Y, Matsunobu Y, Kamiyama T, Ishikake M, Sakaguchi S, Ebe K, Tada K, Endo Y, Etoh T, Nakashima M, Inomata M. Development of an artificial intelligence system using deep learning to indicate anatomical landmarks during laparoscopic cholecystectomy. <i>Surg Endosc</i>. 2021; 35(4): 1651-1658.</p> <p>遠藤裕一. 胆嚢摘出術におけるAIを用いた胆管損傷回避法. <i>胆と膵</i> 42(7), 医学図書出版, 東京, 2021.</p>
---------------	---

所属・職位	医学部 医学科 医学英語教育学講座・准教授	
氏名	大下 晴美 (Oshita Harumi)	
取得学位	博士 (教育学)、広島大学、2010年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	外国語教育
研究キーワード	読解指導、多読、NIRS、EMP
研究内容	<p>●英語多読および英語の読み聞かせに関する脳科学的研究</p> <p>NIRS (近赤外線分光法) を用い、「英語多読」や「英語絵本の読み聞かせ」の効果を脳科学的見地から研究し、これまでに以下の成果をあげてきた。</p> <p>①挿絵がある絵本は内容理解の観点からも脳活動の最適化の観点からも効果的な多読教材である (論文1)。</p> <p>②英語学習者の発達・学習段階の差によって、英語絵本読み聞かせ聴取時の脳の前頭前野の賦活部位および賦活量に違いが見られる (外部資金：科研費基盤研究(C) 17K01084)。</p> <p>現在は、発達・学習段階によって英語絵本読み聞かせ聴取時の脳の賦活状況の差が生じる要因について研究を行っている (外部資金：科研費基盤研究(C) 21K02860)。</p> <p>●英語医療面接の評価方法に関する研究および英語医療面接自動採点システムの開発</p> <p>医療従事者の英語力育成のための英語医療面接の評価方法に関して、これまでにCan-do Listを活用した評価項目の作成や教員間および学生間の評価結果の信頼性・妥当性に関する研究を行ってきた。現在は、医療従事者を目指す学生の学習支援ツールとしてだけでなく、医療従事者の生涯学習ツールとしても利用可能な「英語医療面接自動採点システム」開発のためのタスクや評価指標の開発を行っている (論文2・講演1)。</p> <p>※関連リンク： http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.aa59fa576d22f103520e17560c007669.html</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2020年、大下晴美、「日本人大学生における英語多読教材としての絵本の有効性—NIRSを用いた脳科学的見地からの検証—」 鬼田崇作・山内優佳(編)『深澤清治先生退職記念英語教育学研究』 溪水社 (広島) pp. 30-41. 2021年、大下晴美、「AIを用いた英語医療面接評価システムの開発に向けて」大坪喜子(編)『長崎大学教育学部英語科の記録と思い出—卒業生による思い出と実践レポートを中心に—』長崎大学英語教育研究会 (長崎) pp. 130-138. <p>●講演</p> <ol style="list-style-type: none"> 2021年、大下晴美、「ZoomとMoodleを用いた英語医療面接試験およびその評価法の課題と可能性」(外国語教育メディア学会九州・沖縄支部 2020年度学術講演会 (講師)) <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2013年、第10回植村研一賞 奨励賞 (日本医学英語教育学会)

所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座・准教授	
氏名	小野 光美 (Ono Mitsumi)	
取得学位	博士 (医学)、島根大学、2016年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	高齢者看護学
研究キーワード	高齢者, End-of-Life care, 終末期
研究内容	<p>●「介護老人保健施設における看取りに関する研究」</p> <p>高齢者の終末期に関する研究として、特に、介護老人保健施設での看取りについて取り組んできた。研究内容としては、介護老人保健施設で実際に看取りを経験した家族を対象にケアの実際やケアに関する評価（満足感や課題）、家族自身への影響についての面接調査、看取りケアにかかわるすべての専門職に対するケアの実際と評価、自身の揺らぎと満足度、多職種・他機関との連携についての量的調査、質的調査等である。介護老人保健施設は中間施設として在宅復帰・在宅療養支援の役割・機能があるため、看取りにおいても、利用者（高齢者）は繰り返し施設を利用する中で歳を重ね、なじみの関係（利用者同士やスタッフ）の中で、リハによる身体の調整を行いながら、最後までいつもの生活を送ることができる特徴がある。その過程の中で、どのように利用者（高齢者）自身の意思を理解し、住み慣れた地域で、生ききることを支えるのが、現在の研究の中心である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 科研費基盤研究 (C) 平成25年度～平成28年度、介護老人保健施設における高齢者と家族の意思を引き出すケアモデルの開発 (研究代表者) ・ 科研費基盤研究 (C) 平成29年度～令和4年度 (延長2年を含む)、地域包括ケアシステムにおける高齢者の終末期を支える看取りケアモデルの開発 (研究代表者)
研究業績・アピールポイント	<p>●高齢者の終末期に関する研究</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Mitsumi Ono, Hideyuki Kanda, Yuko Takeda, Sachiko Hara (2015) : Characteristics of Geriatric Health Service Facilities Designated as Sites of Death, Health, 7, 1275-1282. 2) 小野光美 (2015) : 介護老人保健施設の看取りにおける看護管理者の実践内容, 日本看護倫理学会, 7(1), 68-76. <p>●看護倫理に関する活動</p> <p>日本看護倫理学会臨床倫理ガイドライン検討委員会のメンバーとして、ガイドラインの作成および管理者応援研修を開催してきた。研究に発展させる途中である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 日本看護倫理学会臨床倫理ガイドライン検討委員会編 (2018) : 看護倫理ガイドライン : 医療や看護を受ける高齢者の尊厳を守るためのガイドライン・身体拘束予防ガイドライン, 看護の科学社. 2) 常見藍, 三重野英子, 小野光美 (2020) : 急性期病院での老年看護において看護師の倫理的感受性を育む取り組み, 日本老年看護学会第25回学術集会, 148.

所属・職位	医学部医学科臨床薬理学講座・准教授	
氏名	甲斐 恵 (Kai Megumi)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2011年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	臨床薬理学、薬物治療学、肝臓病学、医薬品開発、早期臨床試験
研究キーワード	新薬開発、肝機能障害時薬物動態試験、NASHバイオマーカー探索、安全性評価
研究内容	<p>これまで肝臓病学をベースとして医薬品開発および臨床薬理学に関わってきた。その中で生じたクエスチョンを解決すべく、下記の研究に取り組んでいる。今後は、これらの研究を医薬品開発分野で活用するだけでなく、薬物治療分野の充実を図り、患者診療に還元できるよう取り組みたいと考えている。</p> <p>●医薬品開発における新規肝障害度分類の構築 肝機能障害患者を対象とする薬物動態試験においては、現在Child-Pugh分類を用いて患者のセグメンテーションを行っている。Child-Pugh分類は、臨床での有用性は確立しているものの、肝機能障害の重症度が薬物動態に与える影響を評価する際の重症度分類としての妥当性は検討されていない。そのため、薬物動態学の視点から、より合理的な肝障害度評価が可能となる新規分類を構築するための研究を進めている。</p> <p>●非侵襲的な非アルコール性脂肪肝炎(NASH)バイオマーカーの探索 NASHの診断および進行度評価については、種々のモダリティを利用したバイオマーカーやスコアリングシステムが発案されている。評価の正確性のみならず、非侵襲的かつ簡便に採取可能な生体試料を用いた新規バイオマーカー探索を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●Pharmacokinetics and Safety of Single-Dose Esaxerenone in Japanese Subjects with Mild to Moderate Hepatic Impairment. Kurata A, Yoshida T, <u>Inoue M</u>, Ishizuka T, Nakatsu T, Shimizu T, Kato M, Nishikawa Y, Ishizuka H. Adv Ther. 2020 Jan;37(1):253-264.</p> <p>●PK Studies in Patients with Hepatic Function Impairment: Suggestions for the Better Study Conduction. <u>Inoue M</u>, Masuda M, Hirota T, Yamamoto Y, Hayashi R, Ishibashi M, Shiramoto M. 19th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology, Jul 1-6, 2018, Kyoto</p> <p>●A Survey of hepatic impairment pharmacokinetic studies for new drug approvals and proposal for the setting of the criteria for hepatic impairment. Shimada S, <u>Inoue M</u>, Terao K. 19th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology, Jul 1-6, 2018, Kyoto</p>

所属・職位	医学部医学科 感染予防医学講座・准教授	
氏名	神山 長慶 (Naganori Kamiyama)	
取得学位	博士(医学) 大阪大学大学院医学系研究科 第25884号 2013年3月	
SDGs目標	 <p>3 すべての人に健康と福祉を</p>	

研究分野	免疫学、ウイルス学、寄生虫学
研究キーワード	多発性硬化症、ジカウイルス、トキソプラズマ原虫
研究内容	<p>多発性硬化症の発症メカニズムの解明</p> <p>多発性硬化症は四肢の筋力低下などが主症状である自己免疫疾患で、我が国でも患者数が激増している。多発性硬化症の増悪化および発症には病原性T細胞の活性化が重要である。T細胞におけるシグナル伝達分子TRAF6が病原性T細胞の活性化に与える影響を分子レベルで明らかにすることを目指している。 参考文献 <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2018 Sep 26;504(1):245-250.</p> <p>ジカウイルスによる神経変性疾患の発症メカニズムの解析とその治療法の開発</p> <p>ジカウイルス感染は小頭症やギランバレー症候群などの神経変性疾患の発症に関与する。近年、ジカウイルス感染と多発性硬化症との関連を示唆する症例報告がなされたが、その詳細は不明である。我々はジカウイルスを感染させたマウスを用いて多発性硬化症モデルを作製するという独自のモデルを樹立し、ジカウイルスが病原性T細胞の中樞神経系への遊走を制御することで多発性硬化症の病態に与える影響を分子レベルで解析し、その病態に関わる分子を標的とした新規治療法を開発することを目指している。 参考文献 <i>Antiviral Res.</i> 2017 Oct;146:1-11.</p> <p>先天性トキソプラズマ症モデルを用いたその予防法の開発</p> <p>トキソプラズマ原虫はネコ科の動物を終宿主とする寄生虫で、妊婦が初感染した際に子供に重篤な障害が生じることがあり、これを先天性トキソプラズマ症と呼ぶ。我々は遺伝子改変マウスを用いて独自の先天性トキソプラズマ症モデルを作製した。このモデルを利用することで、先天性トキソプラズマ症の発症メカニズムの解明および新規治療法の開発を目指している。 参考文献 <i>J Exp Med.</i> 2011 Jul 4;208(7):1533-46. 関連リンク：大分大学医学部感染予防医学講座ホームページ http://www.med.oita-u.ac.jp/idc/</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・高病原性トキソプラズマ原虫が分泌する病原性因子ROP18が急性トキソプラズマ症発病の際の免疫抑制反応に重要であることを明らかにした。<i>J Exp Med.</i> 2011 Jul 4;208(7):1533-1546. ・オートファジー必須分子群の一部が、IFN-γ 依存的なトキソプラズマ原虫の殺傷機構で重要な役割を果たしていることを発見した。<i>Immunity.</i> 2012 Aug 24;37(2):302-313. ・小胞体ストレスセンサーであるGREBHがスルピリンショックの発現に関与することを明らかにした。<i>PLoS One.</i> 2013;8(2):e55800. ・腸上皮に特異的に発現するGPIアンカー型膜タンパク質Lypd8が細菌の粘液層への侵入を抑制するという機構を明らかにした。<i>Nature.</i> 2016 Apr 7;532(7597):117-21. (・新規ジカウイルス感染モデルマウスおよび治療薬に関する報告を行った。<i>Antiviral Res.</i> 2017 Oct;146:1-11. ・T細胞におけるTRAF6がT細胞の遊走や抗腫瘍免疫反応を制御することを明らかにした。<i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2018 Sep 26;504(1):245-250. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2022 Jul 12;613:26-33. ・樹状細胞におけるTRAF6が感染性腸炎の病態を制御することを明らかにした。<i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2023 Aug 20;669:103-112. ・ケモカインと受容体 CCL20/CCR6シグナルが多発性硬化症に与える影響を明らかにした。<i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2023 Jan 22;641:123-131.

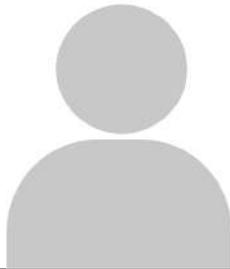
所属・職位	医学部 医学科 生理学講座・准教授	
氏名	黒川 竜紀 (Kurokawa Tatsuki)	
取得学位	博士 (情報工学)、九州工業大学、2005年6月	
SDGs目標		

研究分野	イオンチャネルの構造と生理機能
研究キーワード	イオンチャネル、酸化ストレス、膜電位
研究内容	<p>○TRPチャネルの構造と生理機能 (原著論文3, 4, 7, 9)</p> <p>TRPチャネルは、種々の生理活性物質により活性化され、環境変化を感知するセンサータンパク質として働く。特に酸化感受性TRPチャネルについて、その生理学的意義について研究を展開している。</p> <p>○心筋イオンチャネルの翻訳後修飾と機能変化 (原著論文1, 2, 6)</p> <p>糖鎖修飾などの翻訳後修飾がチャネル活性にどう影響するかについて研究を行っている。</p> <p>○DNAナノ構造体へのイオンチャネルの集積化 (原著論文8)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○原著論文 (過去5年分を記載)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Wang P, Zhu X, Wei M, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Disruption of asparagine-linked glycosylation to rescue and alter gating of the Nav1.5-Na⁺ channel. <i>Heart Vessels</i> 36, 589-596, 2021. 2. Wang P, Wei M, Zhu X, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, Morishima M, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Nitric oxide down-regulates voltage-gated Na⁺ channel in cardiomyocytes possibly through S-nitrosylation-mediated signaling. <i>Sci. Rep.</i> 11, 11273, 2021. 3. Uchiyama M, Nakao A, Kurita Y, Fukushi I, Takeda K, Numata T, Tran NH, Sawamura S, Ebert M, <u>Kurokawa T</u>, Sakaguchi R, Stokes AJ, Takahashi N, Okada Y, Mori Y. O₂-Dependent Protein Internalization Underlies Astrocytic Sensing of Acute Hypoxia by Restricting Multimodal TRPA1 Channel Responses. <i>Curr. Biol.</i> 17, 3378-3396.e7, 2020. 4. Tanaka M, Hayakawa K, Ogawa N, <u>Kurokawa T</u>, Kitanishi K, Ite K, Matsui T, Mori Y, Unno M. Structure determination of the human TRPV1 ankyrin-repeat domain under nonreducing conditions. <i>Acta Crystallogr. F Struct. Biol. Commun.</i> 76, 130-137, 2020. 5. Jouraku A, Kuwazaki S, Miyamoto K, Uchiyama M, <u>Kurokawa T</u>, Mori E, Mori MX, Mori Y, Sonoda S. Ryanodine receptor mutations (G4946E and I4790K) differentially responsible for diamide insecticide resistance in diamondback moth, <i>Plutella xylostella</i> L. <i>Insect Biochem. Mol. Biol.</i> 118, 103308, 2020. 6. Liu Y, Wang Pu, Ma F, Zheng M, Liu G, Kume S, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Asparagine-linked glycosylation modifies current density and voltage-dependent gating properties of Cav3.1-T-type Ca²⁺ channel. <i>J. Physiol. Sci.</i> 69, 335-343, 2019. 7. Horton JS, Shiraishi T, Alfulaij N, Small-Howard AL, Turner HC, <u>Kurokawa T</u>, Mori Y, Stokes AJ. TRPV1 is a component of the atrial natriuretic signaling complex, and using orally delivered antagonists, presents a valid therapeutic target in the longitudinal reversal and treatment of cardiac hypertrophy and heart failure. <i>Channels (Austin)</i> 13, 1-16, 2019. 8. <u>Kurokawa T</u>, Kiyonaka S, Nakata E, Endo M, Koyama S, Mori E, Tran NH, Dinh H, Suzuki Y, Hidaka K, Kawata M, Sato C, Sugiyama H, Morii T, Mori Y. DNA Origami Scaffolds as Templates for Functional Tetrameric Kir3 K⁺ Channels. <i>Angew. Chem. Int. Ed.</i> 57, 2586-2591, 2018. 9. Numata T, Tsumoto K, Yamada K, <u>Kurokawa T</u>, Hirose S, Nomura H, Kawano M, Kurachi Y, Inoue R, Mori Y. Integrative approach with electrophysiological and theoretical methods reveals a new role of S4 positively charged residues in PKD2L1 channel voltage-sensing. <i>Sci. Rep.</i> 7, 9760, 2017. 10. Hirano M, Takada Y, Wong CF, Yamaguchi K, Kotani H, <u>Kurokawa T</u>, Mori MX, Snutch TP, Ronjat M, Waard M, Mori Y. C-terminal splice variants of P/Q-type Ca²⁺ channel CaV2.1 α1 subunits are differentially regulated by Rab3-interacting molecule proteins. <i>J. Biol. Chem.</i> 292, 9365-9381, 2017.

所属・職位	医学部 医学科 皮膚科学講座・准教授	
氏名	後藤 瑞生 (Goto Mizuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	iPS細胞、創傷治癒
研究内容	<p>iPS細胞は様々な臓器の細胞に分化する細胞で、再生医療への利用が期待されている。我々はヒトiPS細胞から誘導した細胞を用いて、創傷治癒に対する再生医療として利用する計画を検討中である(研究業績3)。そして、iPS細胞のもう一つの利点として、今まで採取が困難であった患者の疾患臓器の細胞をiPS細胞から作製し、創薬研究に利用できるということが挙げられる。我々も難治性の皮膚疾患の患者より作製したiPS細胞を使った研究を行っている。具体的には、患者のiPS細胞から皮膚細胞を作製することに加えて、iPS細胞から皮膚細胞などへの分化過程の観察も詳細に行う。分化してしまった細胞の研究内容は、今まで行われていた臨床研究の内容とあまり変わらないが、細胞の分化過程において問題があれば、その点を解析することにより、その疾患の新たな原因を発見できる可能性がある。また、その原因に対する治療方法は今までの既存の治療方法とは全く異なったものになりえる。関連リンク：http://www.med.oita-u.ac.jp/dermatology/research_ips.html</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Yokouchi Y, Suzuki S, Ohtsuki N, Yamamoto K, Noguchi S, Soejima Y, <u>Goto M</u>, Ishioka K, Nakamura I, Suzuki S, Takenoshita S, Era T. Rapid repair of human disease-specific single-nucleotide variants by One-SHOT genome editing. <i>Sci Rep</i>, 2020 Aug 18;10(1):13927. 2. Matsuda-Hirose H, Yamate T, <u>Goto M</u>, Katoh A, Kouji H, Yamamoto Y, Sakai T, Uemura N, Kobayashi T, Hatano Y. Selective Inhibition of β-Catenin/Co-Activator Cyclic AMP Response Element-Binding Protein-Dependent Signaling Prevents the Emergence of Hapten-Induced Atopic Dermatitis-Like Dermatitis. <i>Ann Dermatol</i>, 2019 Dec;31(6):631-639. 3. Eto S, <u>Goto M</u>, Soga M, Kaneko Y, Uehara Y, Mizuta H, Era T. Mesenchymal stem cells derived from human iPS cells via mesoderm and neuroepithelium have different features and therapeutic potentials. <i>Plos One</i>, 2018 Jul 25;13(7):e0200790. 4. Sato T, <u>Goto M</u>, Takeo N, Hatano Y. Case of generalized morphea with the manifestation of diffuse systemic cutaneous sclerosis without sclerodactyly. <i>J Dermatol</i>, 2018 May;45(5):e100-e101. 5. Wang Z, Nakamura K, Jinnin M, Kudo H, <u>Goto M</u>, Era T, Kira T, Nakashima T, Fukushima S, Ihn H. Establishment and gene expression analysis of disease-derived induced pluripotent stem cells of scleroderma. <i>J Dermatol Sci</i>, 2016; 84(2): 186-196. 6. Tsuchisaka A, Numata S, Teye K, Natsuaki Y, Kawakami T, Takeda Y, Wang W, Ishikawa K, <u>Goto M</u>, Koga H, Sogame R, Ishii N, Takamori S, Hoshino T, Brandt O, Pas HH, Fujiwara S, Hashimoto T. Epiplakin is a paraneoplastic pemphigus autoantigen and related to bronchiolitis obliterans in Japanese patients. <i>J Invest Dermatol</i>, 2016, 136(2), 399-408. 7. <u>Goto M</u>, Sumiyoshi H, Sakai T, Fassler R, Ohashi S, Adachi E, Yoshioka H, Fujiwara S. Elimination of epiplakin by gene targeting results in acceleration of keratinocyte migration in mice. <i>Mol Cell Biol</i>, 2006; 26(2): 548-558

所属・職位	医学部 医学科 総合診療・総合内科学講座・准教授	
氏名	塩田 星児 (Shiota Seiji)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標		
研究分野	総合診療、疫学	
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ	
研究内容	<p>My research is aimed at understanding the important human bacterial pathogen, <i>Helicobacter pylori</i>, which is the major cause of peptic ulcer disease and of gastric cancer. The infection remains latent in the majority of infected patients, only a minority of individuals with <i>H. pylori</i> infection ever develop them. Importantly, the risk for different outcomes varies both among and within populations. These different outcomes are poorly understood and are currently thought to reflect differences in the virulence of the infecting <i>Helicobacter pylori</i> strain, in host genetic factors, in environmental factors, as well in interactions among these elements. My work has pursued basic studies of bacterial gene function and tries to provide critical information to help eliminate the suffering caused by peptic ulcer and deaths caused by gastric cancer. The problem however remains only partially solved and my work is important in helping eliminate this important human pathogen.</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>Shiota S, Singh S, Anshasi A, El-Serag HB. The Prevalence of Barrett's Esophagus in Asian Countries: A Systematic Review and Meta-analysis. Clin Gastroenterol Hepatol. 2015 Nov;13(11):1907-18.</p> <p>Shiota S, Reddy R, Alsarraj A, El-Serag HB, Graham DY. Antibiotic Resistance of Helicobacter pylori Among Male US Veterans. Clin Gastroenterol Hepatol. 2015 Sep;13(9):1616-24.</p> <p>実施機関名：日本学術振興会 制度（事業）名：科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)（基盤研究(C)） 課題名：認知症患者のピロリ菌CagA抗体陽性率の検討（課題番号：21K07321） 実施期間：令和3-5年度 予算規模：4,160千円（直接経費3,200千円） 申請代表者名：塩田星児</p> <p>実施機関名：日本学術振興会 制度（事業）名：科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(若手研究(B))) 課題名：ヘリコバクター・ピロリCagA抗体の迅速検出キットの開発 実施期間：平成25-26年度 予算規模：4,030千円（直接経費3,100千円） 申請代表者名：塩田星児</p>	

所属・職位	医学部 医学科 医化学講座・准教授	
氏名	下田 恵 (Shimoda Kei)	
取得学位	博士 (理学)、広島大学、1999年7月	
SDGs目標	 	

研究分野	機能材料学
研究キーワード	グリコシド化、機能性化合物、環境汚染物質
研究内容	<p>○機能性食品のグリコシド化に関する研究 化学的および酵素的的手法を利用して機能性食品をグリコシド化することにより、生理活性の高い機能性食品の開発を行う。(論文1)</p> <p>○医薬品のグリコシド化に関する研究 化学的および酵素的的手法を利用して医薬品をグリコシド化することにより、生理活性の高い医薬品を開発を行う。(論文2)</p> <p>○環境汚染物質のグリコシド化に関する研究 酵素的的手法を利用して環境汚染物質をグリコシド化することにより、環境汚染物質を環境から除去する。(論文3)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. I. Nakanishi, K. Ohkubo, Y. Shoji, Y. Fujitaka, K. Shimoda, et al., Relationship between the radical-scavenging activity of selected flavonols and thermodynamic parameters calculated by density functional theory. <i>Free Radical Research</i>, Vol. 54, No. 7, pp. 534-539 (2020). 2. H. Hamada, H. Hamada, K. Shimoda, et al., Resveratrol oligosaccharides (gluco-oligosaccharides) effectively inhibit SARS-CoV-2 infection: Glycoside (polysaccharide) approach for treatment of COVID-19. <i>Natural Product Communications</i>, Vol. 16, No. 5, pp. 1-3 (2021). 3. K. Shimoda, N. Kubota, Y. Kondo, D. Sato, et al., Glycosylation of fluorophenols by plant cell cultures. <i>International Journal of Molecular Sciences</i>, Vol. 10, No. 5, pp. 1942-1949 (2009). <p>○受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平成22年度 舟橋重明記念奨励助成金

所属・職位	医学部医学科心臓血管外科学講座 准教授		
氏名	首藤 敬史 (SHUTO TAKASHI)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年9月		
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください	
研究分野	成人心臓血管、人工臓器、IBTA(in-body tissue architecture)		
研究キーワード	大動脈瘤、補助人工心臓、バイオチューブ		
研究内容	<p>●胸腹部大動脈瘤に対するハイブリッド治療の研究。 胸腹部大動脈瘤は最も治療が難しい動脈瘤です。当科では手術のハイリスク患者に対して腹部内蔵血管バイパス術と胸部ステントグラフト内挿術を組み合わせたハイブリッド手術をおこなってきました。その15年を超える遠隔期の成績、4D flow MRIを使用してバイパスされた腹部内蔵血管への血流分布のデータ解析をおこなってきました(論文1、2)。</p> <p>●補助人工心臓に関する研究。 心臓移植を必要とするような重症心不全患者に対しては補助人工心臓が装着されます。重症心不全患者に対しての機械的補助に関する臨床研究をおこなっています(論文4)。</p> <p>●生体内組織形成術(IBTA)による小口径代用血管の作成とその臨床応用に関する研究。 重症下肢虚血は血行再建がおこなわれなければ下肢の切断に至る病態です。下肢のバイパス手術が一般的な治療法ですが、特に下腿の小口径自家動脈へのバイパスは自家静脈グラフトの使用が推奨されます。自家静脈が使用できない場合に、生体内組織形成術で自己組織による代用血管(バイオチューブ)を作成し、それを使用したバイパス術を動物実験でおこなってきました。将来はその臨床への応用を期待しています。</p>		
研究業績・アピールポイント	<p>大分大学心臓血管外科ではヤギや豚などの大型動物実験をおこなうことができます。臨床での手術件数も豊富なため、多くの臨床研究もおこなわれ、国内外の学会で報告しています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2018年、Ten-year experience of the thoraco-abdominal aortic aneurysm treatment using a hybrid thoracic endovascular aortic repair 2022年、Blood flow analysis after a renovisceral debranching procedure by four-dimensional flow magnetic resonance imaging 2023年、Low-flow perfusion technique for shaggy aortic arch 2024年、心臓移植待機患者への植込み型補助人工心臓の使用経験 		

所属・職位	医学部 医学科 解剖学講座・准教授	
氏名	千葉 政一 (Chiba Seiichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年6月	
SDGs目標		

研究分野 代謝学、行動生理学、医療工学、肥満臨床学、解剖学

研究キーワード 肥満症、中枢性ヒスタミン、記憶学習

研究内容

- 肥満にともなう代謝学に関する研究
基礎研究では食事誘導性肥満モデルを作成し、主に中枢性側行動調節機構を解析している。臨床研究では行動療法の有効性を後ろ向き観察研究として行なっている。
- 中枢性ヒスタミン機能に関する研究
小動物視床下部のヒスタミン機能について外因性にヒスタミンを投与し、その行動修飾作用を解析している。
- 医療工学機器の開発
体重日内変動のデジタル解析を行い、AIによる体重減少効果の予測を検討している。皮膚小外科用の局所麻酔薬を用いない皮膚冷却デバイスを開発した。

研究業績・アピールポイント

- 論文
Wei H, ***Chiba S**, Moriwaki C, Kitamura H, Ina K, Aosa T, Tomonari K, Gotoh K, Masaki T, Katsuragi I, Noguchi H, Kakuma T, Hamaguchi K, Shimada T, Fujikura Y, Shibata H: A clinical approach to brown adipose tissue in the para-aortic area of the human thorax. PloS one 10:e0122594, 2015 (IF 4.411) 査読有
Moriwaki C, ***Chiba S**, Wei H, Aosa T, Kitamura H, Ina K, Shibata H, Fujikura Y: Distribution of histaminergic neuronal cluster in the rat and mouse hypothalamus. J Chem Neuroanat 68:1-13, 2015 (IF 1.8) 査読有
Aosa T, ***Chiba S**, Kitamura H, Ina K, Tatsukawa S, Moriwaki C, Wei H, Gotoh K, Masaki T, Kakuma T, Shibata H, Fujikura Y: Pore alterations of the endothelial lining of rat fenestrated intestinal capillaries exposed to acute stress. Histol. Histopathol. 31(7):807-817, 2016 (IF 2.025) 査読有
***千葉政一**、森脇千夏、伊奈啓輔、藤倉義久：
摂食と肥満における視床下部神経ヒスタミンの役割:創薬へ向けて。
日本薬理学会雑誌 147:1-8, 2016
***千葉政一**：基礎医学研究の今。
肥満研究 68(2):130-131, 2017

所属・職位	医学部医学科薬理学講座・准教授	
氏名	寺林 健 (TERABAYASHI TAKESHI)	
取得学位	博士(医学)、東京大学、2007年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	薬理学、細胞生物学
研究キーワード	細胞運動、細胞骨格、上皮細胞恒常性
研究内容	<p>●基底細胞恒常性維持シグナルを標的とした慢性炎症性皮膚疾患治療薬開発 表皮を構成する基底細胞の増殖と分化の不均衡は皮膚のバリア機能に異常を生じさせ、アトピー性皮膚炎など慢性炎症性皮膚疾患の発症・増悪化の大きな要因の1つとなります。私たちはアクチン細胞骨格を基調として基底細胞のバランスを制御するシグナル伝達やその標的となる転写因子群の同定を行っており、同定された因子の活性制御機構の解明を通じて、慢性炎症性皮膚疾患に対する治療戦略と治療薬開発に向けた基盤研究を進めています。</p> <p>●がん細胞の浸潤・転移を抑制する天然由来化合物の探索 走化性を獲得することにより、がん細胞は原発巣からの浸潤・転移を可能にします。生薬をはじめとした天然資源には様々な生理活性を有する化合物が含まれていることから、がんの走化性を標的とした成分の探索を行っています。</p> <p>●急性腎障害予防・治療に向けた創薬研究 抗癌薬、抗菌薬、NSAIDsなどは尿細管上皮細胞にダメージを与え、腎性急性腎障害を誘導します。特に、がん治療における急性腎障害の発生は、投薬の減量や中止を余儀なくされるため治療の障害となります。現在までに有効な予防薬や治療薬は確立されていないことから、私たちは新薬開発のための基盤構築を行っています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文(関連する業績のみ)</p> <ol style="list-style-type: none"> Nishida M., *Terabayashi T., Okuma T., Adachi S., Tomo T., Kawano M., Tanaka K., Tsumura H., Anai H., Ishizaki T., Nishida Y. and Hanada K. *Authors equally contributed. Mechanism of action of non-camptothecin inhibitor Genz-644282 in topoisomerase I inhibition. <i>Communications Biol.</i> 5(1):982 (2022) Inoue N., *Terabayashi T., Takiguchi K.Y., Fujinami D., Matsuoka S., Kawano M., Tanaka K., Tsumura H., Ishizaki T., Narahara H., Kohda D., Nishida Y., Hanada K. *Authors equally contributed. Benzylisoquinoline alkaloids, Berberine and coptisine, act against camptothecin-resistant topoisomerase I mutants. <i>Sci. Rep.</i> 11(1):7718 (2021) Abe I., Terabayashi T., Teshima Y., Ishii Y., Miyoshi M., Kira S., Kondo H., Saito S., Tsuchimochi H., Shirai M., Yufu K., Arakane M., Daa T., Thumkeo D., Narumiya S., Ishizaki, T., and Takahashi N. Disruption of Actin Dynamics Regulated by Rho Effector mDia1 Attenuates Pressure Overload-Induced Hypertrophic Responses in Cardiac Ventricle and Exacerbates Dysfunction. <i>Cardiovasc Res.</i> 117(4):1103-1117 (2021) <p>Terabayashi T., Hanada K., Motani K., Kosako H., Yamaoka M., Kimura T. and Ishizaki T. Baicalein disturbs the morphological plasticity and motility of breast adenocarcinoma cells depending on the tumour microenvironment. <i>Genes Cells</i> 23(6): 466-479 (2018)</p>

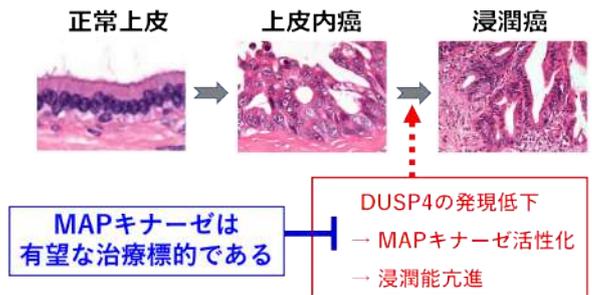
所属・職位	医学部 先進医療学科 臨床医工学コース・准教授	
氏名	友 雅司 (Tomo Tadashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	人工臓器学 代謝系	
研究キーワード	人工腎臓、尿毒症性溶質、腹膜保護	
研究内容	<p>カスケード型尿毒症性溶質の除去に関する研究 人工臓臓に関して従来の蓄積型毒素のみならずカスケード型毒素の除去できるモダリティの開発研究を行っている。</p> <p>日本国特許：金成泰,友 雅司,山下明泰 特許第6889504号(P6889504)</p> <p>腹膜透析における腹膜劣化予防に関する研究を行っている。</p> <p>国際特許:Agent for inhibiting peritoneal membrane thickening:Patent No US 8,842,262,B2: International Filing Date 30.03.2010</p>	
研究業績・アピールポイント	<p><u>Tomo T</u>, Okabe E, Yamamoto T, Namoto S, Iwashita T, Matsuyama K, Kadota J, Nasu M. Synergistic cytotoxicity of acidity and 3,4-Dideoxyglucosone-3-ene under the existence of lactate in peritoneal dialysis fluid. Ther Apher Dial.:9(2):182-7. 2005</p> <p>*<u>Tomo T</u>, Okabe E, Matsuyama K, Iwashita T, Yufu K, Nasu M. The effect of peritoneal rest in combination therapy of peritoneal dialysis and hemodialysis: using the cultured human peritoneal mesothelial cell model. J Artif Organs. 2005;8(2):125-9.</p>	

所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・准教授	
氏名	秦 暢宏 (Hata Nobuhiro)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2008年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	脳神経外科学 脳腫瘍 癌ゲノム
研究キーワード	脳腫瘍の外科、集学的治療 分子診断 遺伝子解析
研究内容	<p>●神経膠腫の新規遺伝子解析法開発に関する研究 キャピラリーシークエンサーによりSSCP解析を行う手法：LOQUSを新規に開発し、染色体欠失と脳腫瘍悪性化の関係を報告した（論文1）。 real-time PCRマシンによる簡便な新規分子診断法：HRM-MIを開発（論文2）した。 髄液中の微量核酸を解析する技術の開発により腰椎穿刺による神経膠腫の分子診断に成功し、脳腫瘍におけるliquid biopsyの確立に至った（論文3,4）。</p> <p>●神経膠腫の分子診断に関する研究 神経膠腫の分子診断と集学的治療の予後との関連を報告してきた（論文5-7など多数）。</p> <p>※関連リンク：https://neurosurgery.med.oita-u.ac.jp</p>
研究業績・アピールポイント	<p>① Hata N, et al. Allelic losses of chromosome 10 in glioma tissues detected by quantitative single-strand conformation polymorphism analysis. Clin Chem. 52(3): 370-378. 2006</p> <p>② Hatae R, Hata N, et al. Precise Detection of IDH1/2 and BRAF Hotspot Mutations in Clinical Glioma Tissues by a Differential Calculus Analysis of High-Resolution Melting Data. PLoS One. 11(8):e0160489. 2016</p> <p>③ Fujioka Y, Hata N, et al. Molecular diagnosis of diffuse glioma using a chip-based digital PCR system to analyze IDH, TERT, and H3 mutations in the cerebrospinal fluid. Journal of Neuro-oncology, 152(1), 47-54. 2021</p> <p>④ Otsuji R, Fujioka Y, Hata N, et al. Liquid biopsy with multiplex ligation-dependent probe amplification targeting cell-free tumor DNA in cerebrospinal fluid from patients with adult diffuse glioma. Neuro-Oncology adv, 5(1), vdac178. 2023</p> <p>⑤ Hata N, et al. Deferred radiotherapy and upfront procarbazine-ACNU-vincristine administration for 1p19q codeleted oligodendroglial tumors are associated with favorable outcome without compromising patient performance, regardless of WHO grade. Onco Targets Ther. 9:7123-7131. 2016</p> <p>⑥ Hata N, et al. First-line bevacizumab contributes to survival improvement in glioblastoma patients complementary to temozolomide. J Neurooncol. 146(3): 451-458, 2020</p> <p>⑦ Funakoshi Y, Hata N, et al. Clinical significance of CDKN2A homozygous deletion in combination with methylated MGMT status for IDH-wildtype glioblastoma. Cancer Med. 10 (10): 3177-3187, 2021</p> <p>・科学研究費助成事業</p> <p>2011年度若手B「次世代シークエンサーによるグリオーマLOH領域の網羅的解析」：研究代表者</p> <p>2016年度基盤C「グリオーマの分子病理学的診断のための、統合的解析プラットフォームの構築」：研究代表者</p> <p>2020年度基盤C「liquid biopsyによる、神経膠腫の非侵襲的診断/病態把握システムの開発」：研究代表者</p> <p>2021年度基盤B「リキッドバイオプシーによる免疫ゲノム解析に基づくグリオーマ免疫環境多様性の解明」：研究分担者</p> <p>2023年度基盤C「liquid biopsyによる神経膠腫の網羅的分子診断」：研究代表者</p>

所属・職位	医学部 医学科 分子病理学講座・准教授	
氏名	泥谷 直樹 (Hijiya Naoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年9月	
SDGs目標		

研究分野	病理学
研究キーワード	膵癌、大腸癌、悪性形質、責任遺伝子、分子標的治療
研究内容	<p>●膵上皮内癌から浸潤癌への進展に関わる分子機序の解明 膵癌は正常上皮から上皮内癌を経て生じる悪性腫瘍です。私は上皮内癌と浸潤癌のゲノム異常を比較することで、浸潤に関わるゲノム異常と責任遺伝子を同定し、それに伴って活性化されるMAPキナーゼ経路が有望な治療標的となりうることを報告しました(論文#1, 2)。</p> <p>●MAPキナーゼ阻害薬の耐性化関連分子を標的とした新規治療法の開発 膵癌はMAPキナーゼ経路依存性腫瘍であるにもかかわらず、MAPキナーゼ阻害薬に対して強い抵抗性を示します。私は抵抗性に関わる分子を同定し、その分子の機能を抑制することでMAPキナーゼ阻害薬の感受性が改善することを証明しました (paper in preparation)。現在、膵癌の新規治療法の開発に向けた基礎研究を進めています。</p> <p>●大腸癌の進展に関わる分子機序の解明 大腸癌の深達度や転移は重要な予後規定因子です。これらの悪性形質に関わる分子を同定して、バイオマーカーおよび治療標的としての有用性を報告しました(論文#3, 4, 5)。現在、臨床講座と協力して新規診断法と治療法の開発を目指しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>#1. Genomic loss of DUSP4 contributes to the progression of intraepithelial neoplasm of pancreas to invasive carcinoma. <i>Cancer Res.</i> 76(9):2612-2625. 2016</p> <p>#2. Downregulation of ZNF395 drives progression of pancreatic ductal adenocarcinoma through enhancement of growth potential. <i>Pathobiology</i> 88:374-382. 2021</p> <p>#3. Visinin-like protein-1 overexpression is an indicator of lymph node metastasis and poor prognosis in colorectal cancer patients. <i>Int J Cancer.</i> 131(6):1307-17. 2012</p> <p>#4. Downregulation of DUSP4 enhances cell proliferation and invasiveness in colorectal carcinomas. <i>Cancer Sci.</i> 109(1):250-258. 2018</p> <p>#5. DUSP4 is involved in the enhanced proliferation and survival of DUSP4-overexpressing cancer cells. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 528 (3):586-593. 2020</p>



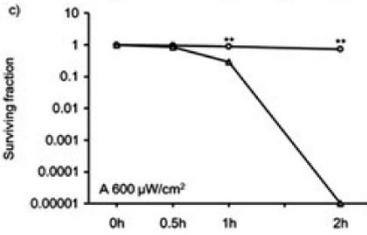
所属・職位	医学部 医学科精神神経医学講座・准教授			
氏名	平川 博文 (Hirakawa Hirofumi)			
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年03月			
SDGs目標		<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p>		

研究分野	精神医学
研究キーワード	双極性障害、うつ病、統合失調症、環境光、高照度光療法、光調整療法、脳画像研究、実存的アプローチ
研究内容	<p>・光研究 光の持つ抗うつ効果を、人工光を用いて活用する治療法として光線療法がある。現在、私は光と神経新生に着目して研究を行っている。健常成人に対して、1ヶ月間の高照度光照射を行ったところ、左海馬歯状回頭部の体積が増加しており、同部位で神経新生が生じた可能性を示唆する所見を得た (Hirakawa et al, 2021)。また、同被験者で¹⁸F-FDG-PETを用いて、脳代謝機能の変化も精査したところ、高照度光照射群の左海馬において、脳代謝機能が有意に増加していた (Hirakawa et al, 2023)。</p> <p>さらに気分障害に対して、1ヶ月間の高照度光照射を行ったところ、左海馬歯状回頭部や左海馬歯状回の体積が増大していた。さらに、左海馬歯状回の体積の変化率は気分のVisual analog scaleの変化率と有意な正の相関を認めた (Hirakawa et al, 2023)。</p> <p>・実存的アプローチ 実存的アプローチは、実存主義の考え方を基礎とした精神療法である。不条理の中に生きる気分障害患者に対して、苦難の中でより積極的に人生の価値を見出す精神療法である実存的なアプローチは効果的ではないかと考えられ、実臨床でその効果を検証している。</p> <p>・researchmap https://researchmap.jp/hirakawa_hirofumi</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Hirakawa H, Terao T, Shirahama M. Light modulation for bipolar disorder: A commentary on "An update on adjunctive treatment options for bipolar disorder" by Dean et al. (2018). Bipolar Disord. 2019;21:282.</p> <p>Hirakawa H, Terao T. Modified interpersonal and social rhythm therapy via modulation of ambient light. Bipolar Disord. 2019;21:564.</p> <p>Hirakawa H, Terao T, Muronaga M, Ishii N. Adjunctive bright light therapy for treating bipolar depression: A systematic review and meta-analysis of randomized controlled trials. Brain Behav. 2020:e01876.</p> <p>Hirakawa H, Terao T, et al. Increase in the left hippocampal dentate gyrus head volume after a 4-week bright light exposure in healthy participants: A randomized controlled study. J Psychiatr Res. 2021;145:1-5.</p> <p>Hirakawa H, Terao T, et al. Increasing the uptake of 18F-fluorodeoxyglucose in the left hippocampus after four weeks of bright light exposure in healthy participants: A randomized controlled study. Acta Psychiatr Scand. 2023;1-3.</p> <p>Hirakawa H, Terao T, et al. Increased volume of the left hippocampal dentate gyrus after 4 weeks of bright light exposure in patients with mood disorders: a randomized controlled study. Transl Psychiatry. 2023;15:394.</p>

所属・職位	医学部 総合外科・地域連携学講座)・准教授	
氏名	平塚孝宏 (Hiratsuka Takahiro)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2013年	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学、内視鏡外科学、地域医療学
------	---------------------

研究キーワード	消化器癌、抗酸化、抗炎症、光線療法、ピロリ菌、がん支持療法
---------	-------------------------------

研究内容	<p>●ピロリ菌の光線による除菌治療に関する研究 (ピロリ菌は胃癌の原因とされており除菌の必要性は認知された一方で抗菌薬に対する耐性化が進んでいます。光線治療は耐性ピロリ菌も殺菌する作用があり、臨床応用を目指して研究しています(右図; ○control ●LED照射 論文1より)。</p>  <p>●新規カバード大腸ステントの開発 大腸癌の世界的増加に伴いその10-20%とも言われる腸閉塞を伴う大腸癌に対し大腸ステントを用いた術前治療や緩和治療が世界的に普及しつつありますが、金属ステントは腸管穿孔やそれに伴う予後悪化が危惧されています。我々はより安全なカバード大腸ステントをS Bカワスミ株式会社と開発しました。現在製品が市販化され、その臨床での治療成績や予後に及ぼす研究を継続しています(右図; 川澄ジャバラステント)。</p>  <p>●抗がん剤誘発脱毛 (C I A) 治療法の開発 世界中で癌患者さんが増加している中、抗がん剤脱毛をきたす人の割合は半数以上に上るにもかかわらず完全な脱毛予防法は未だありません。新規抗酸化剤を用いて大分大学で開発したα-リポ酸誘導体ローションは乳がん患者で眉毛、睫毛脱毛予防を可能とし、脱毛からの回復促進を示しました。現在製品が市販化され、その適応拡大のための研究を行なっています。</p> 
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Anti-proliferation effect of blue light-emitting diodes against antibiotic-resistant Helicobacter pylori. Ma J, Hiratsuka T, et al. J Gastroenterol Hepatol. 2018 Aug;33(8):1492-1499. 2. Hiratsuka T, Inomata M. A novel animal model of colonic stenosis to aid the development of new stents for colon strictures. Surg Endosc. 36(5):3152-3159, 2022. 3. Sagawa N, Ohno S, Hiratsuka T, et al. The utility of DHL-HisZnNa, a novel antioxidant, against anticancer agent-induced alopecia in breast cancer patients: a multicenter phase II clinical trial. Breast Cancer Res Treat. <p>●著書</p> <p>平塚 孝宏、猪股雅史. 腹腔鏡下大腸癌手術における腸管損傷の予防と対処法 2020年 74(08)1145-1151, 手術、金原出版</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 抗がん剤脱毛治療のベストプラクティス—抗がん剤治療に関わるすべてのメディカルスタッフへ— 42-46. 医学と看護社 2019 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2016年、中塚医学賞受賞
---------------	---

所属・職位	医学部 内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座 准教授	
氏名	福田 顕弘 (Akihiro Fukuda)	
取得学位	医学博士、宮崎大学、2011年11月	
SDGs目標	   <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; text-align: center;"> <p>リサーチマップ (researchmap)</p> <p>※上記をクリック してください</p> </div> 	

研究分野	腎臓内科学
研究キーワード	尿沈渣中ポドサイトmRNA、尿中バイオマーカー、糖尿病性腎症、肥満関連腎症
研究内容	<p>●生活習慣病における尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量の有用性の検討</p> <p>多くの糸球体疾患ではポドサイト傷害の持続に伴うポドサイトの脱落が糸球体硬化の主因である。尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量が糸球体疾患の有用なバイオマーカーであること(論文1, 2, 6-11)、糖尿病や肥満関連性腎症では早期より糸球体肥大・ポドサイト障害を認め、尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量がアルブミン尿より早期、予後予測可能なバイオマーカーであることを報告しており(論文3-5)、同バイオマーカーの臨床応用を進めている。</p> <p>●肥満関連腎症におけるSGLT2阻害薬のポドサイト保護効果についての検討</p> <p>肥満関連腎症の進展抑制には、生活習慣の改善やレニン・アンジオテンシン系抑制薬(ACE-I/ARB)のみでは不十分である。近年SGLT2阻害薬が慢性腎臓病治療薬として使用されるようになり、肥満関連腎症への腎保護効果も期待されている。我々は、肥満関連腎症におけるポドサイト傷害による腎症進展機序の解明とSGLT2阻害薬のポドサイト保護効果について動物実験を中心に検証を進めている。</p> <p>●生活習慣病におけるミネラルコルチコイド受容体活性化を反映するバイオマーカーの開発</p> <p>肥満症、糖尿病、慢性腎臓病などでは、血中アルドステロンの上昇を伴わずにミネラルコルチコイド受容体(MR)シグナルが亢進するため、「MR関連高血圧・臓器障害」という病態を呈すると考えられている。しかし、MR活性化を鋭敏に反映する有用なバイオマーカーは存在せず、MR拮抗薬による治療介入の必要性や効果を定量的に評価することは難しい。我々は、MR活性化を反映する尿中バイオマーカーの開発を目指して研究を進めている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●生活習慣病に関連した腎症の進展メカニズムの解明と、非侵襲的な尿サンプルを用いて 同疾患に有用な新規バイオマーカーを探索することを研究テーマとしている。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Fukuda A, et al. Clin Exp Nephrol 28(6):496-504, 2024 2. Fukuda A, et al. Kidney360 3: 63-73, 2022 3. Fukuda A, et al. Sci Rep: 10(1):18209, 2020 4. Minakawa A, Fukuda A, et al. Clin Exp Nephrol 24, 242-252, 2020 5. Minakawa A, Fukuda A, et al. Sci Rep 6: 9(1):18485, 2019 6. Nishizono R, Fukuda A, et al. J Am Soc Nephrol. 28(10):2931-2945, 2017 7. Fukuda A, et al. Nephrol Dial Transplant 32(11):1818-1830, 2017 8. Fukuda A, et al. Nephrol Dial Transplant 30(7):1140-50, 2015 9. Fukuda A, et al. Nephrol Dial Transplant 27(11):4079-87, 2012 10. Fukuda A, et al. J Am Soc Nephrol 23(8):1351-63, 2012 11. Fukuda A, et al. Kidney Int. 81(1):40-55, 2012 <p>●科学研究費</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 基盤研究(C) 2022年~2025年度 尿中ポドサイトマーカーを用いた糖尿病性腎症重症化予測スコアリングシステムの開発 2. 若手研究 2019年~2021年度 肥満関連腎症における尿沈渣中ポドサイトmRNA排泄量の有用性の検討と進展機序解明 3. 若手研究(B) 2016年~2018年度 糖尿病性腎症における尿中ポドサイトmRNAの早期診断マーカーとしての有用性の検討 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2024年、大分大学学長表彰 2. 2023年、日本腎臓学会第7回Clinical Scientist Award (CSA) 3. 2021年、第11回中塚医学賞(大分大学医学研究表彰・生命科学・医学専門分野)

所属・職位	医学部先進医療科学科生命健康科学コース・准教授	
氏名	文室 知之 (Fumuro Tomoyuki)	
取得学位	博士(医科学)、京都大学、2013年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	臨床神経生理学
研究キーワード	脳波、運動、てんかん
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 頭皮上記録の緩電位が由来する皮質領域についての研究(論文1) 難治性のてんかん患者を対象に頭皮上と頭蓋内電極による脳波の同時記録を行い、両電極間における緩電位成分(Slow potential: SP)のコヒーレンス解析を行った。SPコヒーレンスは頭蓋内と頭皮上の電極間距離に負の相関を示し、頭皮上記録のSPは主に頭蓋頂に近い外側皮質穹窿部の活動を反映することを示した。 ● 到達運動に先行する事象関連脱同期についての研究(論文2) 単純動作(手関節の伸展)と視覚誘導を伴う行為(手の到達運動)を行い、運動前に発生する脳波の事象関連脱同期を比較した。指向性を要する到達運動の準備には、単純動作に比して早期に頭頂・後頭部における脳活動が増大した。 ● 読書てんかんの発作発生機序についての研究(論文3) 読書てんかんの患者を対象にspikeの空間的・時間的分布と血流動態を調べた。脳磁図により読字課題中のspike発生源、トラクトグラフィ解析によりspikeの発生部位間の白質経路、fMRIにより読書による血行動態を調べた。Spikeの発生源は左後側頭葉底部と左前頭葉円蓋部に集簇し、両部位間の言語機能に関わる機能的ネットワークの過度な活性化が臨床発作を引き起こすことを示唆した。 ● ニューロフィードバック療法と運動準備電位についての研究(論文4) パーキンソン病(PD)患者は運動準備電位(BP)の前期成分が低下する。PD患者を対象に頭皮上記録の緩電位成分を陰性変位させるニューロフィードバック訓練を行い、その前後にBPを計測した。訓練不良群に比べ良好群では訓練後のBP前期成分が高く、緩電位の自律的な調節にはBP前期成分の発生源である補足運動野の関与が考えられた。
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Fumuro T, Matsuhashi M, Matsumoto R, et al. Do scalp-recorded slow potentials during neuro-feedback training reflect the cortical activity? <i>Clin Neurophysiol.</i> 129, 1884-1890, 2018 2. Fumuro T, Matsuhashi M, Miyazaki T, et al. Alpha-band desynchronization in human parietal area during reach planning. <i>Clin Neurophysiol.</i> 126, 756-762, 2015 (a) 3. Fumuro T, Matsumoto R, Shimotake A, et al. Network hyperexcitability in a patient with partial reading epilepsy: Converging evidence from magnetoencephalography, diffusion tractography, and functional magnetic resonance imaging. <i>Clin Neurophysiol.</i> 126, 675-681, 2015 (b) 4. Fumuro T, Matsuhashi M, Mitsueda T, et al. Bereitschaftspotential augmentation by neuro-feedback training in Parkinson's disease. <i>Clin Neurophysiol.</i> 124, 1398-1405, 2013 <p>著書</p> <p>文室知之(分担執筆), 第5章 事象関連電位(ERP), 「誘発電位測定マニュアル2019」(日本臨床神経生理学会 編), 71-86頁, 診断と治療社, 2019年</p>

所属・職位	医学部 医学科 小児科学講座・准教授	
氏名	前田 知己 (Maeda Tomoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	胎児・新生児医学
研究キーワード	新生児自発運動評価、General Movements、心拍変動解析

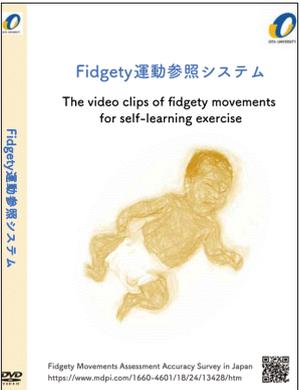
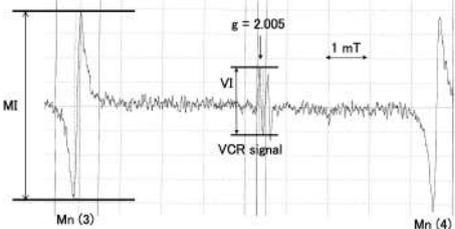
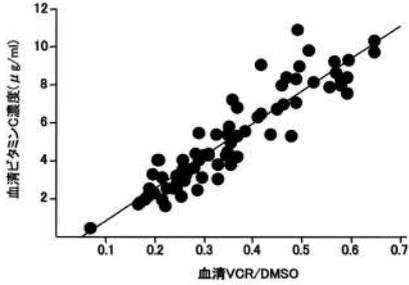
研究内容	<p>●General Movements; GMs評価を用いた発達予測 GMsは新生児期・乳児期早期に認められる自発的な運動で、発達過程の中枢神経系の機能を反映すると考えられており、脳性麻痺予測に有用な事が確立している。当院NICUで入院加療を行った、極低出生体重児に代表される発達に問題を抱えるリスクのある児のコホートで、発達予後を前方視的に検討している。新生児期の評価はGMsのほかに頭部MRIによる脳形態発達、心拍変動解析による自律神経機能の評価も行い、GMsの由来や影響を及ぼす因子を検討している。それらの評価を組み合わせることで、脳性麻痺以外の運動の巧緻性の障害、知的障害、神経発達症リスク児の早期の気づき、早期介入や家庭への支援につなげることを目指している。</p> <p>●GMs判定補助システムの開発、GMs評価普及活動 GMs評価は本邦で評価できる者が少ない。本邦で広くGMs評価を実践するために、自身が中心となり評価用サーバーを立ち上げ、多施設・複数の評価者で連携して、継続的な評価者のトレーニングと評価精度の向上を目指すシステムの運用している。また、研究を通じて収集された臨床情報、GMs記録とその評価、発達予後は、日本人のGMsアーカイブとして保存・公開し、本邦における新生児乳児期の自発運動に関する基礎・臨床研究の基礎資料とする予定である。</p>	
------	--	--

図 2022年に作成した乳児期早期のGMs評価演習用DVD

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Maeda T, Kobayashi O, Ihara K, Bos AF. Fidgety movements assessment accuracy survey in Japan. Int. J. Environ. Res. Public Health. 2021; 18(24):13428 2. 前田知己. 新生児期・乳児期早期の発達評価-General movements評価法を中心に. 脳と発達 2020; 52:141-146 3. Maeda T, Sekiguchi K, Wasada R, Ihara K. Caffeine not associated with irritable behaviour in very low-birth-weight infants. Ear Hum Dev. 2019; 137: 104835 4. 前田知己. 脳性麻痺の診断と小児科治療. Medical rehabilitation 2019; 232:1-7 5. Maeda T, Iwata H, Sekiguchi K, Takahashi M, Ihara K. The association between brain morphological development and the quality of general movements. Brain Dev. 2019;41:490-500 6. Maeda T, Inoue M, Sekiguchi K, Ihara K. Aminophylline-associated irritable behaviour in preterm neonates. Ear Hum Dev 2016;99:37-41 <p>●GM-Trust主催の評価講習会2011年基礎コース、2013年、2017年にアドバンスコースを受講し評価認証を受けている。2018年に本邦で初めての基礎評価法講習会を開催した。</p>
---------------	--

所属・職位	医学部 医学科 生化学・分子遺伝学講座・准教授	
氏名	松尾 哲孝 (Matsuo Noritaka)	
取得学位	博士 (農学)、九州大学、1996年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	マトリックス生物学、生化学、分子生物学	
研究キーワード	細胞外マトリックス、細胞分化、転写、機能性因子	
研究内容	<p>1) 細胞外マトリックス分子の機能解析</p> <p>我々の生体は、種々の細胞とそれを取り巻く細胞外環境の相互作用によって組織・臓器が形成され、機能が維持されています。従って、生命現象や疾患のメカニズムを解明するためには、細胞自身だけでなく、細胞外マトリックスの役割を知る事が重要と思われます。我々は、これら分子の中で、コラーゲン分子に着目し、その発現調節機構や分子自身の機能について解析を進めています。</p> <p>2) 天然成分の生体調節機能因子</p> <p>我々の周りには、数多くの天然成分が存在していますが、その中には、我々の生体維持に機能的に作用する因子を含んでいる事が知られています。これら機能因子を検索、同定することは、医薬とは異なり、日常生活で我々の健康状態を維持し、改善することが可能となります。我々は、天然成分の様々な生体調節機能を検討すると共に、その作用機序の解明を進めています。</p> <p>3) 間葉系幹細胞の組織特異的分化に関わる因子の検索及び機能解析</p> <p>未分化間葉系幹細胞からは、骨・軟骨・皮膚・筋肉・脂肪細胞などに分化していくことが知られています。これら各組織への分化メカニズムについては、未だ謎の部分が多いですが、組織特異的な転写因子や足場となる細胞外マトリックス分子などがこの課程に関与していることが判ってきました。我々は、再生医療を目指して、組織特異的な分化課程に関与する因子を検索し、その機能解析を進めています。</p> <p>関連リンク：https://www.med.oita-u.ac.jp/matrix/</p>	
研究業績・アピールポイント	<p><代表的な論文></p> <p><u>N. Matsuo, S. Tanaka, M. K. Gordon, M. Koch, H. Yoshioka, F. Ramirez.</u> CREB/AP1 protein complexes regulate transcription of the collagen XXIV gene (Col24a1) in osteoblasts. J. Biol. Chem. 281; 5445-52; 2006</p> <p>H. Nagato, <u>N. Matsuo</u>, H. Sumiyoshi, K. Sakata-Takatani, M. Nasu, H. Yoshioka. The transcription factor CCAAT-binding factor CBF/NF-Y and two repressors regulate the core promoter of the human pro-α3(V) collagen gene (COL5A3). J. Biol. Chem. 279; 46373-83; 2004</p> <p><u>N. Matsuo</u>, W. Yu-Hua, H. Sumiyoshi, K. Sakata-Takatani, H. Nagato, K. Sakai, M. Sakurai, H. Yoshioka. The Transcription factor CCAAT-binding factor CBF/NF-Y regulates the proximal promoter activity in the human α1(XI) collagen gene (COL11A1). J. Biol. Chem. 278; 32763 - 70; 2003</p> <p>R. Kawano, <u>N. Matsuo</u>, H. Tanaka, M. Nasu, H. Yoshioka, K. Shirabe. Identification and characterization of a soluble cadherin-7 isoform produced by alternative splicing. J. Biol. Chem. 277; 47679-85; 2002</p>	

所属・職位	医学部 医学科 麻酔科学講座・准教授	
氏名	松本 重清 (Matsumoto Shigekiyo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>3</p> <p>すべての人に健康と福祉を</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>4</p> <p>質の高い教育をみんなに</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>9</p> <p>産業と技術革新の基盤をつくろう</p>  </div> </div>	

研究分野	麻酔科学、集中治療医学、周術期管理医学
研究キーワード	酸化ストレス、炎症、ビタミンC、敗血症、術後せん妄、胎児仮死
研究内容	<p>●ビタミンCリアルタイム測定法の確立と各種病態における酸化ストレスの評価に関する研究</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>図1. DMSO添加後に得られる血漿VCRのESRシグナル。Mnマーカーのシグナル高(MI)に対するVCRのシグナル高(VI)の比を血漿VCR/DMSOとした。</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2. ESR装置で測定したVCR/DMSOとHPLCで測定したビタミンC濃度には有意な正の相関関係を認めた(論文1)。</p> </div> </div> <p>電子スピン共鳴(ESR)装置を用いた血漿ビタミンCリアルタイム測定法を確立し、これを応用して、急性肺傷害(論文1)や胎児仮死(論文2)において、リアルタイムで酸化ストレスの程度を評価することに成功した。さらに、敗血症性ショックの機序として、過剰な酸化ストレスに伴うビタミンCの減少による副腎不全の可能性を指摘し(論文3)、基礎研究にて検証中である(東京都健康長寿医療センター研究所・石神研究部長との共同研究)。また、現在、心臓手術後のビタミンCの減少と術後せん妄の関連性について臨床研究を行っている。</p> <p>●酸化ストレスと栄養療法に関する概説 重症病態において、抗酸化栄養療法により酸化ストレスを制御することの重要性を概説した(著書1)。</p> <p>●呼気中揮発性代謝産物のリアルタイム測定法の開発 近年、疾患に関連する呼気中揮発性代謝産物が多数報告され、呼気からの揮発性代謝産物検知による疾患の早期発見や予防への期待が高まっているが、周術期においてはいまだに検討されていない。周術期には、手術侵襲により組織代謝が著明に変化する。それに伴い産生された揮発性代謝産物は生体膜を通過して呼気中に出現する。本研究では、水晶振動子ガスセンサシステム(北九州市立大学・李教授との共同研究)を用いて、呼気揮発性代謝産物のリアルタイム検出法を確立し、周術期合併症や予後との関連を検討中である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2010年、The impact of oxidative stress levels on the clinical effectiveness of sivelestat in treating acute lung injury: an electron spin resonance study. J Trauma. 68: 796-801. 2014年、New evaluation of fetal oxidative stress: measurement of the umbilical cord blood dimethyl sulfate-induced ascorbyl-free radical by an electron spin resonance method. J Matern Fetal Neonatal Med. 27: 1550-4. 2011年、Effects of the Antioxidant-Enriched Concentrated Liquid Diet ANOM on Oxidative Stress and Multiple Organ Injury in Patients with Septic Shock: A Pilot Study. J Anesthe Clinic Res. 2: 8. <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2009年、抗酸化栄養療法とその可能性. 臨床栄養臨時増刊号, 114, 659-665

所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・准教授	
氏名	水上 一弘 (Mizukami Kazuhiro)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標	 <p>3 すべての人に健康と福祉を</p>	
研究分野	消化器内科学	
研究キーワード	<i>Helicobacter pylori</i> 、 <i>Helicobacter pylori</i> 除菌療法、内視鏡診断・治療、アニサキス	
研究内容	<p>●<i>Helicobacter pylori</i>に関する研究 胃癌の原因である<i>Helicobacter pylori</i>を除菌することによってどのように胃粘膜は改善するのかを検討した。また除菌療法による弊害についてNational databaseを用いて検討を行った。除菌が困難な症例に対する3次除菌療法なども研究している。</p> <p>●内視鏡診断に関する研究 現在の消化器内視鏡は画像強調内視鏡や超音波内視鏡などを用いて、より精度の高い診断を追求しているが、とくに画像強調内視鏡に関する胃炎や胃癌診断の可能性を研究している。また最近ではArtificial Intelligence (AI) を搭載した大腸内視鏡検査に関する研究に着手しており、内視鏡専門医との病変検出能の比較や画像強調内視鏡との併用による診断効率の検討など、未来の消化器内視鏡検査のあるべき姿を模索している。</p> <p>●アニサキス症に関する病態解明 アニサキス症を呈した患者から抽出したアニサキス虫体をおそらく世界で一番多く集めており、虫体側・宿主側の両面から、腹痛発生などのメカニズム解明を研究している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p><論文></p> <p>●Mizukami K, Kodama M, Fukuda M, Hirashita Y, Tsutsumi K, Fukuda K, Ogawa R, Okamoto K, Okimoto T, Murakami K. Comparison of the improvement in gastric mucosal tissue after <i>Helicobacter pylori</i> eradication between young and elderly people. Arab J Gastroenterol 2023; 24(2): 98-103.</p> <p>●Mizukami K, Sugano K, Takeshima T, Murakami K. Disease trends after <i>Helicobacter pylori</i> eradication based on Japanese nationwide claims and the health check-up database. World J Gastroenterol 2023; 29(4): 692-705.</p> <p>●Mizukami K, Ogawa R, Okamoto K, Shuto M, Fukuda K, Sonoda A, Matsunari O, Hirashita Y, Okimoto T, Kodama M, Murakami K. Objective Endoscopic Analysis with Linked Color Imaging regarding Gastric Mucosal Atrophy: A Pilot Study. Gastroenterol Res Pract 2017; 2017: 5054237.</p> <p>●Hidano S, Mizukami K, Yahiro T, Shirakami K, Ito H, Ozaka S, Ariki S, Saechue B, Dewayani A, Chalalai T, Soga Y, Goto M, Sonoda A, Ozaki T, Sachi N, Kamiyama N, Nishizono A, Murakami K, Kobayashi T. Analysis of the prevalence and species of <i>Anisakis</i> nematode in <i>Sekisaba</i>, <i>Scomber japonicus</i> caught in coastal waters off Saganoseki, Oita in Japan. Jpn J Infect Dis 2021;74 (5): 387-391.</p> <p><受賞></p> <p>2008年10月：ポスター一優秀演題 (jddw2008)</p> <p>2013年10月：日本消化器内視鏡学会賞</p> <p>2014年5月：Poster of Distinction (DDW2014)</p> <p>2018年2月：Awards for Outstanding Reviewers (Internal Medicine)</p> <p>2019年1月：日本内科学会九州地方会指導医賞</p>	

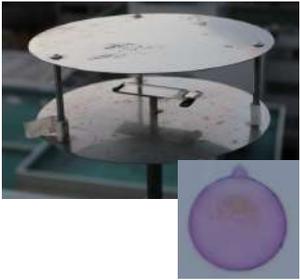
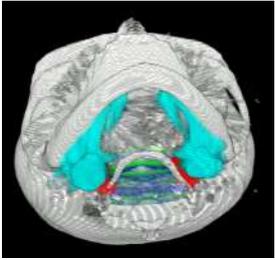
所属・職位	医学部 医学科 整形外科科学講座・准教授	
氏名	宮崎 正志 (Miyazaki Masashi)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2008年9月	
SDGs目標	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>3</p> <p>すべての人に健康と福祉を</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>4</p> <p>質の高い教育をみんなに</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>9</p> <p>産業と技術革新の基盤をつくろう</p>  </div> </div>	

研究分野	脊椎脊髄外科学、整形外科学	
研究キーワード	脊椎脊髄外科・後縦靭帯骨化症、側弯症、骨粗鬆症、脊椎固定、骨癒合	
研究内容	<p>臨床研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 脊椎固定術における骨癒合研究と骨粗鬆症薬の重要性 骨粗鬆症薬は3つの側面を担っている。1つは椎体骨折予防のための骨粗鬆症の治療薬としての側面である。後の2つは骨粗鬆症患者に脊椎固定術を行う際に、脊椎インストルメントによる固定性の向上と骨癒合の向上を狙うものである。我々は様々な骨粗鬆症薬の脊椎固定術における骨癒合向上効果を研究し臨床的意義を検討している。 遺残性側弯症の病態と治療 高難易度症例に対する治療戦略 成人期まで遺残した側弯症は、適切な治療や定期的な経過観察を受けておらず、有症状を訴えて来院することが多い。若年者の側弯症と比較して主カーブが大きく、rib humpが重篤で体幹や肩のバランス不全が認められる。主カーブの進行に関連する様々な合併症を引き起こし、心肺機能の低下や胃腸障害を呈している場合があり、思春期側弯例と比較すると問題点は多い。我々は遺残性側弯症の病態と、各種解離術と矯正術の手技的な安全性を確立するために様々なモダリティを用いて研究している。 <p>基礎研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 科学研究費助成事業 基盤研究(C) ラット脊椎固定モデルにおけるBMPと抗スクレロチン抗体の相互効果の検討：研究代表者 	
研究業績・アピールポイント	<p>研究業績</p> <ol style="list-style-type: none"> Miyazaki M*, Ishihara T, Abe T, Kanazaki S, Notani N, Sato S, Kataoka M, Tsumura H. Analysis of the reciprocal changes in upper cervical profile and the risk factors for cervical sagittal imbalance after laminoplasty for ossification of the posterior longitudinal ligament of the cervical spine. Clin Neurol Neurosurg. 2020 Miyazaki M*, Ishihara T, Abe T, Kanazaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Analysis of Reciprocal Changes in Upper Cervical Profiles after Posterior Spinal Fusion with the Simultaneous Double Rod Rotation Technique for Adolescent Idiopathic Scoliosis. Orthopaedics & Traumatology: Surgery & Research. 2020 Miyazaki M*, Abe T, Ishihara T, Kanazaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Cervical alignment after single-level anterior cervical corpectomy and fusion using autologous bone graft without spinal instrumentation for cervical pyogenic spondylitis. Eur J Orthop Surg Traumatol. 2019 Miyazaki M*, Ishihara T, Abe T, Kanazaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. The Position of the Spinal Cord Relative to the Vertebrae in Adolescent Idiopathic Scoliosis. Medicine (Baltimore). 2019 Miyazaki M*, Ishihara T, Abe T, Kanazaki S, Notani N, Kataoka M, Tsumura H. Effect of intraoperative position in single-level transforaminal lumbar interbody fusion at the L4/5 level on segmental and overall lumbar lordosis in patients with lumbar degenerative disease. Medicine (Baltimore). 2019 <p>受賞歴</p> <p>平成20年 10月 2008 North American Spine Society Outstanding Paper Award 平成23年 9月 第6回日本脊椎脊髄病学会Asia Traveling Fellowship選出 平成28年 3月 第2回運動器疾患論文学術最優秀賞</p>	

所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座・准教授	
氏名	幸松 美智子 (Yukimatsu Michiko)	
取得学位	修士 (看護学)、高知女子大学、2002年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児看護学
研究キーワード	慢性疾患を抱える子ども 病児の家族看護 病児のしつけ 基礎教育 アセスメント能力
研究内容	<p>●看護学生が捉える子どもの甘えの構造</p> <p>病児だけでなく子どもの成長発達に「甘え」は不可欠であるが、「甘え」の研究を紐解くと文化の中に「甘え」があるものの、子どもを養育する際には「甘え」は許されぬものとなっている。病児やその家族は強いストレスを抱えており、その意味でも「甘えや依存」は重要なコーピングであるが、医療従事には自立を促すことが需要であると甘えを許さない傾向が先行研究で明らかとなった。将来看護師となる看護学生が「甘え」をどのように捉え、対応すべきと考えているかを明らかにすることは、養育の専門家を育成するための重要な資料となるため取り組んだ（論文1）</p> <p>●学生の分析力向上におけるアセスメント・モデルの効果</p> <p>看護教育において学生の看護実践能力の向上が急務であるが、高校までの学習方法（科目の暗記）しか修得できていない学生にとって知識を統合して事象を正しく判断することは極めて難しい。そのため、学生の修得した知識の統合を図る手段が必要であり、本研究は臨床判断のモデルを用いて、より学生の活用し易いモデルへと改変したものを、学生に実際に使ってもらい、その効果を明らかにしたものである（論文2）</p> <p>●慢性疾患を抱える子どものしつけ</p> <p>子どもの養育に関する知識と技術の修得は、子育て不安が社会問題となっている現状において看護職に求められる能力である。子どもの育児に関する基本的な知識をまとめ、看護に応用できるようにしたものである（著書1）</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護学生が捉える「甘え」について, 九州・沖縄小児看護教育研究会誌、第20号、2019 2. 学生の分析力向上におけるアセスメント・モデルの効果, 九州・沖縄小児看護教育研究会誌、第20号、2019 <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 幼児期の子どもの成長・発達と看護, 小児の成長と発達、P99~133、メディカ出版、2021 2. アトピー性皮膚炎をもつ子どもと家族, 場面で学ぶ小児看護学 (改訂版) P139-152、メディカ出版、2019 3. 子どもの成長・発達. 場面で学ぶ小児看護学 (改訂版) p36-53、2019

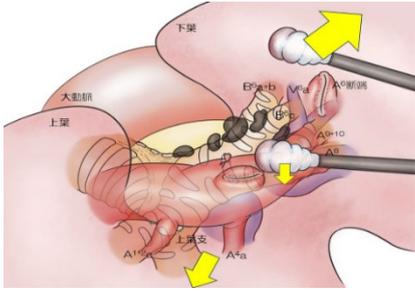
所属・職位	医学部 医学科 耳鼻咽喉科学講座・准教授	
氏名	渡邊 哲生 (Watanabe Tetsuo)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1990年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	耳鼻咽喉科頭頸部外科学	
研究キーワード	①アレルギー性鼻炎、スギ花粉、②深頸部感染症、深頸部解剖	
研究内容	<p>①スギ花粉情報と飛散予測</p> <p>1990年より挟間キャンパス屋上にてスギ花粉飛散数の計測を行なっている。スギ花粉情報は毎年のスギ花粉飛散期に大分県医師会と協力して花粉情報を提供している。飛散予測は総飛散数、飛散開始、飛散期の日々の飛散予測があるが、現在は日々の飛散予測にAIの活用も試みている。そのほか、秋にも少数ながらスギ花粉が飛散するが、飛散予測の一助とするため、秋期の飛散数計測も行なっている。</p> <p>②深頸部感染症の基礎と臨床</p> <p>基礎としては頸部の筋膜と間隙からなる複雑な解剖を理解しやすくするため、正常CT画像からの3Dモデルの作成を試みている。</p> <p>臨床としては最も症例が多い扁桃周囲膿瘍の病態解明、その他の膿瘍については予後を規定する因子の検討を行なっている。</p>	 
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>①スギ花粉情報と飛散予測</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 渡辺哲生、末永智、松下太、他：大分大学医学部(大分県由布市挾間町)におけるスギ花粉飛散予測 アレルギー 2005; 54: 1272-1278. 2) 渡辺哲生、鈴木正志：スギ花粉飛散数の累積曲線の検討 耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2010; 28: 297-300. 3) 渡辺哲生、鈴木正志：大分大学医学部(大分県由布市挾間町)における秋期スギ花粉飛散状況の検討 アレルギー 2014; 63: 920-927. 4) 渡辺哲生、鈴木正志:大分大学医学部(大分県由布市挾間町)におけるスギ花粉飛散予測の検証 日耳鼻 2016; 119: 1210-1219. 5) 渡辺哲生、鈴木正志：大分大学医学部におけるダーラム式計測器と自動計測器によるスギ・ヒノキ花粉飛散数の比較と分析 耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2017; 35: 271-277. 6) 渡辺哲生、鈴木正志：スギ花粉飛散と比較したヒノキ花粉飛散状況の検討 日耳鼻 2020;123:139-144. <p>②深頸部感染症、深頸部解剖</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 渡辺哲生、鈴木正志：扁桃周囲膿瘍症例の検出菌についての検討。口咽科2005; 17: 345-352. 2) Watanabe T, Suzuki M: Bilateral peritonsillar abscesses: Our experience and clinical features. Ann Otol Rhinol Laryngol 2010; 119: 662-666. 3) 野田加奈子、児玉悟、野田謙二、渡辺哲生、鈴木正志：深頸部感染症299例の臨床的検討。日耳鼻2010; 113: 898-906. 4) 渡辺哲生：解剖から見た扁桃周囲膿瘍・深頸部膿瘍。口咽科2016; 29: 9-17. 	

所属・職位	医学部医学科 呼吸器・乳腺外科学講座 講師	
氏名	安部 美幸 (Abe Miyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年6月	
SDGs目標	  	

研究分野	外科学、腫瘍学、解剖学
------	-------------

研究キーワード	肺癌、リンパ節転移、リンパ流路、縮小手術、残存肺機能、メディカルイラストレーション
---------	---

研究内容	<p>●癌のリンパ行性転移に関する基礎・臨床研究 肺癌のリンパ節転移パターンに関わる解剖学的因子、また転移に先立つ腫瘍微小環境の変化について臨床病理学的に検索している。 科研費 若手研究 (研究代表者) : 非小細胞肺癌における所属リンパ節内血管新生の検討 https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-21K16518</p> <p>●肺癌縮小手術後の肺容積の変化に関する3次元解析 術後残存肺の代償性容積変化を3D-CTにて解析。また残存肺容積変化に深く関与する残存肺シフトの特徴についてシミュレーションを用いた区域切除術の有用性を検討している (科研費 若手研究 応募中)。</p> <p>●メディカルイラストレーションを用いた呼吸器外科領域での手術教育 2024年3月第8回日本メディカルイラストレーション学会 学会特別企画講演、2024年11月第86回 日本臨床外科学会学術集会 学術集会特別企画8 等の全国学会で講演。また自身の未編集手術動画と解説用メディカルイラストレーションを医療従事者向け会員制ウェブサイトに掲載中。 https://e-thoth.medtronic.com/mypage/login/e-thoth</p>	
------	---	--

研究業績・アピールポイント	<p>●癌のリンパ行性転移に関する基礎・臨床研究 論文・受賞 : Miyuki Abe, et al. Arterial blood supply patterning of the mammary sentinel lymph nodes with special reference to the relation of the formation mechanism of the superficial subscapular artery (Anatomical Science International Vol. 96 Issue 4, p489-508 (2019年 第124回日本解剖学会総会献体学術賞) 受賞 : Gross anatomical and clinical studies of hilar and mediastinal lymphatic systems for lung cancer treatment 2021年 第74回日本胸部外科学会 優秀演題賞</p> <p>●肺癌縮小手術後の肺容積の変化に関する3次元解析 論文 : Miyuki Abe, et al. An analysis of residual lung volume changes after segmentectomy based on three-dimensional computed tomography. J Thorac Dis. 2024 Jun 30;16 (6) :3553-3562</p> <p>●メディカルイラストレーションによる呼吸器外科領域での教材開発 著書 : 安部美幸, 杉尾賢二. 『ベクトル視点でやさしく読み解く 呼吸器外科手術解剖イラスト』2023年 南江堂</p>
---------------	---

所属・職位	医学部 医学科 医学生物学講座・講師	
氏名	池田 八果穂 (Ikeda Yatsukaho)	
取得学位	博士 (理学)、筑波大学、2001年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	動物系統分類学
研究キーワード	進化、発生、線虫、昆虫
研究内容	<p>●動物系統分類学的な研究</p> <p>昆虫類や線虫類についての系統分類学的な研究を行っている。原始的な昆虫であるコムシ目のウロコナガコムシ<i>Lepidocampa weberi</i>については胚発生の詳細な観察を行い、昆虫の基本的体制に関わる特徴、特に背器の形成過程を明らかにした(論文1.)。線虫類についてはアマガエルに寄生した新属新種<i>Paracosmocercella rosettae</i>を記載(論文3.)、また分子系統学的手法により蟯虫や糞線虫の分子同定法の開発に携わってきた(論文2, 4.)。</p> <p>●モデル線虫を用いた薬剤評価システムの開発</p> <p>線虫の一種である<i>Caenorhabditis elegans</i>にRNA干渉法を使って特定の遺伝子をノックダウンすると表現型に異常を示す線虫が得られる。これをモデル線虫として様々な化合物を加えて表現型の回復が起きる化合物を探索し、その化合物が作用する標的を同定するといった手法によって、薬剤の生体評価システムを構築することを目指している。Hippo pathwayは細胞や臓器の大きさ、腫瘍の抑制、組織の再生など多くの生命現象に重要な働きを担っているシグナル伝達経路であり、ヒトや<i>C. elegans</i>を含む多くの動物で進化的に保存されている。このHippo pathwayを構成するコンポーネント遺伝子をノックダウンしたモデル線虫を作成することで、発生や生理的機能の解明、さらにはガンや再生医療における創薬などに貢献できるものと考えられる。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2001年、Y. Ikeda, R. Machida. Embryogenesis of the dipluran <i>Lepidocampa weberi</i> Oudemans (Hexapoda: Diplura, Campodeidae): formation of dorsal organ and related phenomena. <i>Journal of Morphology</i> 249, no. 3: 242-51. 2006年、T. Nakano, M. Okamoto, Y. Ikeda, H. Hasegawa. Mitochondrial cytochrome c oxidase subunit 1 gene and nuclear rDNA regions of <i>Enterobius vermicularis</i> parasitic in captive chimpanzees with special reference to its relationship with pinworms in humans. <i>Parasitology Research</i> 100, no. 1: 51-57. 2007年、H. Hasegawa, Y. Ikeda. <i>Paracosmocercella rosettae</i> n. gen. et n. sp. (Nematoda: Cosmocercidae: Cosmocercidae) collected from the Japanese tree frog, <i>Hyla japonica</i> (Anura: Hylidae), in Japan. <i>Journal of Parasitology</i> 93, no. 4: 884-88. 2009年、H. Hasegawa, S. Hayashida, Y. Ikeda, H. Sato. Hyper-variable regions in 18S rDNA of <i>Strongyloides</i> spp. as markers for species-specific diagnosis. <i>Parasitology Research</i> 104, no. 4: 869-74.

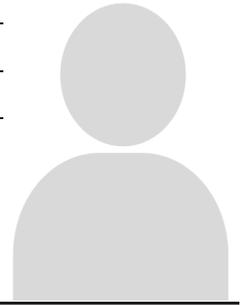
所属・職位	医学部先進医療科学科生命健康科学コース・講師	
氏名	内田 智久 (Uchida Tomohisa)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2004年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	病理学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ、アジアの疫学研究、胃がん
研究内容	<p>Helicobacter pylori (ピロリ菌)感染による慢性炎症の持続が胃がん発症に重要な役割を果たしている。アジアの胃がん発症率は国・地域によって大きな差があり、日本では胃がん発症率が高い一方で、インドネシア、タイでは胃がん発症率は本邦の1/10以下と非常に低い。アジアにおける胃がん発症頻度の差を明らかにするために、フィールドワークで得た生検組織、同時に採取した血清検体を解析することで、胃がんにつながる胃粘膜の病態解析を行い、胃がん発症頻度に差がある原因の解明をおこなっている。さらに、胃粘膜に感染しているピロリ菌病原遺伝子の解析を行い、アジアの胃がん発症率の多様性の原因を遺伝子的な側面から明らかにする研究をおこなっている。</p> <p>また、大分大学初の海外事務所の開設を主導し、開設後もバンコクを拠点に、東南アジア諸国連合 (ASEAN) 地域における人材交流拠点としての活用および共同研究やセミナーの開催教育研究活動のサポートなどを行っている。</p> <div style="text-align: center;">  <p>大分大学バンコクオフィスの活動</p> </div>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> Subsomwong, P., et al., Next-Generation Sequencing-Based Study of Helicobacter pylori Isolates from Myanmar and Their Susceptibility to Antibiotics. <i>Microorganisms</i>, 2022. 10(1). Vilaichone, R.K., et al., Population-based study of Helicobacter pylori infection and antibiotic resistance in Bhutan. <i>Int J Infect Dis</i>, 2020. 97: p. 102-107. Uchida, T., et al., Helicobacter pylori Infection in Thailand: A Nationwide Study of the CagA Phenotype. <i>PLoS One</i>, 2015. 10(9): p. e0136775. Uchida, T., et al., Analysis of virulence factors of Helicobacter pylori isolated from a Vietnamese population. <i>BMC Microbiol</i>, 2009. 9(1): p. 175. Uchida, T., et al., Immunohistochemical diagnosis of the cagA-gene genotype of Helicobacter pylori with anti-East Asian CagA-specific antibody. <i>Cancer Sci</i>, 2007. 98(4): p. 521-8.

所属・職位	医学部看護学科（実践看護学講座）・講師	
氏名	大野 夏稀（ローマ字表記Oono Natsuki）	
取得学位	修士（看護学）、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	臨床看護学
研究キーワード	がん看護、慢性疾患看護、アドバンス・ケア・プランニング、セルフケア支援
研究内容	<p>●がん患者のギアチェンジの支援における医師と看護師の対話に関する研究</p> <p>がん患者の病状が進行していく中で、ギアチェンジ（積極的な抗がん治療から緩和ケア中心の医療・ケアなどへ移行や転換すること、緩和ケア病棟や在宅医療へ移行すること）という複雑な状況に対して、一般病棟の医師と看護師は、患者の病状や治療方針という結果については情報交換し共通理解をしていたが、互いの感情や考え、根拠や意味までを共有して相互理解する状況ではなく、協働に発展する対話には至っていなかった。</p> <p>がん患者・家族が病気のどのような段階においてもよりよく生きていくために、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）を焦点にあて、患者・家族、医療者が協働したチームとなることに関して探究をしていきます。</p> <p>●健康な人がACPIに取り組む意義に関する研究</p> <p>病を持っていてもいなくても「よりよく生きる」ことについて、市民への人生会議の啓発や実施を通して人生会議の意義を明らかにした結果、参加者間の語り合いを通して、ACPIについて、正しい意味を知り、ACPの必要性や関心が高まり、ACPIに取り組む上での重要な視点を理解し、人生会議の意義を見出していた。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な研究論文・発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がん患者のギアチェンジの支援における医師と看護師の対話に関する課題、日本がん看護学会誌29巻Supple. 151. 2015 ・「病を持っていてもいなくてもより良く生きるを目指した人生会議」の意義、日本看護研究学会九州地方会 第26回学術集会（2022年） ・大野夏稀, 脇幸子, 末弘理恵, 寺町芳子：終末期がん患者・家族との意思決定に向けたコミュニケーションのロールプレイ演習の効果、大分大学教育マネジメント機構紀要 第2号, 79-89. 2023 ・式田 由美子, 大末 美代子, 大野 夏稀, 脇 幸子, 清水 安子：糖尿病セルフケア能力測定ツールを活用したセルフケア支援での入院時と退院時における患者－看護師間の相互作用の探究、日本糖尿病教育・看護学会誌28巻1号, 19-28. 2024

所属・職位	医学部医学科（研究マネジメント機構動物管理部門/CERD）・講師		
氏名	奥山 みなみ（Okuyama Minami）		
取得学位	博士（獣医学）、北海道大学、2014年3月		
SDGs目標		<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p>	



研究分野	繁殖生理学、野生動物学
------	-------------

研究キーワード	野生動物、豚、子宮、精漿、妊娠免疫
---------	-------------------

研究内容	<p>●精漿による子宮機能調節と受胎性向上に関する研究 妊娠の成立・維持には母体が胚を受け入れる体制を整えることが重要であり、交配の際に精液中の液体成分である精漿が子宮内膜に作用し、受胎性に関与します。精漿がどのように子宮に作用し受胎性を向上させるのかを研究し、人・家畜・野生動物、多くの生き物に対し生殖成績を向上させる技術の開発を目指しています。</p> <p>●鯨類の新規人工授精方法の確立を目指した繁殖生理の評価 鯨類の新しい人工授精方法を確立させるために、精子の長期保存方法の開発や、雌の発情診断基準の確立、季節的な繁殖生理の評価を行っています。大分県内のつくみイルカ島、うみたまごを中心に、山口・九州圏内の水族館と共同で行っている研究です。</p> <p>●特定外来生物アライグマの個体数増加・分布拡大に関する研究 近年、特定外来生物アライグマの九州地域における生息域が急速に拡大しており、大分県内でも生息数が増大しています。「なぜアライグマがこんなにも増えるのか」を繁殖生理学的な視点で、「どのように生息域を広げているのか」を行動学的・遺伝学的な視点で、解析をしています。本研究は、大分県、大分市、大分県内のNPOらとの協力体制のもと実施している、地域に根差した研究です。</p>	
------	--	---

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2025年. Sawa S, Kawahiro N, Okuyama MW. Artificial insemination of the bottlenose dolphin (<i>Tursiops truncatus</i>); a trial with simple instruments and on criteria for estrous behavior linked to changes in the estradiol level and follicle development. <i>J Reprod Dev.</i> (accepted) 2024年. Okuyama MW, Moriyoshi M, katagiri S. Changes in interleukin-2, -4, -6 and -8 expression in the postovulatory sow endometrium after artificial insemination based on conceived or failed to conceive. <i>J Reprod Dev.</i> 70(3) 192-196. 2023年. Takanari H, Okuyama MW, Kuroki K, Kondo H, Kira S, Miura M, Takahashi N, Okuda T. A case report of acute cardiac tamponade creation in a Macaque: echo-guided catheter manipulation to perforate coronary artery. <i>Yonago Acta Medica</i> 66(1) 192-195. 2022年. Hashimoto T, Yahiro T, Yamada K, Kimitsuki K, Okuyama MW, Honda A, Kato M, Narimatsu H, Hiramatsu K, Nishizono A. Distribution of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus and Antiviral Antibodies in Wild and Domestic Animals in Oita Prefecture, Japan. <i>Am J Trop Med Hyg</i> 106(5) 1547-1551. 2021年. Kudo H, Okuyama MW, Sakamoto KQ, Uchida K, Sato K. Serotonin-manipulated juvenile green sea turtles <i>Chelonia mydas</i> exhibit reduced fear-like behaviour. <i>Endanger Species Res</i> 46 185-191.
---------------	--

所属・職位	医学部医学科微生物学講座・講師	
氏名	君付 和範 (Kimitsuki Kazunori)	
取得学位	博士(獣医学)、北里大学、2018年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

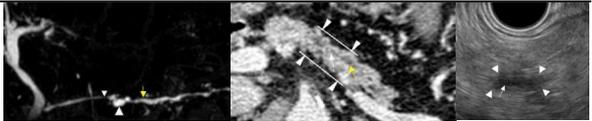
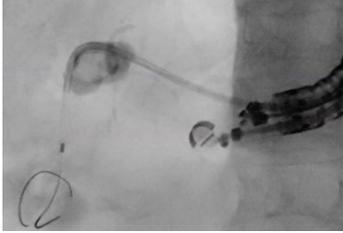
研究分野	獣医学、病理学、ウイルス学
研究キーワード	狂犬病、Neglected Tropical Diseases
研究内容	<p>● フィリピンにおける狂犬病の調査と新規診断方法開発</p> <p>狂犬病対策として、犬の狂犬病をコントロールすることが最も重要であるにも関わらず、多くの狂犬病流行国では十分なサーベイランス自体が行えていないのが現状である。そこで、より簡便に動物の狂犬病診断を行うべく、狂犬病流行国における狂犬病疑い動物のサーベイランスの実態調査、迅速診断キットによる簡易診断方法の評価、新規遺伝子検出方法の開発、病理組織学解析などを現地の研究者らと行なっている (Mananggit MR. et al 2021, and Kimitsuki K. et al 2020, Demetria C. et al 2023, Mauhay JD. et al 2023, and Cruz JL. et al 2023)。</p> <p>※関連リンク：http://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/SATREPS.html</p> <p>● 狂犬病ウイルス感染モデルマウスを用いた病態解析</p> <p>末梢感染性の高い狂犬病ウイルス株である野外流行株(街上毒)を用いた末梢感染モデルを解析することで、潜伏期間中における狂犬病ウイルスの病原性発現機序、及び宿主応答を明らかにすることを目指す。さらに、これらの狂犬病ウイルス感染モデルマウスを用いて、抗ウイルス薬などの治療効果についても評価を進めている (Kimitsuki K. et al 2017, Yamada K. 2021, and Kimitsuki K. et al 2023)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>● 論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Mauhay JD, Saito N, Kimitsuki K, Mananggit MR, Cruz JL, Lagayan MG, Garcia AM, Lacanilao PM, Yamada K, Saito-Obata M, Manalo DL, Demetria CS, Quiambao BP, Nishizono A. Molecular Analysis of Rabies Virus Using RNA Extracted from Used Lateral Flow Devices. <i>J Clin Microbiol.</i> 2023 Mar 23;61(3):e0154322. doi: 10.1128/jcm.01543-22. 2. Demetria C, Kimitsuki K, Yahiro T, Saito N, Hashimoto T, Khan S, Chu MYJ, Manalo D, Mananggit M, Quiambao B, Nishizono A. Evaluation of a real-time mobile PCR device (PCR 1100) for the detection of the rabies gene in field samples. <i>Trop Med Health.</i> 2023 Mar 17;51(1):17. doi: 10.1186/s41182-023-00501-3. 3. Kimitsuki K, Khan S, Kaimori R, Yahiro T, Saito N, Yamada K, Nakajima N, Komeno T, Furuta Y, Quiambao BP, Virojanapirom P, Hemachudha T, Nishizono A. Implications of the antiviral drug favipiravir on rabies immunoglobulin for post-exposure prophylaxis of rabies in mice model with category III-like exposures. <i>Antiviral Res.</i> 2023 Jan;209:105489. doi: 10.1016/j.antiviral.2022.105489. 4. Kimitsuki K, Saito N, Yamada K, Park CH, Inoue S, Suzuki M, Saito-Obata M, Kamiya Y, Manalo DL, Demetria CS, Mananggit MR, Quiambao BP, Nishizono A. Evaluation of the diagnostic accuracy of lateral flow devices as a tool to diagnose rabies in post-mortem animals. <i>PLoS Negl Trop Dis.</i> 2020 Nov 5;14(11):e0008844. doi: 10.1371/journal.pntd.0008844. eCollection <p>● 受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2023年 2023年度日本熱帯医学会研究奨励賞 2. 2023年 第13回中塚医学賞(大分大学医学部研究表彰) 3. 2015年 Best Poster Award, Asian Society Veterinary Pathology

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・講師	
氏名	後藤 奈穂 (Goto Naho)	
取得学位	博士 (保健学)、山口大学、2023年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	保健師、地域ケアシステム
研究内容	<p>●医療的ケア児への行政保健師の活動指標に関する研究</p> <p>本研究は、保健所保健師による医療的ケア児とその家族への支援の実態を明らかにし、医療的ケア児への行政保健師の活動指標の開発に向けた検討をすることを目的とした。</p> <p>第1段階では、保健所保健師が支援した4事例についての保健師ヘグループインタビュー調査を行った。インタビュー内容を類似性でカテゴリー化し、平野の「保健所保健師に求められる実践能力項目」の枠組みで分類整理し、保健師活動の特徴を検討した。第2段階では、全国の保健所(415箇所)に所属する医療的ケア児支援の担当保健師を対象に、第1段階で明らかになった支援内容から医療的ケア児支援項目を作成し、「必要性認識度」と「実施度」について郵送による自記式質問紙調査を行った。記述統計、探索的因子分析により保健所保健師による医療的ケア児支援の構成因子を明らかにし信頼性と妥当性を検証した。その結果、構成因子として、【家族単位の在宅ケアニーズ判断】、【保護者へのアプローチ】、【児の医療ニーズと障害に関するニーズに着目する】、【危機発生への備え】、【支援者間で方針の共有と検討】、【発育発達に伴うライフイベントへの対応】が導出された。</p> <p>導出された6要素について、保健所保健師による支援、および医療的ケア児への支援としての観点から、先行研究をもとに妥当性を検討し、医療的ケア児への行政保健師による活動内容の重要な要素であることを確認した。引き続き研究を重ね、活動指標とその下位の具体的な活動項目を精練させる必要がある。</p> <p>(学位論文1. 医療的ケア児への行政保健師の活動指標の開発に向けた検討)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2016年、後藤奈穂, 栴島千穂, 志賀たずよ, 井手知恵子: 行政保健師が行う医療依存度の高い乳児への支援チームづくり, 第46回日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション, p. 200-203. 2022年、志賀たずよ, 後藤奈穂, 井手知恵子: 大分県における県型保健所保健師と市町村保健師の協働活動の実際, 保健師ジャーナル, 79巻1号. 2022年、後藤奈穂, 牛尾裕子, 守田孝恵: 医療的ケア児に対する保健師活動一個別事例への保健所保健師の支援に焦点をあてて一, 山口医学, 第71巻2・3合併号, p 65-74. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2021年、保健師活動を展開する扉 共著, 守田孝恵(編著)他, クオリティケア, : 71-72

所属・職位	医学部消化器がん先端診療学講座・講師		
氏名	佐上 亮太 (ローマ字表記Ryota Sagami)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年9月		
SDGs目標		<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p>	

研究分野	消化器内科学・消化器内視鏡学		
研究キーワード	早期膵癌、超音波内視鏡ガイド下胆道ドレナージ (EUS-BD)、内視鏡的結石治療		
研究内容	<p>●早期膵癌診断に関する研究</p> <p>膵癌は予後最悪の固形臓器癌であり、5年生存率は13%程度と非常に低い。一方で径10mm以下の早期病変で発見できた場合は、90%以上であり、早期発見により大きく予後が改善される。しかしながらその発見は困難であり、スクリーニングすべき患者選定や画像検査における特徴、細胞組織学的診断に至るストラテジーなどに一定の見解がないことが要因として挙げられる。これらを解決するために必要な診断方法を継続的に探索・発信し続けている。</p> <p>●最先端の超音波内視鏡ガイド下胆道ドレナージ (EUS-BD) に関する研究</p> <p>通常閉塞性黄疸、胆管炎に対しては内視鏡的逆行性胆管膵管造影検査 (ERCP) を用いた治療が一般的であるが、成功率は90-95%程度とされている。ERCPが適応とならない症例に対して行われるのが超音波内視鏡ガイド下のドレナージである。最先端治療を提供するとともに、関西・九州のエキスパートと協力し、世界にエビデンスを提供している。(論文 Sagami R et al. J Clin Med 2023, Sagami R et al. Dig Endosc 2020, Koga T, Sagami R et al. Gastrointest Endosc 2024)</p> <p>●内視鏡的結石治療は胆膵内科で最も一般的なものであるが、その治療法は徐々に進化している。特にEUS-BDを用いた治療法も発展しており、当グループでも症例ベースの発表や多施設共同後方視検討などを行い、そのエビデンスを発信している。(Sagami R et al. Endoscopic Int Open 2024, Sagami R et al. Digestion 2022など)</p>		
研究業績・アピールポイント	<p>早期膵癌発見に関するエビデンスは当グループを中心に世界のオピニオンリーダーとなるべく、継続的に情報発信を行っている。また、多くの大学病院・市中病院と共同で数多くの多施設共同研究を行っており、2019年から行われた大規模多施設共同研究のデータ集積が終了し、早期膵癌発見のためのスコアリングシステムのデータ発信により、早期膵癌診断におけるまた新たなエビデンスが生まれている。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2025年 Yamao K, Sagami R et al. Pancreatology 2025 2024年 Sagami R et al. Pancreatology 2024 2024年 Sagami R et al. Gastrointest Endosc 2024 他多数 <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2024年 【膵癌・胆道癌の早期診断に挑む】佐上 亮太他 2024年 【膵癌の早期発見・早期診断を目指して】佐上 亮太他 など <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2021年 Clinical Investigator Award 第51回 日本膵臓学会大会 2017年 Young Investigator Award 第48回日本膵臓学会大会 		



所属・職位	医学部 看護学科 基盤看護学講座・講師	
氏名	佐藤 祐貴子 (Sato Yukiko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	ポジショニング、安楽、看護教育
研究内容	<p>●安楽なポジショニングに関する研究</p> <p>看護においてポジショニングは、身体を自力で動かすことのできない患者やクライアントの安楽を保持するため、将来的な観点も含めた日常生活行動遂行のための姿勢の調整を行う基本的な看護技術の一つである。患者のリハビリテーションや日常生活援助において、生じる身体背面への摩擦力を軽減する方法として圧取り除きグローブを用いた圧抜きが用いられる。圧取り除きグローブの普及については、ポジショニングの道具として幅広く病床や在宅で活用され始めて概ね5～6年であり、優れた新たな道具がエビデンスに沿った看護技術として普及されることを目指す。これまで、同一体位を持続することによる苦痛を時間の観点から明らかにしている(論文1,論文2)(科研費; 圧取り除きグローブを用いた同一体位における安楽なポジショニングケアの開発, 平成28年～令和元年)。現在は、体軸の観点からそのエビデンスを明らかにすることに取り組んでいる(科研費; 安楽なポジショニングケアの開発: 圧抜き方法のエビデンスの検証, 令和3年～令和6年)。</p> <p>●コルブの経験学習理論を用いた初学者における看護技術教育の取り組み</p> <p>実践を伴う科学である看護において、経験、省察、思考、行動、という要素を持つコルブの経験学習理論は有用な学習理論である。看護技術の初学者が、初めて学ぶ看護技術の科目において、この基本的な学修プロセスを踏んで学ぶ教育効果について検討している。</p> <p>●自然災害に対する平時及び発生時における地域住民の災害時健康危機管理向上のための準備教育プログラムの開発</p> <p>地域住民の中でも特に、慢性疾患患者・高齢者という災害脆弱者が、災害が発生しても自らの治療や療養を継続し安心して安全に生活を継続していくことができるよう、準備教育プログラムの開発や、教材開発、避難所におけるDXの活用について検討している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>安楽なポジショニングに関する研究内容を主軸として活動を行っており、業績については以下の通りである。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 佐藤 祐貴子, 原田 千鶴. 背部拳上背臥位の2 時間までの経時的な苦痛に関する研究. 日本看護技術学会誌, 17: 1-10, 2018. 査読: 有 2. Sato Yukiko, Tokumaru Osamu, Eshima Nobuoki, Yokoi Isao, Harada Chizuru. Physical pain and muscle activity during hospital bed rest. the 92nd Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, 2015. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 佐藤 祐貴子. ギャッチアップしたあと圧解除するのは、今や常識. 月刊ナーシング 37(5): 87-88, 学研メディカル秀潤社, 2017. <p>●受賞</p> <p>中塚医賞看護学専門分野受賞 (2016年10月)</p>

所属・職位	医学部 医学科 生化学・分子遺伝学講座・講師			
氏名	清水 誠之 (Shimizu Nobuyuki)			
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2013年3月			
SDGs目標	 <p>3 すべての人に健康と福祉を</p>	 <p>4 質の高い教育をみんなに</p>	<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください</p>	

研究分野	疾患生物学・ケミカルバイオロジー
------	------------------

研究キーワード	肝疾患、白血病、生体可視化、タンパク質分解、シグナル伝達
---------	------------------------------

研究内容	<p>生物医学研究のモデル生物として有用なゼブラフィッシュ (<i>Danio rerio</i>) を用いて、イメージング解析と生化学・分子生物学的手法を駆使し、各疾患の病態解明を進めている。</p>
------	---

●生体内イメージングに適した小型動物モデルの開発

近年、CRISPR/Cas9などのゲノム編集技術の発展により、調べたい遺伝子の働きを制御したり、特定の細胞・組織を可視化することが可能となった。これらの技術を、体が透明で小型のモデル動物ゼブラフィッシュに適用することで、生体内で進行する病態プロセスを全身・臓器・細胞単位で、リアルタイムに観察できる。私たちはエネルギー代謝や細胞応答など生体内の重要な現象を可視化できるモデル動物を開発し、ヒト体中で実際に起こる多様な疾患の仕組みを分子レベルで解明することを進めている (論文1, 2, 3, 6, 7)。

●先天性ミオパチー合併症の病態解明と創薬開発

私たちが注力している疾患研究のひとつX連鎖性ミオチューブラーミオパチー (XLMTM) は筋力低下を呈する遺伝性疾患であり、まれに重篤な肝障害を合併して致死となる。潜在的に肝障害のリスクを有する患者では、XLMTMに対する遺伝子治療が予期せぬ有害事象を引き起こすことが報告されている。しかし、その詳細な機序については依然として不明である。これまでに私たちは、ヒトの病態を再現するゼブラフィッシュXLMTMモデルの構築に成功しており、本モデルを用いた肝障害病態の解明ならびに創薬研究の基盤構築に取り組んでいる。

●標的タンパク質分解誘導薬の研究

低分子薬は特定の酵素活性を“阻害”することで治療効果を発揮する。最近、新しい医薬品に分類されるタンパク質“分解”誘導薬が注目を集めている。私たちはタンパク質分解誘導薬として一部の白血病で認可されたサリドマイド誘導体において、他の白血病への治療に対する適応可能を示し (論文4, 5)、動物モデルを用いてその有効性を検証している。

研究業績・アピールポイント	<p>●代表論文</p>
---------------	--------------

- 2012年 *Developmental biology* 370(1)71-85. [Shimizu N et al.](#)
- 2014年 *Cell reports* 8(5)1391-404. [Shimizu N et al.](#)
- 2019年 *Nature communications* 10(1)4710-4710. Akieda Y and [Shimizu N et al.](#)
- 2021年 *Communications biology* 4(1)1277-1277. [Shimizu N et al.](#)
- 2020年 *Nature chemical biology* 16(11)1208-1217. Yamamoto J and [Shimizu N et al.](#)
- 2023年 *Cells* 12(18). [Shimizu N et al.](#)
- 2024年 *BBRC* 712-713 149932-149932. Miyazaki S and [Shimizu N et al.](#)

●著書

- 2019年 プロテアソームと疾病研究の動向 *メディカル・サイエンス・ダイジェスト*
- 2023年 ゼブラフィッシュを用いたヒト疾患研究 *大分県医学会雑誌* 29 10-16

●受賞

- 2023年 日本生化学会九州支部 学術奨励賞

所属・職位	医学部先進医療科学科臨床医工学コース・講師	
氏名	丹下 佳洋 (Tange Yoshihiro)	
取得学位	博士 (保健科学)、九州保健福祉大学、2013年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	人工臓器学 (代謝系)、血液透析工学
------	--------------------

研究キーワード	人工臓器、透析液清浄化、尿毒素、生体適合性
---------	-----------------------

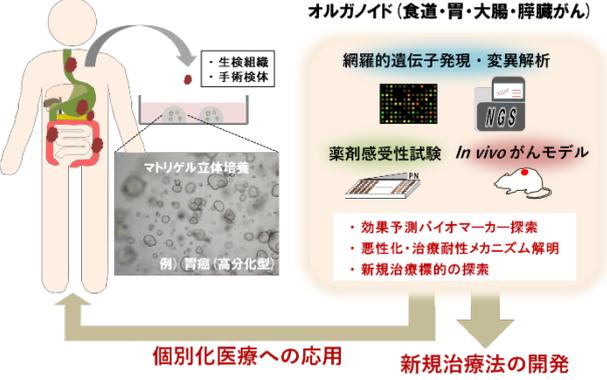
研究内容	<p>●Online HDFの操作条件と溶質除去特性 現在の血液透析の主流であるオンライン血液透析濾過 (online HDF) の溶質除去特性を、大学在学時から継続して研究している。大学卒業後は血液透析専門病院で臨床業務を行いながら様々な材質の人工腎臓 (透析膜) を用い、溶質除去の違いに関する臨床評価を行った。</p> <p>●人工腎臓の尿毒素除去に関する研究 透析療法によって抗ウイルス作用を持つ一酸化窒素 (NO) ドナーが大量に除去されることを報告した[論文1]。透析患者の新型コロナウイルス感染症による死亡リスクが高いのは、高齢が主な原因であるが、生体にとって必要物質が除去されることも要因として考えられる。そのため、NOドナーを含む補充液を作製し、血液透析によるNOドナーの過度な除去を抑制する方法を報告した[論文2]。さらに、長時間にわたり、尿毒素の除去効率の高い透析膜の特性について透水性を指標として医工学の観点から評価している[論文3]。</p> <p>●透析用水清浄化 血液と透析液は透析膜を介して接触するため、透析液を含む透析用水の清浄化は必須である。透析液中のエンドトキシン (ET) が未使用のET捕捉フィルターであっても、漏出することを示した[論文4]。また、2019年に韓国からの依頼で、日本の透析システム (GDSS) のメリットとデメリットに関する招聘講演を行っている。</p> <p>●生体への酸素供給 輸液剤から生体に酸素を供給する方法を報告した[論文5]。本法を応用することで、低酸素の患者に対し、輸液剤から酸素の供給が可能になる。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Tange Y, et al. Renal replacement therapy removes a large number of nitric oxide donors responsible for the nitrate-nitrite-nitric oxide pathway. <i>Int J Artif Organs</i> (2023) Mar;46(3):129-134. 2. Tange Y, et al. Nitric oxide delivery using nitric oxide-containing fluid in continuous hemofiltration: an in vitro study. <i>J Artif Organs</i> (2022) Mar;25(1):66-71. 3. Tange Y, et al. Asymmetric triacetate membrane keeps high water flux during ultrafiltration: in vitro study. <i>J Artif Organs</i> (2017). 20(4) 399-402. 4. Nozaki H, Tange Y, et al. Leakage of Endotoxins through the Endotoxin Retentive Filter: An in vitro Study. <i>Blood Purification</i> (2022) 51(10):831-839. [責任著者] 5. Tange Y, et al. Simple method to make a supersaturated oxygen fluid. <i>J Artif Organs</i>. 21(3) 392-395 (2018) Sep;21(3):392-395. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床工学講座 生体機能代行装置学 血液浄化療法装置 (部分執筆). 医歯薬出版株式会社 2. <i>The Essentials of Clinical Dialysis</i>. (2017) pp 73-79. Springer <p>●受賞</p> <p>Best Abstracts Award, 30th International Society of Blood Purification (2012)</p>
---------------	---

所属・職位	医学部分子病理学講座 講師	
氏名	塚本 善之 (ローマ字表記 Yoshiyuki Tsukamoto)	
取得学位	博士 (生命科学)、鳥取大学、2004年9月	
SDGs目標		

研究分野	分子病理学
研究キーワード	がん、オルガノイド

患者由来がんオルガノイドを用いた研究



私は患者さんのがん組織を培養した「癌オルガノイド」を用いた研究を行っています。がんオルガノイドは最近開発されたがん組織培養法で、患者がん組織の性質と類似した立体培養です。

私たちは食道がん、胃がん、大腸がん、胆道がん、膵がんの組織よりがんオルガノイドを作製し、網羅的な遺伝子異常解析（マイクロアレイ、次世代シーケンスなど）を実施しています。さらに、遺伝子異常に基づいた治療薬を選択し、それが本当に効くか、薬剤感受性解析でその効果を検証します。

これらの解析により、がんの個別化医療や新規治療法の開発への応用を目指しています。

研究業績・アピールポイント	<p><主な論文></p> <ul style="list-style-type: none"> ・2024年 Characterization of residual cancer by comparison of a pair of organoids established from a patient with esophageal squamous cell carcinoma before and after neoadjuvant chemotherapy. <i>Hum Cell</i> 37(2):491-501 (責任著者) ・2023年 Efficient Establishment of Bile-Derived Organoids From Biliary Cancer Patients. <i>Laboratory Investigation</i> 103(6):100105 (責任著者) ・2023年 Patient-Derived Ex Vivo Cultures and Endpoint Assays with Surrogate Biomarkers in Functional Testing for Prediction of Therapeutic Response. <i>Cancers</i> 15(16):4104 (責任著者) ・2023年 Association of immune-related expression profile with sensitivity to chemotherapy in esophageal squamous cell carcinoma. <i>Cancer Science</i> 114(11):4459-4474 (責任著者) ・2022年 Enhanced phosphorylation of c-Jun by cisplatin treatment as a potential predictive biomarker for cisplatin response in combination with patient-derived tumor organoids. <i>Laboratory Investigation</i> 102(12):1355-1366 (責任著者) ・2021年 Early response in phosphorylation of ribosomal protein S6 is associated with sensitivity to trametinib in colorectal cancer cells. <i>Laboratory Investigation</i> 101(8):1036-1047 (責任著者) <p><受賞></p> <p>第1回 (2011年)、第13回 (2023年) 中塚医学賞 (大分大学医学部研究表彰)</p> <p><科学研究費></p> <p>2021-24年 基盤研究 (B) 代表者 「核タンパク質リン酸化プロテオミクスを用いた新規抗癌剤効果予測因子と治療標的の探索」</p> <p>2018-20年 基盤研究 (B) 代表者 「胃癌オルガノイドと早期反応性マーカーによる新しい抗癌剤効果予測システムの構築」</p> <p>2016-17年 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化) 代表者 「胃癌悪性化におけるDDX27発現亢進の機能的意義 (国際共同研究強化)」</p>
---------------	--

所属・職位	医学部 医学科 医学英語教育学講座・講師	
氏名	Chidlow Sean Michael (チドウロウ ショーン マイケル)	
取得学位	修士 (英文学)、Queen's University、1993年10月	
SDGs目標	 	
研究分野	医療人文学	
研究キーワード	医療人文学、EMP	
研究内容	<p>●医療人文学データベースの開発</p> <p>医療を学ぶ学生や医療従事者が医療に関する文化や医療用語を学ぶことができる本や映画を英語と日本語の2か国語で紹介するデータベース「Medical Humanities Database Japan」を構築した(論文1・論文2・外部資金：科研費基盤研究(C) 24520163)。 ※関連リンク：http://www.medicalhumanitiesjapan.com.</p> <p>●英語医療面接の評価方法に関する研究および英語医療面接自動採点システムの開発</p> <p>医療従事者の英語力育成のために、英語医療面接の評価方法に関して研究し、これまでに以下の成果をあげてきた。</p> <p>①Can-do listを用いて英語医療面接のpeer evaluationを実施した結果、英語力に関する評価項目(発音・流暢さ)および発話の適性さ(relevance)に関しては、教員とpeer evaluationの評価の間に大きなギャップが見られ、学生間の評価の信頼性は低く、教師の評価への依存性の高さが明らかになった(学会発表1)。</p> <p>②コロナ禍で英語医療面接をZoomとMoodleを用いて実施し、オンライン実施上の利点を明らかにした(学会発表2)。</p> <p>現在は、これまでの研究をもとに、英語医療面接における英語スピーキング学習・自動評価システムの開発を行っている。</p> <p>※関連リンク： http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.a212ee11f9518446520e17560c007669.html</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2013年、Chidlow, S. 「Medical Humanities Database Japan: Motivating Medical Students and Professionals to Read English Literature for Pleasure」 <i>Journal of Medical English Education Vol. 12(3)</i>, pp. 56-62.</p> <p>2. 2014年、Chidlow, S. 「Rationalizing the Use of Graphic Novels for EMP Education」 <i>大分大学高等教育開発センター紀要 (6)</i>, pp. 93-99.</p> <p>●学会発表</p> <p>1. 2018年、Chidlow, S. & Oshita, H. 「Creating an effective peer evaluation Can-do list for medical interviews.」 第21回日本医学英語教育学会学術集会.</p> <p>2. 2021年、Chidlow, S. & Oshita, H. 「Evaluating student performance in online medical interviews in English with simulated patients.」 第24回日本医学英語教育学会学術集会.</p>	

所属・職位	医学部 腫瘍・血液内科学講座 講師	
氏名	戸高 明子 (Todaka Akiko)	
取得学位	博士(医学)、慶應義塾大学、2017年3月	
SDGs目標	  	

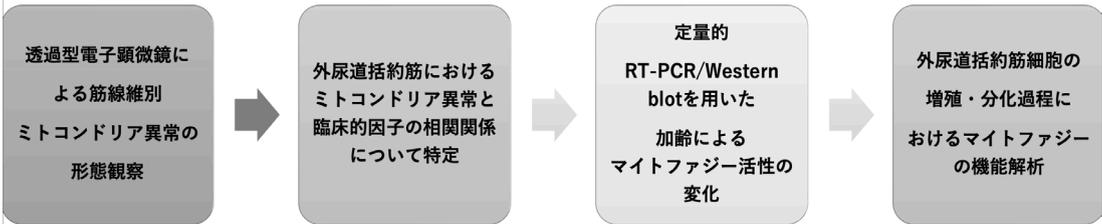
研究分野	消化器がん薬物療法
研究キーワード	膵がん、胆道がん
研究内容	<p>● 膵がんにおけるFOLFIRINOX療法の前向き観察研究</p> <p>2013年12月に切除不能膵がんに対しFOLFIRINOX療法が承認されたが、毒性が高く、国内での状況を把握するため多施設共同前向き観察研究を行った。国内27施設より399例の症例が登録され、リアルワールドにおける安全性、有効性、治療状況などの結果を報告した(論文1)。さらに有害事象のリスク因子解析やUGT1A1 single variantを有する症例に対する安全性の検討など7本の副次的解析を実施した。(論文2-7)</p> <p>● 腹腔洗浄細胞診陽性の膵がん切除例に対する術後治療に関しての多施設共同後ろ向き研究</p> <p>膵がん根治切除施行例のうち、腹腔洗浄細胞診陽性例は約5%に認められ、多施設共同研究にて、術後治療の状況、治療効果について検討した。14施設より124例が集積され、実臨床では術後補助化学療法に準じた治療が行われているがその効果は十分ではないことが示唆され、さらなる治療開発が必要と考えられた。(論文8)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>● 論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>Todaka A</u>, Mizuno N, Ozaka M, et al. Nationwide multicenter observational study of FOLFIRINOX chemotherapy in 399 patients with unresectable or recurrent pancreatic cancer in Japan. <i>Pancreas</i>. 47(5):631-636, 2018. 2. Shirasu H, <u>Todaka A</u>, Omae K, et al. Impact of UGT1A1 genetic polymorphism on toxicity in unresectable pancreatic cancer patients undergoing FOLFIRINOX. <i>Cancer Sci</i>. 110(2):707-716, 2019. 3. Matsumoto I, Kamei K, <u>Todaka A</u>, et al. FOLFIRINOX for locally advanced pancreatic cancer: Results and prognostic factors of subset analysis from a nation-wide multicenter observational study in Japan. <i>Pancreatol</i>. 19(2):296-301, 2019. 4. Kobayashi S, Ueno M, <u>Todaka A</u>, et al. Influence of initial dose intensity on efficacy of FOLFIRINOX in patients with advanced pancreatic cancer. <i>Oncotarget</i>. 10(19):1775-1784, 2019. 5. Morinaga S, Takita M, <u>Todaka A</u>, et al. FOLFIRINOX for recurrent pancreatic cancer after pancreatic resection: A secondary analysis of the nationwide multicenter observational study conducted by the Japan Adjuvant Study Group of Pancreatic Cancer 06. <i>Pancreas</i>. 49(10):1372-1377, 2020. 6. Kobayashi N, Omae K, <u>Todaka A</u>, et al. FOLFIRINOX as second-line chemotherapy for advanced pancreatic cancer: A subset analysis of data from a nationwide multicenter observational study in Japan. <i>Pancreatol</i>. 20(7):1519-1525, 2020. 7. <u>Todaka A</u>, Sasaki M, Ueno H, et al. FOLFIRINOX in pancreatic cancer: Risk factors for febrile neutropenia and severe neutropenia - Nationwide study analysis. <i>Anticancer Res</i>. 43(9): 4115-4123, 2023. 8. <u>Todaka A</u>, Nara S, Motoi F, et al. Postoperative treatment of resectable pancreatic cancer with positive peritoneal lavage cytology: A multicentre retrospective study. <i>Anticancer Res</i>. 42(2) 893-902, 2022. <p>● 著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2022年、膵がんメソッド第3版 日本医事新報社 共著

所属・職位	医学部医学科腎泌尿器外科学講座・講師		
氏名	羽田 真郎 (Hata Shinro)		
取得学位	博士(医学)、大分大学、2017年9月		
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	 リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください	



研究分野	泌尿器腫瘍学
------	--------

研究キーワード	前立腺癌、外尿道括約筋、マイトファジー
---------	---------------------

研究内容	<p>●新規尿失禁治療法の開発に向けた外尿道括約筋におけるミトコンドリア異常に関する研究</p> <p>尿失禁は加齢に伴い増加し、高齢者のQOLを低下させる。尿失禁の病態解明と治療開発は喫緊の課題である。一方健常な横紋筋では、選択的オートファジーであるマイトファジーによって、損傷を受けたミトコンドリアをリソソームで分解・除去して横紋筋幹細胞の機能を維持し、筋組織の恒常性を保っている。加齢に伴いオートファジー活性が低下すると、筋肉量が減少すると考えられているが、ヒトの高齢者において外尿道括約筋のミトコンドリアの形態を詳細に検討し、尿失禁との関連について研究した報告はこれまでのところない。</p> <p>本研究は、透過型電子顕微鏡による外尿道括約筋の異常ミトコンドリアの蓄積を検出し、尿失禁や加齢、性差などの臨床的因子との関連を明らかにすることを目的としている。本研究で得られる基礎的知見は、マイトファジー制御による尿失禁治療の開発、ひいては他のミトコンドリア病の新たな病態解明や治療法の開発にも貢献できる。</p> <div style="text-align: center;">  </div>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2020年、Degarelix as a neoadjuvant hormonal therapy for acute urinary tract toxicity associated with external beam radiotherapy for intermediate- and high-risk prostate cancer: a propensity score matched analysis Shinro Hata, Toshitaka Shin, Satoki Abe, Kaori Kawano, Ryuta Sato, Tomoki Kai, Tadamasa Shibuya, Tadasuke Ando, Hiromitsu Mimata Japanese Journal of Clinical Oncology 51(3) 478-483 2017年、Hypoxia-induced angiopoietin-like protein 4 as a clinical biomarker and treatment target for human prostate cancer Shinro Hata, Takeo Nomura, Kazunori Iwasaki, Ryuta Sato, Mutsushi Yamasaki, Fuminori Sato, Hiromitsu Mimata Oncology Reports 38(1) 120-128 2024年、IL-6-Producing Pheochromocytoma Associated With Von Hippel Lindau Disease: A Case Report With Literature Review. Shinro Hata, Mayuka Shinohara, Tadasuke Ando, Hiromitsu Mimata, Toshitaka Shin Cureus 16(1) e52760 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2022年、令和4年度大分大学医学部医師会奨励賞(若手支援・医学研究表彰) 大分大学医学部医師会
---------------	--

所属・職位	医学部先進医療科学科生命健康科学コース・講師	
氏名	花田 克浩 (Hanada Katsuhiko)	
取得学位	博士 (理学)、東京大学、2001年3月	
SDGs目標		
研究分野	天然物化学、分子生物学	
研究キーワード	遺伝子組換え、天然物化学、遺伝毒素、老化	
研究内容	<p>●DNA修復のメカニズムの解析 DNA複製および染色体の分配は、遺伝情報を次世代に伝達する重要な生命現象であり、これらが正確かつ確実に完了しないと、癌や代謝異常を引き起こす原因となる突然変異が発生する。DNAの突然変異は加齢とともに増加し、代謝の低下と変異の蓄積量とは負の相関があるため、日常生活の中で発生するDNAストレスが遺伝子に突然変異を導入することが老化の一因ではないかという仮説が存在する。老化症状が若年期から発生する早老症の原因遺伝子が解明され、その多くがDNA修復やDNAダメージ応答に関わるものであったことも、この仮説を支持している。そこで、我々は、日常生活の中で生じるDNAストレスがどのようにDNAに作用して、染色体の恒常性を破綻させるか、そのメカニズムを解明したいと考えている。特に、老化の原因となるDNAストレスが何かを明らかにしたい。</p> <p>●天然の化合物から医薬品に活用できる物質の探索 植物は、地球上で無機物を有機物に変えることができるほぼ唯一の生物であり、全ての動物は植物が生産した有機物に依存して生命を維持している。植物は自由に動くことができない生物なので、細菌・菌類、動物から自分自身の身を守る仕組みを整える必要がある。多くの場合、植物は、細菌・菌類や動物が好まない成分 (忌避成分) を持っており、その成分による忌避作用が植物自身の身を守っている。忌避成分には、苦味や辛味、強烈な匂い、毒素、その他の生理作用などがあるが、物質によって標的が異なることが多い。我々は、この植物の成分から医薬品の基になる物質を同定し、医薬品として活用できるか検証する研究を行っている。これまでに抗がん剤として活用することを目的としたスクリーニングを行い、いくつかの候補化合物を同定している。コンピューターシミュレーションによって、化合物の作用を予測し、その知見をさらに生化学的に検証するといった作業を繰り返すことで、薬理作用を分子レベルで解明する研究を行なっている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Nishida M, Terabayashi T, Matsuoka S, Okuma T, Adachi S, Tomo T, Kawano M, Tanaka K, Tsumura H, Anai H, Ishizaki T, Nishida Y, Hanada K. Mechanism of action of non-camptothecin inhibitor Genz-644282 in topoisomerase I inhibition. Commun Biol. 2022 Sep 16; 5(1): 982. 2. Inoue N, Terabayashi T, Takiguchi-Kawashima Y, Fujinami D, Matsuoka S, Kawano M, Tanaka K, Tsumura H, Ishizaki T, Narahara H, Kohda D, Nishida Y, Hanada K. The benzyloquinoline alkaloids, berberine and coptisine, act against camptothecin-resistant topoisomerase I mutants. Sci Rep. 2021 Apr 8; 11(1): 7718. 3. 西田欣広、花田克浩. 二重鎖切断と婦人科関連の問題. BIO Clinica. 2023 Aug; 38(9): 54-58. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Methods in Molecular Biology: Methods in DNA electrophoresis. Edited by <u>Katsuhiko Hanada.</u> 2119 (2020). Humana press. Springer. ISBN: 978-1-0716-0323-9. 	

所属・職位	医学部学部医学科高度医療人育成講座・講師			
氏名	平下 有香 (Hirashita Yuka)			
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年3月			
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	 4 質の高い教育をみんなに	リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください	

研究分野	消化器内科
研究キーワード	慢性炎症、発癌、オルガノイド

●慢性炎症消化器疾患からの発癌メカニズムの解明

慢性胃炎、自己免疫性腸炎、慢性膵炎、肝硬変症など、慢性炎症を背景とした消化器疾患は多岐にわたる。現在慢性炎症の原因となる炎症を除去する治療法は目覚ましく進歩している一方、残された組織には「萎縮」・「化生変化」・「線維化」・「発癌」といった課題がのこされている。これまで*H. pylori* 除菌治療後の胃粘膜においても遺伝子変異、メチル化蓄積、シグナル伝達経路の異常などが蓄積残存していることを明らかとしてきた。オルガノイド技術を用いて蓄積した分子異常が化生変化などの機能低下や発癌にどのように関わるのか解明を目指している。



★安定した組織量の確保が可能
遺伝子異常
エピジェネティクス異常
タンパク翻訳後修飾異常
『分子異常プロファイル』

★分化・脱分化誘導が可能
自己複製能
分化能の評価
脱分化誘導による変化
『分化系統プロファイル』

組織修復Data base化
慢性胃炎病態モデル・発癌モデルの確立

分子異常と分化異常を組み合わせた【多角的機能解析】を実現
不可逆的な機能低下を決定づける因子・発癌に関わる因子の同定を目指す

慢性炎症消化器疾患が真の治療目標 “機能低下の克服”と“発癌リスクの減少”へ

研究業績・アピールポイント	<p>1. Patient-Derived Ex Vivo Cultures and Endpoint Assays with Surrogate Biomarkers in Functional Testing for Prediction of Therapeutic Response <i>Cancers</i> 15(16) 4104-4104 2023 Yoshiyuki Tsukamoto*, Yuka Hirashita(Go-first, 2/12), Naoki Hijiya</p> <p>2. Potential association of eEF1A dimethylation at lysine 55 in the basal area of <i>Helicobacter pylori</i>-eradicated gastric mucosa with the risk of gastric cancer: a retrospective observational study. <i>BMC gastroenterology</i> 22(1) 490-490 2022 Yuka Hirashita(1/18)*, Kazunari Murakami</p> <p>3. Early response in phosphorylation of ribosomal protein S6 is associated with sensitivity to trametinib in colorectal cancer cells. <i>Laboratory investigation: a journal of technical methods and pathology</i> 101(8) 1036-1047 2021 Yuka Hirashita*(1/21), Kazunari Murakami</p>
---------------	---

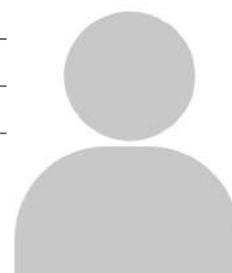
<p>所属・職位</p> <p>氏名</p> <p>取得学位</p> <p>SDGs目標</p>	<p>医学部 医学科 解剖学講座・講師</p> <p>三浦 真弘 (Miura Masahiro)</p> <p>博士 (医学)、大分医科大学、1994年6月</p> 	
<p>研究分野</p>	<p>髄液循環生理学、リンパ学、区域麻酔、がん生物学、酵素組織化学、微細構造解析学</p>	
<p>研究キーワード</p>	<p>Neurofluid、髄液漏出症、癌リンパ性転移、区域麻酔、皮下浮腫間質、脈管外通路</p>	
<p>研究内容</p>	<p>●AMED課題研究：「脳脊髄液減少症の病態生理と診断法の開発」（2020-2023年）</p> <p>①椎骨動脈神経叢-交感神経成分による髄膜リンパ系-髄液圧調節機構の解明（代表）</p> <p>②特発性低髄液圧症候群SIHに伴う慢性硬膜外血腫における血腫被膜の組織学的検討</p> <p>1.2. 三浦, 脊椎脊髄28(6)2015,脊椎脊髄33(9),2020. 3.三浦, 医学の歩み270(13)2019</p> <p>●科研費課題研究(1) (基盤B・基盤C) (2011-2018年, 2022-2024年) (脳神経外科)</p> <p>①ヒト脳髄膜・脊髄神経鞘内-Neurofluid排液systemの微細構造学的・MRI解析(代表)</p> <p>②経リンパCSF側副吸収路における正常・異常CSF漏出機序の解明とその動態解析(代表)</p> <p>③MRIを用いた脳脊髄液及び間質液の動態解析 (Gadolinium髄注-MRI解析) (分担)</p> <p>1.三浦, 画像診断38(3)2018. 2.三浦, 医学の歩み270(13)2019 3. Miura M, SRA.41(10), 2020</p> <p>●科研費課題研究(2) (基盤C) (2017-2019年, 2020-2022年) (解剖学・麻酔科学)</p> <p>新たな超音波ガイド下各種神経ブロック法の開発と解剖学的evidence解明 (代表)</p> <p>●厚労省・科研費課題(3)：腹膜偽粘液腫の本邦における発生頻度・病態の解明・治療法の開発。(分担)</p> <p>(2011～2014年)、* 腹膜播種性転移機構の酵素組織化学解析 (代表)</p> <p>1.三浦, 腹膜播種の治療. 2017 (腹膜リンパ系) 2. Yonemura & Miura M, et al. JCM.11, 2022</p> <p>●共同研究1 (形成外科)：皮下慢性リンパ浮腫の診断と治療法 (間質変化・液性通路閉塞機序) (代表)</p> <p>1. Miura M, Surgical Treatment for Lymphedema, 86-102, 2017(Person shobo).</p> <p>●共同研究2 (乳腺外科) (代表) 乳癌センチネルリンパ節の血管支配-形態学的解析</p> <p>乳腺リンパ排液経路 1. Miura M, SRA.41(10), 2019. 2. Abe M, Miura M, Anat.Sci. Int.96, 2021</p> <p>●共同研究3 (麻酔科学)：中腋窩線で穿刺するM-TAPAの効果範囲に関する解剖学的検討</p>	
<p>研究業績・アピールポイント</p>	<p>Neurofluid循環、髄液漏出症・iNPHの発症機序、脈管外通路、癌腫リンパ行性転移機構、神経ブロック法開発、腱・靭帯線維束解析、皮下浮腫発生機序に関わる臨床解剖的研究に従事</p> <p>●論文：1. 2022年, Miura M, et al. Description of the latest neurofluid absorption mechanisms. JANS. 2. 2022年, Uchino T, Miura M, et al. Comparison of three nerve block techniques for injectate spread into the obturator canal. J. Anesthesia. 3. 2021年, Abe M, Miura M, et al. Arterial blood supply patterning (MSLNs). Anat. Sci. Int. 4. 2020年, 高橋, 三浦, 脊髄瘻に伴う髄液減少症.脊椎脊髄(33).</p> <p>●著書：1. 2017年, Miura M :Surgical Treatment for Lymphedema,86-102. (Person Shobo,Tokyo). 2.三浦: 腹膜播種転移の分子機構 (スキルス胃癌 基礎と臨床) 158-177, 2010 (医薬ジャーナル社)</p> <p>●受賞：1. 2009年, 日本リンパ学会・奨励賞 (西満正賞). 2 2013年, 第60日本麻酔科学学会・最優秀演題賞(指導研究). 3. 2018年, 九州山口スポーツ医科学研究会・臨床部門・最優秀演題賞. 4. 2018年, 第6回日本区域麻酔科学学会・最優秀演題賞. 2019年, 第7回日本区域麻酔科学学会・最優秀演題賞. 5. 2019年, 第4回日本リンパ浮腫治療学会学術集会・最優秀ポスター賞.</p>	

所属・職位	医学部 先進医療科学科 臨床医工学コース・講師	
氏名	道越 淳一 (Michikoshi Junichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年6月	
SDGs目標	  	

研究分野	人工臓器学 (呼吸器系・代謝系)
研究キーワード	人工呼吸器、気道管理、急性血液浄化、持続的血液濾過器
研究内容	<p>●人工呼吸管理で気道管理に必要な気管チューブ・気管カニューレのカフに関する研究 (カフ圧の自然脱気やシール能力をカフの材質・形状・大きさなどから解析)、気管吸引・加温加湿に関する研究を通し、急性期・慢性期・在宅における安全な人工呼吸管理を目指した研究。(著書1.・2.・3.・4.)</p> <p>●自動カフ圧調整装置の開発 気管チューブのカフ圧の管理は人工呼吸器関連肺炎予防のためにも重要である。現在行われている一般的な管理方法は間欠的な調整方法であり十分な管理が困難であるため、カフ圧を持続的に安定した圧力で管理するため、電源を必要としない新たな自動カフ圧調整装置を開発。(論文1.・受賞2.)</p> <p>●持続緩徐式血液濾過で使用される濾過器の吸着特性を研究。病態に応じた膜の選択を可能にするため、各種タンパクや細胞の吸着による除去特性が、いかにして臨床効果につながるかについて研究。(論文2.・受賞1.)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>臨床ニーズに合った医療機器をより早く臨床に反映させる機器開発。 生体情報のモニタリング機器の研究開発。 医療安全の見地から、各種医療機器の分析を行い臨床に反映させる研究。</p> <p>●論文</p> <p>1.2016年 Performance comparison of a new automated cuff pressure controller with currently available devices in both basic research and clinical settings. Journal of Intensive Care 2016;4:4.</p> <p>2.2019年 Evaluation of Proteins and Cells that Adsorb to Dialysis Membranes Used in Continuous Hemodiafiltration: Comparison of AN69ST,Polymethylmethacrylate,and Polysulfone Membranes. Blood purification 2019;48(4):P358-367.</p> <p>●著書</p> <p>1.2015年 どう回避し,対処する? 事例から学ぶ人工呼吸療法時のトラブル,気管チューブに関するトラブル事例と対処 月刊 Clinical EngineeringVol.26 No.9 2015,P894~900</p> <p>2.2017年 臨床工学技士のための人工呼吸療法トラブル事例と対処:臨床工学技士のための人工呼吸療法 第4章,3,P234~242 学研メディカル秀潤社</p> <p>3.2018年 気管カニューレのカフ圧持続管理の重要性 月刊難病と在宅ケアVol.23 No11. 2018.2</p> <p>4.2020年 [特集]呼吸管理上級編2020 気管チューブカフと自動カフ圧コントロール装置 月刊 Clinical Engineering VOL.31 NO.11 2020,P947~954 学研メディカル秀潤社</p> <p>●受賞</p> <p>1.2018年 第2回日本集中治療学会 支部総会 最優秀演題賞</p> <p>2.2019年 日本臨床工学会 第2回医工連携Award特別賞</p>

所属・職位	医学部 先進医療科学科 生命健康科学コース 講師	
氏名	八尋 隆明 (Yahiro Takaaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	ウイルス学、細胞診断学、臨床検査学	
研究キーワード	SARS-CoV-2、熱帯感染症ウイルス、下痢症ウイルス、ゲノム解析、遺伝子検査	
研究内容	<p>● 感染症ウイルスの分子疫学的解析</p> <p>感染症は、途上国ばかりでなく先進国においても、未だ人類の脅威となっています。2019年12月より世界中に蔓延している新興感染症のCOVID-19 (SARS-CoV-2)、熱帯感染症ウイルス (Dengue, Zika 等)、下痢症ウイルス (Rota, Noro, Bufa, Adeno 等) を分子疫学的解析法によって、ウイルスの塩基配列変異をもとにした系統分類・プロファイリングを行っています。Bufa virusはType1~3の3つの型が存在しており、その中のType3を世界で初めて発見し、ウイルスの全ゲノムを明らかにしました(8)。</p> <p>● デングウイルスと新型コロナウイルスの重複感染による重症化メカニズムの解析 (若手研究、JSPS、2022-2024年度)</p> <p>バングラデシュにおいて、デング出血熱(DHF)が急増しており、原因メカニズムの解明と対応策が喫緊の課題です。重症化メカニズムを解析すると同時に、対応策として途上国で運用可能となる迅速かつ適切な医療診断システムの構築を目指しています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>● 代表論文</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) Recent downhill course of COVID-19 at Rohingya refugee camps in Bangladesh: Urgent action solicited. Sakirul Khan, Sheikh Mohammad Fazle Akbar, Kimitsuki K, Saito N, Yahiro T, Mamun Al Mahtab, Nishizono A. <i>J Glob Health</i>. 11:03097, (2021) (2) Analysis of the prevalence and species of <i>Anisakis</i> nematode in Sekisaba, <i>Scomber japonicus</i> caught in coastal waters off Saganoseki, Oita in Japan. Hidano S, Mizukami K, Yahiro T, Shirakami K, Ito H, Ozaka S, Arika S, Saechue B, Dewayani A, Chalalai T, Soga Y, Goto M, Sonoda A, Ozaki T, Sachi N, Kamiyama N, Nishizono A, Murakami K, and Kobayashi T. <i>Jpn J Infect Dis</i>. JJID.2020.859.(2021) (3) Nineteen Years of Japanese Encephalitis Surveillance in Sabah, Malaysian Borneo. arilyn Charlene Montini Maluda, Jenarun Jelip, Mohd Yusof Ibrahim, Maria Suleiman, Mohammad Saffree Jeffree, Azalina Farina Binti Aziz, Jaeyres Jani, Yahiro T, Ahmed K. <i>Am J Trop Med Hyg</i>. 103(2):864-868.(2020) (4) Long-Term Potable Effects of Alkaescent Mineral Water on Intestinal Microbiota Shift and Physical Conditioning. Yahiro T, Hara T, Matsumoto T, Ikebe E, Koshinomi N-F, Zhaojun Xu, Hiratsuka T, Iha H, Inomata M. <i>Evid Based Complement Alternat Med</i>. 2020:6706239.(2019) (5) Human-porcine reassortant rotavirus generated by multiple reassortment events in a Sri Lankan child with diarrhea. Yahiro T, Takaki M, Chandrasena TGAN, Rajindrajith S, Iha H, Ahmed K. <i>Infect Genet Evol</i>. 65:170-186.(2018) (6) Bufavirus genotype 3 in Turkish children with severe diarrhea. Yahiro T, Altay A, Bozdayi G, Matsumoto T, Sahin F, Ozkan S, Nishizono A, Söderlund-Venermo M, Ahmed K. <i>Clin Microbiol Infect</i>. S1198 743X(15) 00619-9.(2016) (7) Norovirus GII.21 in children with Diarrhea, Bhutan. Yahiro T, Wangchuk S, Wada T, Dorji C, Matsumoto T, Mynak ML, Tshering KP, Nishizono A, Ahmed K. <i>Emerg. Infect. Dis</i>. 21(4):732-4.(2016) (8) Novel genotype 3 human bufavirus from children with severe diarrhea in Bhutan. Yahiro T, Wangchuk S, Tshering K, Bandhari P, Zangmo S, Dorji T, Tshering K, Matsumoto T, Nishizono A, Soderlund-Venermo M and Ahmed K. <i>Emerg. Infect. Dis</i>. 20(6):1037-9.(2014) <p>● 受賞</p> <p>「Appreciation Night 2016」優秀賞 (PUBLICATION部門) / University Malaysia Sabah 「PEREKA 2016」ブロンズ賞 / Center for Research & Innovation, Malaysia</p>	

所属・職位	医学部 医学科 結核医療体制強化事業・講師
氏名	山末 まり (Yamasue Mari)
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年3月
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を



研究分野	呼吸器学、感染症
研究キーワード	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢者、呼吸器感染症 (主に抗酸菌感染症) 2. びまん性肺疾患、希少肺疾患
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢者における肺結核の早期診断と予後に関する研究 本邦における肺結核患者の大半を高齢者が占め、高齢者肺結核の早期診断と予後の改善は、先進諸国が結核感染を制御する中に未だ結核中蔓延国である日本の結核診療において、一つの重要な課題と言える。高齢者における肺結核は、若年者と比較し非典型的な臨床像となり易く、誤嚥性肺炎など一般細菌による感染の合併による修飾などもあり、診断の遅れ、果ては治療介入の遅れに繋がりが易い。高齢者の肺結核患者を対象に、早期診断に繋がる検査法や画像診断法の開発や、また予後予測因子についての分析を行う。 2. 非結核性抗酸菌症の診断および治療に関する研究 結核罹患率は後期高齢者以外の年代では低下の一途であるが、非結核性抗酸菌感染症は中高年の女性を中心に罹患数が増加している。非結核性抗酸菌症は薬剤に対する感受性が低く、治療に難渋することが多い。このため、標準的な治療が実施できない症例におけるより有効な治療レジメンの検討や、本疾患類似の臨床像をとる呼吸器疾患・感染症は多いため、これらの鑑別に有用な画像所見の解析を進めている。 3. 県内における希少肺疾患の発生および受療状況の調査 希少肺疾患は情報が少ないが故に診断の付かないまま専門機関への受診に結び付いていない患者が存在する可能性がある。県内での希少肺疾患 (を疑う) 患者の実態調査を行い、肺希少疾患患者を潜在化させずに専門機関に結び付ける橋渡しシステムの構築を行っていく。
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Comparison of chest computed tomography features between pulmonary tuberculosis patients with culture-positive and culture-negative sputum for non-mycobacteria: A retrospective observational study. Kan T, Komiya K, Yamasue M, et al. <i>Medicine (Baltimore)</i>. 2021 Aug 6;100(31):e26897. 2. Quantitative assessment of the association between erector spinae muscle and in-hospital mortality in elderly patients with pulmonary tuberculosis. Tanaka A, Komiya K, Yamasue M, et al. <i>BMC Res Notes</i>. 2021 Apr 13;14(1):134. 3. A solitary pulmonary nodule caused by <i>Mycobacterium tuberculosis</i> var. BCG after intravesical BCG treatment: a case report. Itai M, Yamasue M, et al. <i>BMC Pulm Med</i>. 2021 Apr 7;21(1):115. 4. The COVID-19 pandemic and the true incidence of Tuberculosis in Japan. Komiya K, Yamasue M, et al. <i>J Infect</i>. 2020 Sep;81(3):e24-e25. 5. Features of active pulmonary tuberculosis without abnormal chest X-ray findings. Matsumoto H, Komiya K, Yamasue M, et al. <i>Infect Dis (Lond)</i>. 2020 Jul;52(7):520-523. 6. Factors associated with false negative interferon-γ release assay results in patients with tuberculosis: A systematic review with meta-analysis. Yamasue M, Komiya K, et al. <i>Sci Rep</i>. 2020 Jan 31;10(1):1607. 7. Effect of long-term clarithromycin therapy on prevention of pneumonia in older adults: A randomized, controlled trial. Yamasue M, Komiya K, et al. <i>Geriatr Gerontol Int</i>. 2019 Oct;19(10):1006-1009.

所属・職位	医学部医学科 呼吸器・感染症内科学講座（講座）・講師		
氏名	吉川 裕喜（ローマ字表記 Hiroki Yoshikawa）		
取得学位	博士（医学）、大分大学、2021年6月		
SDGs目標		<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください</p>	

研究分野	医学
研究キーワード	呼吸器、感染症、肺炎、細菌感染、気道炎症
研究内容	<p>●高齢者肺炎における予後因子に関する研究 高齢者肺炎の生命予後因子として、体幹を保持してADLに関与する脊柱起立筋（erector spinae muscles: ESM）に注目しました。高齢者肺炎の入院患者を対象として胸部CTを用いてESMの断面積を評価し、ESMが小さいと死亡率が高まることを証明しました（Yoshikawa H, et al. Quantitative assessment of erector spinae muscles and prognosis in elderly patients with pneumonia. Sci Rep. 2021; 11: 4319.）。</p> <p>●気道炎症においてマクロライド系抗菌薬の抗炎症効果に関する研究 肺炎の既往のある高齢者を対象とした後ろ向き研究において、マクロライド系抗菌薬の少量長期投与により肺炎再発が抑制されることを示しました（Yoshikawa H, et al. Long-term macrolide antibiotic therapy may prevent the development of pneumonia in the elderly. J Palliat Med. 2014; 17: 749-50）。実験系ではマクロライド系抗菌薬がマウス由来マクロファージ様細胞からの炎症性サイトカインの放出を抑制することを示しました。</p>
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・Yoshikawa H, Komiya K, Goto A, Umeki K, Hiramatsu K, Kadota JI. Factors associated with changes in activities of daily living from admission to discharge among older patients with pneumonia. J Infect Chemother. 2024 Feb;30(2):129-133. ・Yoshikawa H, Komiya K, Yamamoto T, Fujita N, Oka H, Okabe E, Yamasue M, Umeki K, Rubin BK, Hiramatsu K, Kadota JI. Author Correction: Quantitative assessment of erector spinae muscles and prognosis in elderly patients with pneumonia. Sci Rep. 2021 Aug 12;11(1):16773. ・Yoshikawa H, Komiya K, Hamanaka R, Hiramatsu K, Kadota JI. Dementia as a risk factor for aspiration in patients with COVID-19. Geriatr Gerontol Int. 2021 Aug;21(8):757-758. ・吉川裕喜、門田淳一. 呼吸器感染症診療の最前線-症例から学ぶエキスパートの視点-慢性下気道感染症（副鼻腔気管支症候群を含む）の病態、診断、治療. 呼吸器ジャーナル 68 (2), 172-178, 2020. ・吉川裕喜, 門田淳一. 特集 今日のマクロライド療法 慢性下気道炎症とマクロライド療法 有効性のメカニズムと無効例への対策. 呼吸器内科 38 (1), 19-24, 2020.

所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・助教	
氏名	赤瀬 広弥 (AKASE HIROYA)	
取得学位	修士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標	15 陸の豊かさも守ろう	

研究分野	整形外科学
研究キーワード	人工膝関節、内側広筋、変形性膝関節症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●人工膝関節全置換術の治療成績に関する研究</p> <p>人工膝関節全置換術は変形性膝関節症に対して効果的な鎮痛効果があり良好な成績が見込まれる治療であるが2割に不満足例が存在するとされる。そのため、治療成績に影響する因子について当院での手術症例データを基に調査している。</p> <p>人工膝関節全置換術後の脛骨回旋評価における基準軸の検討. 日本人工関節学会誌. 52. 575-576; 2022</p> <p>アジア人向け人工膝関節の臨床成績. 別冊整形外科. 83. 118-21; 2023</p> <p>●内側広筋筋枝に関する研究</p> <p>解剖献体を用いて内側広筋筋枝の走行について調査中である。内側広筋は膝伸展及び膝蓋骨安定性に重要な働きを有しているため、解剖学的知見から膝手術における内側広筋機能を阻害しないような手技の確立を目指している。</p>

所属・職位	医学部医学教育センター・助教	
氏名	秋好 久美子 (Akiyoshi Kumiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2007年3月	
SDGs目標	3 すべての人に健康と福祉を 4 質の高い教育をみんなに	

研究分野	循環器学
研究キーワード	医学教育、心臓リハビリテーション、高血圧、動脈硬化、予防医学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢化社会や格差社会を始めとする様々な社会のニーズに対応できる医療者育成のための教育プログラムに関する研究 ・ 幼少期からの心血管疾患予防の啓発活動として学童向けのセミナーの開催や、動画作成、YouTubeへの配信などを行っている。 <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Akiyoshi K, et al. AT1 receptor blockade prevents microvascular dysfunction induced by ischemia/reperfusion injury. J Atheroscler Thromb. 2006; 13 (5): 231-239. 2. 秋好久美子、中川幹子、山本恭子、高橋尚彦 「会話型シナリオを用いて診断プロセスを学ぶチュートリアル教育の試み」 大分大学教育マネジメント機構紀要 第2号, 2023. (in press) 3. 秋好久美子、山本恭子、高橋尚彦、中川幹子 「心臓リハビリテーション卒前教育における症例動画視聴の有用性 に関する検討」 大分大学教育マネジメント機構紀要 第1号, 2022 4. 秋好久美子、中川幹子、高橋尚彦 「大分大学医学部学生における心臓リハビリテーションに対する意識調査」 日本心臓リハビリテーション学会誌 心臓リハビリテーション, 26 (3/4) : 383-388, 2020. <p>アピールポイント</p> <p>医療者の育成だけでなく、現代社会における格差のないウェルビーイングの実現、および将来を担う世代のウェルビーイングの実現を目指して活動している。</p>

医学部

所属・職位	医学部 医学科 整形外科科学講座・助教	
氏名	阿部 徹太郎 (Abe Tetsutaro)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標	3 すべての人に健康と福祉を 	

研究分野	脊椎脊髄病学
研究キーワード	骨粗鬆症、脊椎骨癒合、脊椎アライメント
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●脊椎骨癒合に関する研究</p> <p>人口の高齢化が進むに従い、インプラントを用いた脊椎固定術が増加している。良好な結果を得るためには椎体間の骨癒合が重要となる。ラッドを用いた関津港側方固定モデルを用い、最適な骨癒合促進剤の使用方法等について検討を進めている。</p> <p>(Abe T, et al. Optimal intermittent administration interval of parathyroid hormone 1-34 for bone morphogenetic protein-induced bone formation in a rat spinal fusion model. JOR Spine. 2021 Aug 18;4(3):e1168)。</p> <p>●脊椎アライメントに関する研究</p> <p>手術侵襲に伴い、術後経過中に脊柱後弯症等の脊椎アライメント変化が生じる危険性がある。実際の症例を参照にアライメント変化の危険因子を明らかにし、予防策等について検討を行っている。</p> <p>(Abe T, et al. Analysis of the risk factors for increasing cervical sagittal vertical axis after cervical laminoplasty for cervical spondylotic myelopathy. Arch Orthop Trauma Surg. 2022 Apr;142(4):553-560)。</p>

所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座・助教	
氏名	阿部 世史美 (Abe Yoshimi)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標	3 すべての人に健康と福祉を 11 住み続けられるまちづくりを  	

研究分野	看護学
研究キーワード	摂食嚥下障害、フレイル、オーラルフレイル、高齢者、頭頸部がん
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●口腔がん術後摂食嚥下障害高齢者の退院後の経験</p> <p>口腔がん術後に摂食嚥下障害のある状態で自宅退院した高齢者を対象に、退院後の経験を明らかにした。退院後、口腔機能の低下、活動耐性の低下などの課題があるが、対応には高齢者のレジリエンスが活かされていた。</p> <p>●頭頸部がんで放射線化学療法を受ける患者の栄養管理の検討</p> <p>●頭頸部がん化学放射線療法における誤嚥性肺炎リスク因子の検討</p> <p>化学放射線療法施行患者の栄養管理方法や誤嚥性肺炎リスク因子を検討した。リスク因子として、栄養状態や口腔機能の低下、また咽頭知覚の低下による不顕性誤嚥があり、栄養管理や口腔ケアの重要性が明らかになった。</p>

医学部

所属・職位	医学部 医学科 小児科学講座・助教	
氏名	糸永 知代 (Itonaga Tomoyo)	
取得学位	学士(医学)、熊本大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児内分泌学
研究キーワード	成長、思春期、性分化
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●21水酸化酵素欠損症に関する研究</p> <p>21水酸化酵素欠損症は、副腎という臓器から作られる「ステロイドホルモン」が生まれつき不足する病気です。しかし、治療に使用している薬の調整はとても難しく、特定の検査項目のみを目安として調整をできるかどうかはまだわかっていません。</p> <p>この病気では、治療薬が足りないと女性の患者さんで男性化が起きたり、思春期が早く来すぎたりということが起きます。適切な治療の調整方法を見つけるための研究をしています。特に、小児の患者さんから苦痛なく集めることができる尿を用いた検査が役に立たないかを調べています(論文1. Itonaga T et al. Frontiers in Endocrinology)。</p>

所属・職位	医学部 医学科 精神神経医学講座・助教	
氏名	井上 綾子	
取得学位	学士(医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学
研究キーワード	緩和ケア
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>今迄緩和ケアチーム、リエゾン、認知症ケアチーム等のチーム活動や学会などでの活動が主体でしたが、助教になったことをきっかけに研究にも力を入れていきたいと考えており、「1週間の実存的アプローチが、緩和ケアの進行がん患者の死生観の形成に役立ち、穏やかな死を迎える準備が出来るか」というテーマの研究を申請中です。</p> <p><研究業績></p> <ul style="list-style-type: none"> Hirakawa H, Terao T, Inoue A. Warning of cancer by the sensation of octopus tentacles in the mouth. Aust N Z J Psychiatry. 52(4):389-390. 2018. Sakai A, Terao T, Kawano N, Akase M, Hatano K, Shirahama M, Hirakawa H, Kohno K, Inoue A, Ishii N. Existential and Mindfulness-Based Intervention to Increase Self-Compassion in Apparently Healthy Subjects (the EXMIND Study): A Randomized Controlled Trial. Front Psychiatry. 10:538. 2019.

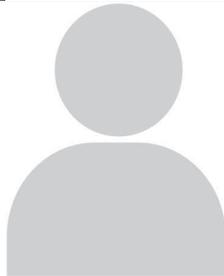
医学部

所属・職位	医学部 医学科 消化器内科学講座・助教	
氏名	岩尾 正雄 (Iwao Masao)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学 (消化器内科学)
研究キーワード	NAFLD、NASH、腸内細菌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：NAFLDと腸内細菌との関連性について</p> <p>研究業績：非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) は、肥満の有病率の劇的な増加に伴い、重大な公衆衛生上の問題となっています。NAFLDの病因の一つに腸内細菌叢が挙げられており、私達は食餌誘導性肥満モデルのラットを用いた実験結果から、分岐鎖アミノ酸 (BCAA) の投与で腸内細菌として <i>R. flavefaciens</i> が増加し、増加した <i>R. flavefaciens</i> がセルロースを基質として酢酸を産生し、その酢酸が肝細胞のAMPKを活性化し、脂肪合成関連遺伝子であるFASやACCの発現を抑制し、肝での脂肪合成を抑制し、肝の脂肪化が改善することを報告しました¹⁾。</p> <p>BCAAは肝硬変症などの治療薬ですすでに広く普及している薬剤でありヒトのNAFLDにおいても薬物治療の選択肢の一つとなれば、近年増加傾向を示しているNAFLDの改善に寄与して、多くの人々の健康に寄与できる可能性があります。</p> <p>1) : Masao Iwao, Koro Gotoh, Kazunari Murakami, Hirotaka Shibata, et al. Supplementation of branched-chain amino acids decreases fat accumulation in the liver through intestinal microbiota-mediated production of acetic acid. <i>Scientific Reports</i>. 2020. 10 (1), 18768. doi: 10.1038/s41598-020-75542-3.</p>

所属・職位	医学部 医学科 生物物理学講座・助教	
氏名	岩城 貴史 (Iwaki Takafumi)	
取得学位	博士 (理学)、京都大学、2004年3月	
SDGs目標	  	

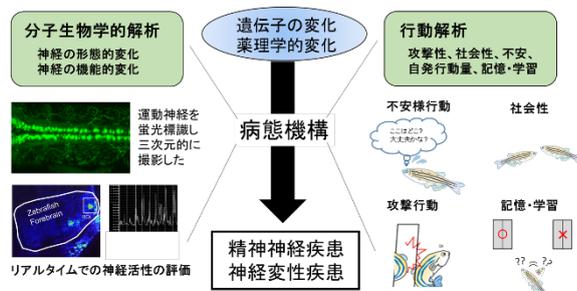
研究分野	生物物理学
研究キーワード	DNA, polyelectrolyte, flow fields, interfacial phenomena, data analysis
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> - DNA高次構造の流体場に対する応答についての研究 マイクロプールの希薄DNA溶液に圧力をかけてマイクロ流路に押し出すとき、流路の入り口付近の流れ場は伸長流となり、DNA一分子の引き延ばしが観測される。これはDNAを手軽に引き延ばす手法と期待され、そのメカニズムを研究している[1]。 - 物理学実験教育のデジタルイゼーションと学内共通基盤の構築 近年デジタルトランスフォーメーションが叫ばれ、大学教育の現場にもその波が押し寄せつつある。 物理学実験のデジタルイゼーションと解析結果評価システムの構築に学内の物理学実験教育担当の先生方と協力して取り組んでいる[2]。 <p>[1] Stretching of single DNA Molecules caused by accelerating flow on a microchip, K. Hirano, T. Iwaki, T. Ishido, Y. Yoshikawa, K. Naruse, K. Yoshikawa, <i>JCP</i> 149, 165101 (2018)</p> <p>[2] 実験データに基づいて解析結果を評価できるe-learningシステム、長屋智之、菊池武士、片山武夫、北西滋、岩城貴史、近藤隆司、<i>工学教育</i>、70-2, 53-58 (2022) in press.</p>

所属・職位	医学部 医学科 附属地域医療学センター・助教	
氏名	宇都宮 理恵 (Utsunomiya Rie)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

研究分野	内科学、地域医療
研究キーワード	総合診療、地域医療、高齢者医療、感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	① 外来診療における血液培養陽性者の予測因子分析 ② 終末期・高齢者医療についての学生・研修医の意識調査研究 ③ 医師の外来診療における高齢者フレイル予防に関する実態

所属・職位	医学部 先進医療科学科 臨床医工学コース・助教	
氏名	梅田 涼平 (Umeda Ryohei)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

研究分野	生理学、神経科学、病態生理学、行動生理学
研究キーワード	生理機能解析、in vivoモデル、遺伝子改変ゼブラフィッシュ、病態モデル、行動解析、形態学的解析
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● 遺伝子改変ゼブラフィッシュを用いた神経変性疾患、精神神経疾患における病態機構の解明と創薬基盤の開発</p> <p>神経変性疾患や精神神経疾患の関連分子を中心として遺伝子改変ゼブラフィッシュや遺伝子欠損ゼブラフィッシュを作製し生理学的、生化学的、形態学的手法を用いて標的分子の新たな生理機能を解析する。</p> <p>【代表論文】* 責任著者</p> <ol style="list-style-type: none"> Umeda R, *Tokumar O <i>et al.</i> <i>J Clin Biochem Nutr.</i> 64, 20-26. 2019. Umeda R, *Hanada R <i>et al.</i> <i>Genes Cells.</i> 27, 254-265. 2022. Umeda R, *Hanada R <i>et al.</i> <i>BBRC.</i> 675, 10-18, 2023. <p>【ホームページ】 http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri1/</p>



医学部

所属・職位	医学部 看護学科 実践看護学講座・助教	
氏名	江藤 千晴 (Etou Chiharu)	
取得学位	修士 (看護学)、佐賀大学、2008年3月	
SDGs目標	    	

研究分野	臨床看護学, 小児看護学, 家族看護学
研究キーワード	家族 障害児・者
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. 2014年, 学外組織, 災害看護学実習にエマルゴトトレーニングシステム・集団災害訓練を導入した学習効果, 活水論文集 第2集, 2014年</p> <p>2. 2019年, 学内単一組織, 看護学生が捉える“子どもの甘え”, 九州・沖縄小児看護研究会誌, 2019年</p> <p>科学研究費補助金 課題: AYA世代重症心身障害児・者の家族が抱く養育における介護負担感への支援策の検討, 2021~ 2023, 代表</p>

所属・職位	医学部総合診療・総合内科学 (講座) ・助教	
氏名	衛藤 祐樹 (Yuki Eto)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年3月	
SDGs目標	  <div style="border: 1px solid green; padding: 5px; display: inline-block;"> リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください </div>	

研究分野	総合診療、家庭医療
研究キーワード	家庭医療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●家庭医クリニックに対するかかりつけ医の認識とQOLとの関連：横断研究</p> <p>近年、複数の慢性疾患や医療・介護の複合的ニーズを抱える高齢者の増加により、「治す医療」から「治し、支える医療」への転換が求められている。先行研究では、ケアの継続性と死亡率の低下の関連性やかかりつけ医を持つことが精神的QOL (Quality of Life) の向上との関連性などを示した報告もある。家庭医は、すべての年齢層における予防医療、多疾患併存、心理社会的要因、家族背景を含む包括的な健康課題に対応する。家庭医はプライマリ・ケアの現場でかかりつけ医としての活躍も期待されているが、家庭医療専門医は日本では数として限られている。かかりつけ医が家庭医療専門医である場合の患者アウトカムへの影響は明らかでない。本研究の目的は、家庭医療専門医が所属するクリニックを「家庭医クリニック」と定義し、患者の家庭医クリニックに対するかかりつけ医としての認識とQuality of Life (QOL) との関連を調査する。</p>

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・助教		
氏名	尾石 友子 (Oishi Tomoko)		
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2014年3月		
SDGs目標			

研究分野	産科婦人科学
研究キーワード	子宮内膜症、生殖医学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●子宮内膜症の病態解明と新規治療薬の開発</p> <p>子宮内膜症は、生殖年齢の女性の約10%にみられ、強い月経痛や不妊症の原因となる疾患である。その発症メカニズムは完全には解明されておらず、根治的治療も確立されていない。近年、子宮内膜症は「異所性子宮内膜腺と間質細胞を伴う病的線維症」と再定義されつつある。そこで我々は子宮内膜症の線維化の機序に着目し、標的分子の解明や局在解析を行う予定である。また、子宮内膜症間質細胞の機能喪失実験および正常子宮内膜間質細胞の機能獲得実験 (in vitro) を計画している。さらに、脱落膜化薬および抗線維化薬が、子宮内膜症の線維化を抑制するかを検証する (in vivo)。</p>

所属・職位	医学部 医学科呼吸器・感染症内学講座・助教		
氏名	大森 翔太 (Omori Shota)		
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2009年4月		
SDGs目標			

研究分野	胸部腫瘍学
研究キーワード	肺癌、免疫組織化学染色、化学放射線療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●腫瘍細胞に発現する分子 (PD-L1、TRIP2、B7-H3) に関する研究</p> <p>肺癌の治療前後の病理組織を用いて分子の発現変化を評価した。研究結果は薬剤開発の一助となっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> Omori S, et al. <i>Int J Clin Oncol</i>. 2018 / Omori S, et al. <i>J Cancer Res Clin Oncol</i>. 2022 / Omori S, et al. <i>Invest New Drugs</i>. 2023 <p>●化学放射線療法の治療開発</p> <p>局所進行期の非小細胞肺癌を対象に化学放射線療法の前向き臨床試験を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> Omori S, et al. <i>Invest New Drugs</i>. 2022 / Harda H, Omori S, et al. <i>Int J Clin Oncol</i>. 2022 / Shimoyama R, Omori S, et al. <i>Jpn J Clin Oncol</i>. 2021 関連リンク : https://jcog.jp/document/1914.pdf (JC0G1914 protocol)

医学部

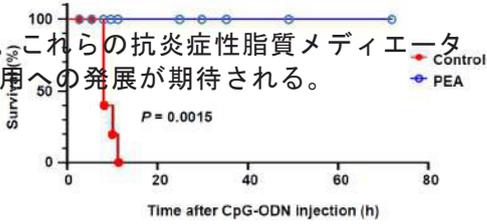
所属・職位	医学部 医学科 感染予防医学講座・助教		
氏名	岡本 将明 (Masaaki Okamoto)		
取得学位	博士 (医学)、北海道大学、2016年3月		
SDGs目標		<p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p> 	

研究分野	免疫学
研究キーワード	がん免疫、自己免疫疾患、感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>遺伝子改変マウスを用いた、種々の疾患における免疫機構の役割に関する研究</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. IFN-γ-induced Th1-Treg polarization in inflamed brains limits exacerbation of experimental autoimmune encephalomyelitis. Okamoto M, Kuratani A, Okuzaki D, Kamiyama N, Kobayashi T, Sasai M, Yamamoto M (<i>PNAS</i>, 2024) 2. Platelet factor 4-induced TH1-Treg polarization suppresses antitumor immunity. Kuratani A, Okamoto M, Kishida K, Okuzaki D, Sasai M, Sakaguchi S, Arase H, Yamamoto M (<i>Science</i>, 2024) 3. A genetic method specifically delineates Th1-type Treg cells and their roles in tumor immunity. Okamoto M, Sasai M, Kuratani A, Okuzaki D, Arai M, Wing J B, Sakaguchi S, Yamamoto M (<i>Cell Rep.</i>, 2023) <p>Uncovering a novel role of PLCβ4 in selectively mediating TCR signaling in CD8+ but not CD4+ T cells. Sasai M, Ma J S, Okamoto M, Nishino K, Nagaoka H, Takashima E, Pradipta A, Lee Y, Kosako H, Suh P G, Yamamoto M (<i>JEM</i>, 2021)</p>

所属・職位	医学部 医学科 感染予防医学講座・助教		
氏名	小坂 聡太郎 (Ozaka Sotaro)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月		
SDGs目標			

研究分野	消化器病学、免疫
研究キーワード	炎症性腸疾患、バイオマーカー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●炎症性腸疾患の新規バイオマーカーの開発に関する研究</p> <p>潰瘍性大腸炎やクローン病で代表される炎症性腸疾患 (IBD) は難治性の消化管疾患です。IBDは病気の活動性に応じて治療が選択されます。そのためIBDの活動性を簡便に把握できるバイオマーカー (病気の強さを反映する血液や便の中の特定の物質) の開発が求められています。私は以前、分泌型好中球プロテアーゼ阻害分子 (SLPI) というタンパクがIBDモデル動物の腸炎を改善することを報告しました (論文1)。そこで現在はこのSLPIがヒトIBD患者の活動性に応じて血液中や便中で増減し、それを測定することで活動性を把握するバイオマーカーに利用できないか研究をしています。</p> <p>(参考論文) Ozaka. S et al. Protease inhibitory activity of secretory leukocyte protease inhibitor ameliorates murine experimental colitis by protecting the intestinal epithelial barrier. <i>Genes Cells</i>. 2021.</p>

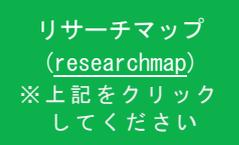
所属・職位	医学部 医学科 内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座・助教	
氏名	尾崎 貴士 (Ozaki Takashi)	
取得学位	学士(医学)、熊本大学、2006年3月	
SDGs目標	 	

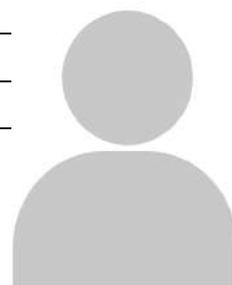
研究分野	膠原病学、免疫学
研究キーワード	脂質メディエーター、PEA、OEA、Toll様受容体、炎症、全身性エリテマトーデス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●全身性エリテマトーデス (SLE) の炎症病態に対する抗炎症性脂質メディエーターPEA、OEAの研究 (若手研究18K16155、若手研究 (B) 15K19577)</p> <p>液体クロマトグラフ・質量分析計を用いてSLEモデルマウスの体内に存在する脂質メディエーターを解析し、パルミトイルエタノールアミド (PEA) やオレオイルエタノールアミド (OEA) の濃度が野生型マウスに比べて有意に低下していることを見出した。また、マウス樹状細胞やB細胞において、PEAやOEAは、SLEに関連するToll様受容体9 (TLR9) 刺激を介する炎症性サイトカイン産生や細胞表面マーカー発現を抑制した。さらに、CpG-ODN (TLR9リガンド) を用いた敗血症モデルマウスは、PEAを投与することで生命予後が著明に改善することを見出した (右図、in preparation)。これらの抗炎症性脂質メディエーターは、自己免疫疾患や炎症性疾患に対する治療応用の発展が期待される。</p>
	

所属・職位	医学部医学科診断病理学講座・助教	
氏名	小山 雄三 (Oyama Yuzo)	
取得学位	博士(医学), 大分大学, 2020年3月	
SDGs目標		

研究分野	人体病理学
研究キーワード	診断病理学, 唾液腺腫瘍, 皮膚腫瘍, 腎生検の病理
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容 病理組織像, 免疫染色, FISH法, 分子病理学的手法を駆使して, 病理診断, 病理学研究に従事している。近年ではWNTシグナル, ALPK1遺伝子に注目し, それらの経路, 遺伝子異常に関わる腫瘍発生の研究を行っている。</p> <p>研究業績 ① Difference in transducin-like enhancer of split 1 protein expression between basal cell adenomas and basal cell adenocarcinomas – an immunohistochemical study. Diagn Pathol. 2018 Jul 27;13(1):48. Short 57 kb CDKN2A FISH probe effectively detects short homozygous deletion of the 9p21 locus in malignant pleural mesothelioma. Oncol Lett. 2021 Dec;22(6):813.</p>

医学部

所属・職位	医学部 医学科 法医学講座・助教		
氏名	貝森 峻 (Ryo Kaimori)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2025年3月		
SDGs目標			



研究分野	法医学 人体病理学 (循環器病理学 神経病理学 加齢病理学)
研究キーワード	突然死 心筋症 心筋炎 感染症 神経変性疾患 非腫瘍性疾患病理学 法医診断学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none">●心筋症とくに肥満心筋症に関する研究 肥満や心外膜脂肪沈着に伴う、心筋の病理学的変化および死因との関連についての研究●動脈硬化、血管病変に関する研究 動脈硬化やCharcot-Buchart動脈瘤の形態、疫学的研究●加齢に伴う炎症及び組織学的変化 Inflammagingの組織学的、疫学的研究●急性経過をたどったCOVID-19死亡例の病理学的研究 COVID-19罹患後急性な転帰をたどった剖検例について、病理学的・ウイルス学的・免疫学的に検討している。●希少疾患剖検例の詳細な病理学的検討 剖検で診断された稀少疾患についての病理学・超微形態学的検討 (文献) Kaimori R et al. Cardiovasc Diabetol. 2024 Oct 24;23(1) Kaimori R et al. J Neuropathol Exp Neurol. 2024 Apr 19;83(5):370-373. Kaimori R et al. Thromb J. 2022 Oct 6;20(1):61.

医学部

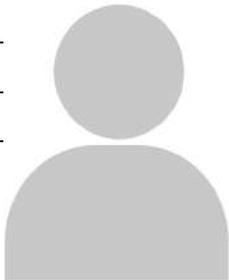
所属・職位	医学部 看護学科 基盤看護学講座 地域看護学領域・助教	
氏名	金崎 理子 (Kanezaki Ayako)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	保健師、児童虐待、母子保健活動
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●子どもの不適切な養育に対する小児科外来看護職の認識・行動に関する研究（平成30年度修士論文）</p> <p>小児科外来に勤務する看護職を対象に質問紙調査を実施し、外来受診する親子のどのような様子に対して不適切な養育環境を認識し行動するのか、その実態を把握し、さらには看護職の背景要因との関連について統計的手法を用いて明らかにすることを目的とした。</p> <p>小児科外来看護職は、子どもの言動より親の言動を重視しやすい傾向にあること、子どもの愛着形成状況のアセスメントや親への対応については困難感を抱きやすいことが明らかになった。</p>

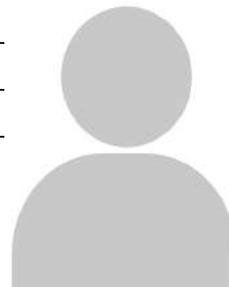
所属・職位	医学部医学科 呼吸器乳腺外科学講座・助教	
氏名	鎌田 紘輔 (Kamada Kosuke)	
取得学位	なし	
SDGs目標	 <div style="border: 1px solid green; padding: 5px; display: inline-block; text-align: center;"> リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください </div>	

研究分野	呼吸器外科学
研究キーワード	肺癌、胸部悪性腫瘍
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●肺区域切除術における術中、術後エアーリークの発生及び術後経過についての研究</p> <p>区域切除では肺実質の切離面が広くなることから、葉切除と比較して術後肺合併症の増加が懸念される。肺野末梢小型肺癌に対する積極的縮小手術のエビデンスを受け、今後区域切除が広く行われるようになると考えられるため、更なる研究が必要である。</p>

医学部

所属・職位	医学部看護学科基礎看護学講座・助教	
氏名	河野 修 (Kawano Osamu)	
取得学位	修士(看護学)、熊本大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	看護学
研究キーワード	精神看護、看護実践能力、退院支援
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●長期入院患者の退院支援における看護ケアと精神科看護師の看護実践能力の関連, 第24回日本精神保健 保健看護学会, 2014, 6月学会発表

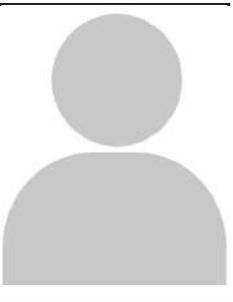
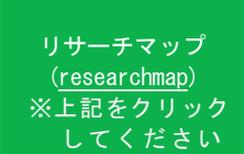
所属・職位	医学部医学科大分こども急性救急疾患学部門医療・研究事業・助教	
氏名	河野 暢之 (Kawano Nobuyuki)	
取得学位	学士(医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標		

研究分野	小児科学
研究キーワード	新生児
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●特発性血小板減少性紫斑病合併妊婦から出生した新生児の新生児血小板減少症を発症するリスク因子の解析 特発性血小板減少性紫斑病合併妊婦とその出生児について検討することで、特発性血小板減少性紫斑病合併妊婦から出生した新生児の新生児血小板減少症を発症するリスク因子を明らかにすることを目的としています。

医学部

所属・職位	医学部 医学科 病理診断学講座・助教	
氏名	川村 和弘 (Kawamura Kazuhiro)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2020年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	人体病理学
研究キーワード	人体病理、口腔病理
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●口腔扁平上皮癌の腫瘍増殖因子に関する研究 Kazuhiro Kawamura et al.: Activation of the RAS/ERK signaling pathway by RASAL1 and its clinical significance in squamous cell carcinomas of the tongue. J Oral Maxillofac Surg Med Pathol 2020;32:400-5.</p> <p>●口腔細胞診の有効性に関する研究 Kazuhiro Kawamura, et al.: Scraping cytology for detection of atypical cells in the oral mucosa. 9th Annual conference and joint scientific meeting. 2019.2.1-3 Dhulikhel, Nepal.</p>

所属・職位	医学部おおいた地域医療支援システム構築事業(小児科分野担当)・助教	
氏名	清田 今日子 (Kiyota Kyoko)	
取得学位		
SDGs目標	  	

研究分野	小児科学
研究キーワード	SLE、PIK3CD、PI3K/Akt/mTORC
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●PIK3CD新規遺伝子変異に関する研究 SLE発症した新規PIK3CD遺伝子変異が機能獲得型変異であるかを細胞株を用いて実験をしている。 この結果により、PIK3CD遺伝子変異により自己免疫性疾患が生じやすい機序を解明する。</p>

所属・職位	医学部 医学科 解剖学講座・助教	
氏名	久保 修一 (Kubo Shuichi)	
取得学位	博士 (生命科学)、鳥取大学、2020年9月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

研究分野	解剖学、分子生物学
研究キーワード	ピロリ菌、炎症性発癌、胃がん
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● <u>ピロリ菌感染による炎症性発癌機序の解明</u></p> <p>ピロリ菌、特に菌体から胃粘膜上皮細胞へ注入されるCagAと呼ばれる毒素蛋白質をもつピロリ菌は、慢性胃炎から胃癌へと進展する、炎症を基盤とした強い発癌活性を示します。本研究では「炎症に密接に関与する生理活性物質」に着目し、CagAをもつピロリ菌感染によって生じる炎症を基盤とした発癌過程の解明を目指します。</p> <p>● <u>研究業績</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Ninomiya R, <u>Kubo S</u> et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. BBRC. 556, 192-198. 2) <u>Kubo S</u> et al (2020) Oct motif variants in Beckwith-Wiedemann syndrome patients disrupt maintenance of the hypomethylated state of the H19/IGF2 imprinting control region. FEBS letters. 594, 1517-1531. 3) Morita M et al (2020) Biology open. 9. <p>Hori N, <u>Kubo S</u> et al (2020) Gene. 743, 144606-144606.</p>

所属・職位	医学部 医学科 生理学講座・助教	
氏名	桑 慎一郎 (Kume Shinichiro)	
取得学位	博士 (理学)、総合研究大学院大学、2016年10月	
SDGs目標	   3 すべての人に健康と福祉を 4 質の高い教育をみんなに 9 産業と技術革新の基盤をつくろう	

研究分野	電気生理学、分子生理学
研究キーワード	イオンチャネル
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● <u>イオンチャネル分子の構造と機能の関係性に関する研究</u></p> <p>心臓の規則正しい拍動には、電気信号による調節が不可欠です。この電気信号は心筋内外でのイオンの移動により生じており、イオンチャネルという分子群が担っています。例えば、突然変異でイオンチャネルの分子構造が変化すると、その正常な機能が維持できず、結果的に不整脈などの心疾患を引き起こします。</p> <p>私はこれらのイオンチャネルのうち、特に電位作動性K⁺チャネルの1つであるhERGチャネルに焦点を当てた研究をしています (論文1)。イオンの移動を電流として測定できるパッチクランプ法や、分子の構造変化を光の変化として測定できるFRET法、また、遺伝子工学などの技術を駆使して、このチャネルの構造と機能の関係性を解明することで、心疾患の予防や治療に貢献したいと考えています。1: <u>Kume S</u> et al., J Physiol. 596, 4629-4650 (2018)</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科救急医学講座・助教	
氏名	黒澤 慶子 (Kurosawa Keiko)	
取得学位	学士 (医学), 大分大学, 2009年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	救急医学 災害医療 外傷学 中毒学
研究キーワード	Preventable trauma death 熱中症 中毒
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>救急外来にて診療する疾患を中心に研究しております。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外傷初期診療における適正輸血量の検討 ・熱中症の発生要因と治療法に関する研究 ・薬物中毒をはじめとする急性中毒例の診断法・治療法の確立を目指す研究 ・救急医育成プログラムの検討

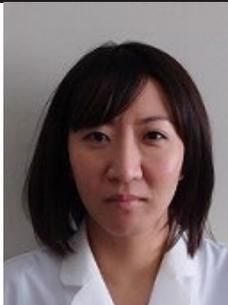
所属・職位	医学部医学科小児科学講座・助教	
氏名	後藤 洋徳 (Goto Hironori)	
取得学位	学士 (医学部)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; text-align: center;"> <p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください</p> </div> 	

研究分野	小児科学
研究キーワード	小児科学、小児血液がん、白血病
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>(科学研究費)</p> <p>若手研究課題『小児・AYA世代AMLにおけるヒストン修飾に着目した予後因子の確立と治療開発』(2020年4月～)</p> <p>基盤研究C『小児AYA世代の白血病治療に対するヒストン脱メチル化阻害薬治療の実装化を目指す』(2023年4月～)</p> <p>(論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Goto H, Hirano N, Inoue M, Takano K, Ogata M, Kishida T, Arakane M, Daa T, Nishida Y, Suenobu S, Ihara K. Immune escape by loss of heterozygosity of HLA genes facilitated the transmission of diffuse large B cell lymphoma from mother to offspring. <i>British Journal of Haematology</i>, 2020, 189, e222-e265. 2. Goto H, Hirano N, Kadowaki H, Suenobu S, Ihara K. Clinical features of infantile subcutaneous panniculitis-like T-cell lymphoma. <i>Pediatr Int</i>. 2019 Dec;61(12):1261-1262. 3. Goto H, Kimura M, Hirano N, Suenobu S, Ihara K. NUP98-HOXC13 fusion gene in acute myeloid leukemia: Pediatric case. <i>Pediatr Int</i>. 2017 Oct;59(10):1105-1106.

医学部

所属・職位	医学部医学科皮膚科学講座・助教	
氏名	齊藤 華奈実 (SAITO KANAMI)	
取得学位	学士(医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野	乾癬、掌蹠膿疱症、臨床皮膚免疫学
研究キーワード	乾癬、掌蹠膿疱症、臨床研究
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・乾癬患者を対象とした予後、合併症、治療に関する観察研究(多施設共同研究)</p> <p>研究主幹：福岡大学 共同研究施設：九州大学皮膚科、以下31施設(2022年10月現在) http://www.med.oita-u.ac.jp/dermatology/research.html</p> <p>・生物学的製剤を含む全身性治療薬の適応候補となる乾癬患者を対象とした多施設共同オープンレジストリ(PSOLAR)</p> <p>研究依頼者： Janssen Scientific Affairs, LLC, Medical Affairs, USA Janssen-Cilag International N.V, Belgium.</p> <p>・日本における掌蹠膿疱症(PPP)の治療パターン、疾病負担及び治療アウトカムのレジストリ試験(ProPUP)</p> <p>研究依頼者：ヤンセンファーマ株式会社</p>

所属・職位	医学部医学科麻酔科学講座 助教	
氏名	佐々木 美圭	
取得学位	学士(医学)、熊本大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学
研究キーワード	麻酔、周術期禁煙、緩和医療、ペインクリニック
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ポータブル型パルスCOオキシメータを用いた周術期禁煙指導の有効性の検討</p> <p>周術期禁煙は喫煙の課題であり、手術は患者教育の機会(teachable moment; TM)の観点で禁煙の動機付けとして重要性が指摘されている。</p> <p>一般的な禁煙外来での禁煙の動機づけに呼気一酸化炭素(CO)濃度測定を用いるが、パルスオキシメータによる一酸化炭素濃度(SpCO)ではより侵襲的に測定可能である。周術期の禁煙指導にSpCOの測定を繰り返し行うことが喫煙者に禁煙の動機づけとなり、周術期禁煙の禁煙率やさらには長期禁煙が改善するか調査した。</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科おおいた地域医療支援システム構築事業・助教	
氏名	佐藤 亮介 (SATO RYOSUKE)	
取得学位	学士 (医学)、久留米大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野	小児科、小児循環器
研究キーワード	小児循環器
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>(業績)</p> <p>Sato R, Okanari K, Maeda T, Kaneko K, Takahasi T, Ihara K. Postinfectious Acute Disseminated Encephalomyelitis Associated With Antimyelin Oligodendrocyte Glycoprotein Antibody. <i>Child Neurology Open</i> 2017 ; 57:10:579-583</p> <p>佐藤亮介、久我修二、井原健二。 二次救急医療機関から隣県の小児集中治療室に陸路搬送を行い、救命できた劇症型心筋炎の4歳女児。日本小児救急医学会雑誌 2020年 19巻3号</p>

所属・職位	医学部 医学科 生理学講座・助教	
氏名	鹿野 健史朗 (Shikano Kenshiro)	
取得学位	博士 (学術)、広島大学、2018年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経内分泌学、内分泌代謝学、ペプチド科学
研究キーワード	神経ペプチド、エネルギー代謝、肥満
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. 中枢性エネルギー代謝調節機構の解明</p> <p>肥満の主な原因である過食は、脳の摂食中枢におけるエネルギー代謝調節機構が破綻することで生じるため、中枢性エネルギー代謝調節機構のさらなる解明が求められている。これまでの先行研究において視床下部特異的に発現する新規脳内因子に関して食欲亢進作用を有することを明らかにしてきた (研究業績1,2)。現在、この脳内因子について独自に遺伝子欠損マウスを作製し、生理機能解析を行っている。これまでに本遺伝子欠損マウスが摂食量の低下やエネルギー代謝の亢進により「痩せ」を生じさせることが判明している。今後この「痩せ」が生じるメカニズムを明らかにすることで、本因子が関与する肥満発症機構の解明や肥満症治療基盤の開発を目指したい。</p> <p>【研究業績】</p> <p>1. Shikano K et al. <i>J Endocrinol.</i> 244(1):1-12. 2020. 2. Iwakoshi-Ukena E and Shikano K et al. <i>eLife.</i> 6:e28527. 2017</p>

医学部

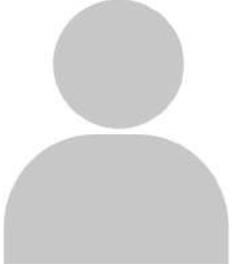
所属・職位	医学部 医学科 放射線医学講座・助教	
氏名	島田 隆一 (Shimada Ryuichi)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2002年3月	
SDGs目標		

研究分野	放射線診断学、Interventional radiology
研究キーワード	神経放射線診断、腹部放射線診断、Interventional radiology
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>それに基づいた治療戦略について国内外で発表を行ってきた (論文1.2、学会発表1-3)。 また、腹部放射線領域についても肝胆膵領域の画像診断に関する研究を行っている (論文3)。</p> <p><論文></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Shimada R, Kiyosue H, Tanoue S, Mori H, Abe T. Superior Petrosal Sinus: Hemodynamic Features in Normal and Cavernous Sinus Dural Arteriovenous Fistulas. <i>Am J Neuroradiol.</i> 2013 Mar;34(3):609-15. 2. Ide S, Kiyosue H, Shimada R, Hori Y, Okahara M, Kubo T. Selective transvenous embolization combined with balloon angioplasty of the occluded inferior petrosal sinus for the treatment of cavernous sinus dural arteriovenous fistulas. <i>Interv Neuroradiol.</i> 2021 May 6:15910199211016234. doi: 10.1177/15910199211016234. Epub ahead of print. 3. Takaji R, Yamada Y, Shimada R, Matsumoto S, Daa T, Endo Y, Inomata M, Asayama Y. Retrospective evaluation of venous phase contrast-enhanced computed tomography images in patients who developed pancreatic adenocarcinomas after treatment for nonpancreatic primary cancer. <i>BJR Open.</i> 2021 Jul 5;3(1):20200069. doi: 10.1259/bjro.20200069. eCollection 2021. <p><学会発表></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Shimada R. Anatomical evaluation of the inferolateral trunk by multiplanner reformatted images of rotational angiography: normal anatomy and pathologic features. European Congress of Radiology. Mar 6-10, 2014 Vienna, Austria. 2. Shimada R. Spontaneous carotid-superior petrosal sinus AVF in a patient with Marfan's syndrome. Sep 13-17, 2014 Glasgow, United Kingdom. <p>Shimada R. Borden type I transverse-sigmoid sinus dural arteriovenous fistulas cured by selective transvenous embolization for shunted venous pouches. May 28-30, 2015 Miyazaki, Japan.</p>

所属・職位	医学部 看護学科 基盤看護学講座・助教	
氏名	菅河原 靖子 (Sugahara Seiko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	地域看護学
研究キーワード	地域看護
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>【研究業績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・菅河原靖子、後藤奈穂、志賀たずよ、井手知恵子；運動教室後の健康づくり活動にかかわる看護援助ニーズ、第18回日本地域看護学会学術集会講演集、2015 ・菅河原靖子、岡本静香、松原麻夏他；結核の早期発見・服薬確認を軸とした患者支援体制の検討、第38回大分県看護研究学会、2015

医学部

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝膠原病腎臓内科学講座・助教	
氏名	鈴木 美穂 (Suzuki Miho)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	腎臓内科学
研究キーワード	腎臓、ポドサイト、肥満関連腎症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●肥満関連腎症における腎症進展機序とSGLT2阻害薬の効果に関する研究</p> <p>肥満関連腎症を含めた生活習慣病に関連した腎臓病は増加傾向である。多くの糸球体疾患において、さまざまな原因によって生じるポドサイト障害の持続に伴うポドサイトの脱落が糸球体硬化の主因と考えられている。肥満関連腎症進展の詳しい機序は不明であり、肥満関連腎症におけるポドサイト傷害による腎症進展機序および肥満関連腎症に対するSGLT2阻害薬のポドサイト保護効果について研究を行っている。</p>

所属・職位	医学部 総合外科 地域連携学講座 助教	
氏名	高山 洋臣 (Hiroomi Takayama)	
取得学位	医学博士、大分大学、2019年3月	
SDGs目標	 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 20px;"> <p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください</p>  </div>	

研究分野	消化器外科学、地域医療学
研究キーワード	肝胆膵外科、肥満症治療、地域医療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●肝細胞癌 (HCC) の脱分化における糖鎖変化のプロファイリング</p> <p>HCCの脱分化に関わる糖鎖変化をレクチンマイクロアレイを用いて明らかにした。高分化型HCCと比較し中分化型HCCでは高マンノース型糖鎖が増加、それに関わる糖転移酵素MGAT1の発現が低下しており、脱分化に関連している可能性が示唆された。MGAT1発現が低下している患者は全生存期間が不良であった。</p> <p>※関連リンク：https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC7060603/</p> <p>●減量・代謝改善手術における糖代謝変化の解析</p> <p>スリーブ状胃切除術ラットモデルにおける十二指腸空腸バイパス術の糖代謝における上乘せ効果を明らかにした。Alimentary limbにおけるGLUT1、SGLT1の発現が亢進しており、それが血糖改善に寄与している可能性が示唆された。</p> <p>※関連リンク：https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/30706239/</p>

医学部

所属・職位	医学部 医学科 耳鼻咽喉科学講座・助教		
氏名	高倉 苑佳 (Takakura Sonoka)		
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2015年3月		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください	

研究分野	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学、免疫・アレルギー学
研究キーワード	頭頸部癌、アレルギー性鼻炎、中耳炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>アレルギー性鼻炎に対する舌下免疫療法における結合化リピジュアの研究</p> <p>アレルギー性鼻炎の免疫療法として舌下免疫療法が現在日常診療で用いられている。しかし、舌下免疫療法では精製した抗原そのものを投与することから、投与量を増量すると効果は増すが副反応を起こすリスクが高まるため、1回に投与できる抗原量に限界がある。本研究で使用する結合化リピジュアの舌下免疫療法におけるアジュバント効果を証明できれば、抗原量を増やすことなく、舌下免疫療法の治療効果を高めることができると推測され、現行の舌下免疫療法の臨床応用とその有用性の亢進が期待される。</p> <p>研究業績</p> <p>Toshiaki Kawano, Takashi Hirano, <u>Sonoka Takakura</u>, Kazue Ito, Masashi Uraba, Kaori Tateyama, Masashi Suzuki: Her2 expression can predict the survival of patients with salivary duct carcinoma, <i>Clinical Immunology Communications</i>, 2 (2022) 149-153</p>

所属・職位	医学部 医学科 内視鏡下心臓外科学講座・助教		
氏名	田島 隆弘 (Tashima Takahiro)		
取得学位	学士 (医学) 鹿児島大学 2016年		
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください	

研究分野	低侵襲学
研究キーワード	低侵襲心臓手術、完全内視鏡下手術
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●低侵襲心臓手術に関する研究</p> <p>右肋間小開胸で行う低侵襲心臓手術を専門とし、患者への負担を最小限に抑えながら、最高水準の治療を提供することを目指しています</p>

医学部

所属・職位	医学部 医学科 人工関節学講座・助教	
氏名	田中 健誠 (Tanaka Kensei)	
取得学位	博士 (医学)、北里大学、2016年3月	
SDGs目標		

研究分野	人工関節学
研究キーワード	人工股関節、Full HA (hydroxyapatite) coated stem、有限要素解析
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●フルHAコーティング型人工股関節ステムの応力解析における研究</p> <p>近年、人工股関節置換術や人工骨頭置換術ではフルHAコーティング型ステムが広く使用されている。Depuy社が販売しているCorail®はその代表格であり、約30年の長期臨床成績が報告されている。現在では各メーカーより同タイプのステムが販売されているが、そのステム形状やコーティングの仕様は微妙に異なっている。本研究では同タイプステムの1例を対象とし、実際に生体に設置され生理的荷重を受けた状態を再現しつつ、有限要素解析にて大腿骨内の応力状態を解明することを目的としている。</p>
	
	フルHA型ステム1例

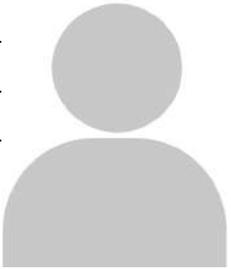
所属・職位	医学部 医学科 生理学講座・助教	
氏名	寺西 仁志 (Teranishi Hitoshi)	
取得学位	博士 (医学)、久留米大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経科学、ペプチド科学、行動実験学、病態生理学
研究キーワード	ストレス、ペプチドホルモン、遺伝子改変マウス、行動実験
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. ニューロメジンUシステムの精神・神経疾患における臨床応用を目指した研究</p> <p>現在社会はストレス社会であると言われ、過度のストレスはうつ病やPTSDなどの精神・神経疾患の誘因となる。我々は、神経ペプチドであるニューロメジンU (NMU) システムの遺伝子改変マウスを用いた行動実験により、NMUがストレス応答に深く関与していることを見出している。現在、得られた研究結果をもとに、NMUシステムを介した精神・神経疾患の詳細な病態生理機構ならびに創薬標的としてのNMUシステムの可能性について研究を進めている。</p> <p>【研究業績】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Teranishi H, Hanada R. Neuromedin U, a Key Molecule in Metabolic Disorders. <i>Int J Mol Sci.</i> 22(8) :4238. 2021 2. Teranishi H, Hanada R et al. Role of neuromedin U in accelerating of non-alcoholic steatohepatitis in mice. <i>Peptides.</i> 99 :134-141. 2018

医学部

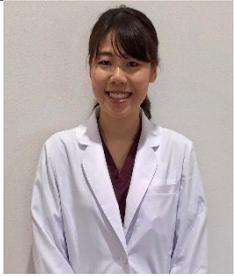
所属・職位	医学部 医学科 放射線医学講座・助教	
氏名	道津 剛明 (Dotsu Takeaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	画像診断、血管内治療全般
研究キーワード	血管内治療 スtentグラフト
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>① 大動脈stentグラフト治療の有効性や合併症に関する研究 (2019-)</p> <p>② 大動脈stentグラフト留置後のエンドリークに対する治療法開発 (2019-)</p> <p>③ タイプIbエンドリークの血行動態解析に基づいた治療法の選択 (2019-)</p> <p>④ 髄膜腫に対する至適塞栓物質の検討およびその有効性の確認 (2015-2016年)</p> <p>⑤ 硬膜動静脈瘻に対する治療法の検討 (2010-2019年)</p> <p>過去、脳神経領域を主として血管内治療全般的な研究を行ってきたが、現在は大動脈stentグラフトの研究を中心に行っており、2020年5月の日本インターベンショナルラジオロジー学会では大動脈stentグラフト留置後の合併症であるエンドリークタイプIbの血行動態解析や治療方法を解析、2021年4月の日本医学放射線学会総会ではエンドリークタイプIbに関する血管内治療および成績について報告を行った。</p>

所属・職位	医学部 医学科 臨床薬理学講座・助教	
氏名	中村 優佑 (Nakamura Yusuke)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		

研究分野	皮膚科学、臨床薬理学
研究キーワード	全身性強皮症、iPS細胞、低分子化合物、創薬
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>全身性強皮症患者由来iPS細胞を用いたモデルに対する抗線維化作用を有する低分子化合物の薬効評価に関する研究：</p> <p>全身性強皮症は、線維症の代表的な疾患で未だ有効な治療法が存在しない。</p> <p>全身性強皮症の疾患特異的iPS細胞を用いて薬効評価が可能な3次元in vitro細胞モデルを構築する。次にそのモデル系に対して当講座TCB(translational chemical biology)研究室で合成された細胞内タンパク質間相互作用を標的とした低分子化合物を加えることにより、その抗線維化作用効果を評価し、新規の抗線維化薬になりうるかを検討する。</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科総合診療・総合内科学講座・助教	
氏名	西水 翔子 (Nishimizu Shoko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	総合診療医学、家庭医療学
研究キーワード	高齢者医療、SDH、行動経済学、ソーシャルキャピタル
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>【研究内容】 高齢者が住み慣れた街で自分らしく過ごせる街創りを推進するために、フレイル、サルコペニア状態にある高齢者とその介護者をはじめとするご家族に対して、身体活動度の向上を目指すための認知行動療法を取り入れた教育活動を推進する。また、フレイル、サルコペニアを有する高齢者に対して認知行動療法を行うことのできる家庭医、総合診療医を育成するための教育プログラムを開発する。</p> <p>【アピールポイント】 現在、厚生労働省「総合的な診療能力を持つ医師の養成推進事業～総合診療医センター」を担当する助教として医学生、研修医の教育を行いながら、彼らとともに高齢者が住み続けられるまちづくりについて考え、またソーシャルキャピタルやアドボカシーが高齢者のQOL向上に如何に関与しているか質的研究を行っている。</p>

所属・職位	医学部 医学科 解剖学講座・助教	
氏名	二宮 遼 (Ninomiya Ryo)	
取得学位	修士 (医科学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		

研究分野	解剖学、細胞生物学
研究キーワード	ピロリ菌、胃がん、オルガノイド
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● ピロリ菌感染による胃炎および胃がんの発生機序の解明 ピロリ菌、特にCagAと呼ばれる毒素を持つピロリ菌は、胃炎や胃がんの発症に深く関与していることが報告されています。当研究室ではショウジョウバエを用いた遺伝学的スクリーニングにより、複数のCagA新規標的分子を同定することに成功しました。本プロジェクトでは、これらの標的分子について、マウスやヒトの胃組織、さらには胃組織幹細胞より作製したオルガノイドを駆使して解析を進めていき、新たな胃炎・胃がん発症機序の解明、および新規治療法の開発を目標とします。 ● 研究業績 (1) Ninomiya R et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. <i>Biochem. Biophys. Res. Commun.</i> 556, 192-198. (2) Iwasaki K, Ninomiya R et al (2018) Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of prostate cancer cells by activating expression of ephrin-B1. <i>Cancer Sci.</i> 109, 3159-3170.

医学部

所属・職位	医学部医学科 消化器・小児外科学講座・助教	
氏名	平下 禎二郎 (Hirashita Teijiro)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学
研究キーワード	膵癌、胆道癌、消化器外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> 膵癌や胆管癌における癌化や悪性度に関する研究(1) 膵癌を含む膵腫瘍や膵切除に関する研究(2-4) 急性膵炎、膵神経内分泌腫瘍、急性胆嚢炎、転移性肝がんなどの診療ガイドライン作成委員として活動(5) <ol style="list-style-type: none"> S6 ribosomal protein phosphorylation is associated with malignancy of I IPMN of the pancreas. Ann Gastroenterol Surg. 2020 Surgical and oncological outcomes of laparoscopic versus open radical antegrade modular pancreateosplenectomy for pancreatic ductal adenocarcinoma. Surg Today. 2022. How should we treat pancreatic metastases from renal cell carcinoma? A Meta-Analysis. World J Surg. 2021. Short internal pancreatic stent reduces pancreatic fistula in pancreatoduodenectomy. Langenbecks Arch Surg. 2021. JPN clinical practice guidelines 2021 with easy-to-understand explanations for the management of acute pancreatitis. J Hepatobiliary Pancreat Sci. 2022

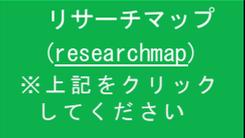
所属・職位	医学部 医学科 循環器内科・臨床検査診断学講座・助教	
氏名	廣田 慧 (Hirota Kei)	
取得学位	博士(医学)、大分大学、2023年12月	
SDGs目標	 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; text-align: center;"> <p>リサーチマップ (researchmap)</p> <p>※上記をクリック してください</p> </div> 	

研究分野	循環器学
研究キーワード	心房細動、左房低電位領域
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●左房低電位領域に関する研究</p> <p>難治性心房細動患者にはしばしば左房低電位領域が存在する。左房低電位領域は心房細動アブレーション後の再発予測因子として知られているが、簡便に左房低電位領域を予測する指標として心房内伝導時間の測定が有用であるとの報告を行った。</p> <p>Hirota K, et al. Interatrial conduction time is associated with left atrial low voltage area and predicts the recurrence after single atrial fibrillation ablation. J Arrhythm. 2023; 39:142-148.</p> <p>現在も心房細動の病態生理について研究を行っている。</p>

医学部

所属・職位	医学部消化器内科学講座・助教	
氏名	福田 健介 (KENSUKE FUKUDA)	
取得学位	医学博士 (大分大学)、2022年6月	
SDGs目標	 13 気候変動に 具体的な対策を	

研究分野	消化器内科学
研究キーワード	<i>Helicobacter Pylori</i> 、早期胃癌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>血清を用いたHPIg G、<i>H. pylori</i>の毒素であるCagAに対する血清抗CagA抗体価、PG I, II, I/II比を用いた研究を近年報告してきた。</p> <ol style="list-style-type: none"> Fukuda K, Kodama M, Mizukami K, Okamoto K, Ogawa R, Hirashita Y, Fukuda M, Togo K, Matsunari O, Okimoto T, Murakami K. Analysis of long-term serological and histological changes after eradication of <i>Helicobacter pylori</i>. <i>J Clin Biochem Nutr.</i> 71:151-157, 2022. (査読あり) (本研究において、HPIgGとPG I, II, I/II比の除菌後10年にわたる変化を報告した。) Kodama M, Okimoto T, Mizukami K, Fukuda K, Ogawa R, Okamoto K, Matsunari O, Kawahara Y, Hirashita Y, Murakami K. Differences in <i>Helicobacter pylori</i> and CagA antibody changes after eradication between subjects developing and not developing gastric cancer. <i>J Clin Biochem Nutr.</i> 65: 71-75, 2019. (査読あり) 国際学会として、The 17th Korea-Japan Joint Symposium on <i>Helicobacter Research</i>にて<i>H. pylori</i>除菌後のHPIgG, PG I, II, I/II比の推移に関し、シンポジストとして発表を行った。

所属・職位	医学部 医学科 脳神経外科学講座・助教		
氏名	札場 博貴 (Fudaba Hirofumi)		
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年6月		
SDGs目標	 3 すべての人に 健康と福祉を		 リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください

研究分野	脳腫瘍学
研究キーワード	腫瘍微小環境、ウイルス療法、画像診断、アドバンスケアプランニング
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●腫瘍微小環境、ウイルス療法に関する研究 中枢神経系原発悪性リンパ腫において、腫瘍辺縁に介在するマクロファージのSiglec-15発現が予後良好因子となることを見出した(<i>Sci Rep</i> 2021)。また、腫瘍溶解性単純ヘルペスウイルスを用い、悪性髄膜腫に対する有効性を検証している。 ●画像診断に関する研究 MRIによる新たな画像診断法(PASL)により、神経膠腫の分類や予後が術前予測できることを見出した(<i>AJNR</i> 2014. <i>World Neurosurg</i> 2021)。 ●アドバンスケアプランニングに関する研究 悪性脳腫瘍患者に対し、急性期病院におけるアドバンスケアプランニングの導入を行い、患者および家族のQOL改善に影響するか検証している。

医学部

所属・職位	医学部 医学科 公衆衛生・疫学講座・助教	
氏名	舩越 弥生 (Funakoshi Yayoi)	
取得学位	博士 (医学)、熊本大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	公衆衛生学、疫学
研究キーワード	栄養疫学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●骨密度を規定する生活習慣要因に関する疫学研究 栄養疫学を専門にしています。私のこれまでの研究成果では、生活習慣病は遺伝要因と環境要因の相互作用により発症することが明らかになっています。Relation of bone mineral density to vitamin D receptor gene polymorphism and lifestyle factors in Japanese female workers aged 22-44 years: a cross-sectional study.) 遺伝要因を変えることは出来ませんが、環境要因である食事、運動、休養、飲酒、喫煙などの行動を変容させるための方法について提供することが出来ます。</p> <p>疫学(Epidemiology)とは？</p>  <p>※関連リンク： https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=202101007178540260</p>

所属・職位	医学部附属地域医療学センター・助教	
氏名	堀之内 登 (Noboru Horinouchi)	
取得学位	社会健康医学修士 (専門職)、京都大学、2022年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	総合診療、ヘルスプロモーション、運動疫学、臨床疫学
研究キーワード	身体活動、認知行動療法、健康寿命、介護予防
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●高齢者介護予防のための身体活動増加に関する研究 運動による高齢者のヘルスプロモーションに関する臨床研究に取り組んでいる。高齢者の運動習慣を改善し身体活動を増やすための認知行動療法マニュアルを独自に開発し、パイロット研究によってその潜在的な有効性と実施可能性を示した。今後はランダム化比較試験で認知行動療法の身体活動量増加効果を検証する予定である。</p> <p>●システマティックレビュー・メタアナリシスにおけるエビデンスの質評価 1) Lin YH, Sahker E, Shinohara K, Horinouchi N, Ito M, Lelliott M, Cipriani A, Tomlinson A, Baethge C, Furukawa TA. <i>EClinicalMedicine</i>. 2022 ;50:101505. 2) Inayama Y, Takamatsu S, Hamanishi J, Mizuno K, Horinouchi N, Yamanoi K, Taki M, Murakami R, Yamaguchi K, Kosaka K, Efthimiou O, Kawakami K, Furukawa TA, Mandai M. [published online ahead of print, 2023 Jul 6]. <i>Obstetrics & Gynecology</i> ※研究業績などの詳細：https://researchmap.jp/generalpromotion</p>

医学部

所属・職位	医学部 医学科 環境・予防医学講座・助教	
氏名	松本 昂 (Matsumoto Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	感染症
研究キーワード	ゲノム解析、ヘリコバクター・ピロリ感染症、国際協力
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>アジア・アフリカ地域において現地政府および医療機関と連携し、公衆衛生上の課題となる感染症の制圧を目指す。次世代シーケンス技術によるヘリコバクター・ピロリのゲノム解析に取り組み、学部生、大学院生や海外若手研究者の育成に貢献する。AMEDとJICAが実施する地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) では、ブータン保健省王立疾病管理センターにおけるゲノム解析基盤および迅速検査キット製造のキャパシティ・ディベロップメントと社会実装を目標とする。</p> <p>【業績リンク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ research map: https://researchmap.jp/-oita-u%5Ematsumoto ・ research-er.jp: https://research-er.jp/researchers/view/589799 <p>【講座ホームページ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ https://oitadepm.com/
	

所属・職位	医学部 医学科 ヘルスケアAI・データサイエンス学講座・助教	
氏名	松延 佑将 (Matsunobu Yusuke)	
取得学位	博士 (保健学)、九州大学、2018年2月	
SDGs目標	  <div style="display: inline-block; vertical-align: top; margin-left: 20px;"> <p>リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリックしてください</p>  </div>	

研究分野	医用画像情報学
研究キーワード	医用画像処理、人工知能 (AI)、データサイエンス、Autopsy imaging
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●腹腔鏡下手術におけるAI活用に関する研究 腹腔鏡下手術の安全性向上のために、AIが解剖学的ランドマークを術中リアルタイム教示するシステムを開発している。 Aoyama Y, Matsunobu Y, et al. Artificial intelligence for surgical safety during laparoscopic gastrectomy for gastric cancer: Indication of anatomical landmarks related to postoperative pancreatic fistula using deep learning. Surgical Endoscopy, 2024 Oct; 38(10): 5601-5612.</p> <p>●Autopsy imaging (死亡時画像診断) を用いた身元確認に関する研究 ご遺体のX線画像やCT画像を用いて、生前データとのマッチングを行うシステムを開発している。 松延佑将 他. 人工知能を用いた死後CT画像における肺野の領域抽出. Rad Fan 20(3): 21-24, 2022</p>

医学部

所属・職位	医学部 医学科 呼吸器・感染症内科学講座・助教	
氏名	水上 絵理 (Mizukami Eri)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

研究分野	呼吸器内科一般・慢性閉塞性肺疾患
研究キーワード	慢性閉塞性肺疾患、間質性肺炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「慢性閉塞性肺疾患における胸部単純X線所見と重症度に関する検討」 胸部単純X線検査所見とスパイロメトリーにおける呼吸機能検査結果の相関性を検討し、新たなCOPDの評価方法を模索することを目的とした検討を行っている。この結果により、健康診断やプライマリ・ケアの段階でCOPDを発見およびコントロールできる一助となりうることを期待できる。</p> <p>「6分間歩行試験と間質性肺炎の自覚症状の関係性の検討」 超高齢化社会を迎え、90歳以上の間質性肺炎の患者数が増加傾向にある。高齢者のADLはもともと低下しており、呼吸困難の自覚症状と実際の呼吸状態が乖離していることも多い。高齢者の間質性肺炎の患者に積極的に6分間歩行試験を行い、解析を行うことにより実際の呼吸状態をより早く的確に判断できる可能性が高い。</p>

所属・職位	大分大学医学部 大分県糖尿病腎症重症化予防事業・助教	
氏名	宮本 昇太郎	
取得学位	学士 (医学部)、鹿児島大学 (2012年)	
SDGs目標	  7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに  リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください 	

研究分野	内分泌学 糖尿病学 救急医学
研究キーワード	糖尿病腎症、体組成、重症疾患関連副腎不全、CIRCI
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：糖尿病性腎症における体液貯留 (ECW/TBW) と腎機能低下の関係に着目し、早期の腎機能変化を可視化する研究を行っています。また、救急・集中治療領域での臨床経験を活かし、現在は内分泌・糖代謝の視点から敗血症関連副腎不全 (CIRCI) の診断法開発にも取り組んでいます (2024-2026年科研費・基盤研究C採択)。</p> <p>研究業績：英文総説 (Mini-review) 1報、コメンタリー1報、症例報告4報 (すべて筆頭著者) を執筆。</p> <p>代表論文：Miyamoto S, et al. Dopamine-Secreting Pheochromocytoma and Paraganglioma. J Endocr Soc. 2021;5(12):bvab163.</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学コース（講座）・助教			
氏名	安見 駿佑（ローマ字表記Yasumi Shunsuke）			
取得学位	学士			
SDGs目標		リサーチマップ (researchmap) ※上記をクリック してください		
研究分野	周産期学			
研究キーワード	無痛分娩、周産期予後改善			
研究内容・ 研究業績・ アピールポイント	●無痛分娩に関する研究			